



TITLE:

<2>学内連携

AUTHOR(S):

CITATION:

<2>学内連携. 京都大学高等教育叢書 2012, 31: 15-106

ISSUE DATE:

2012-03-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/154756>

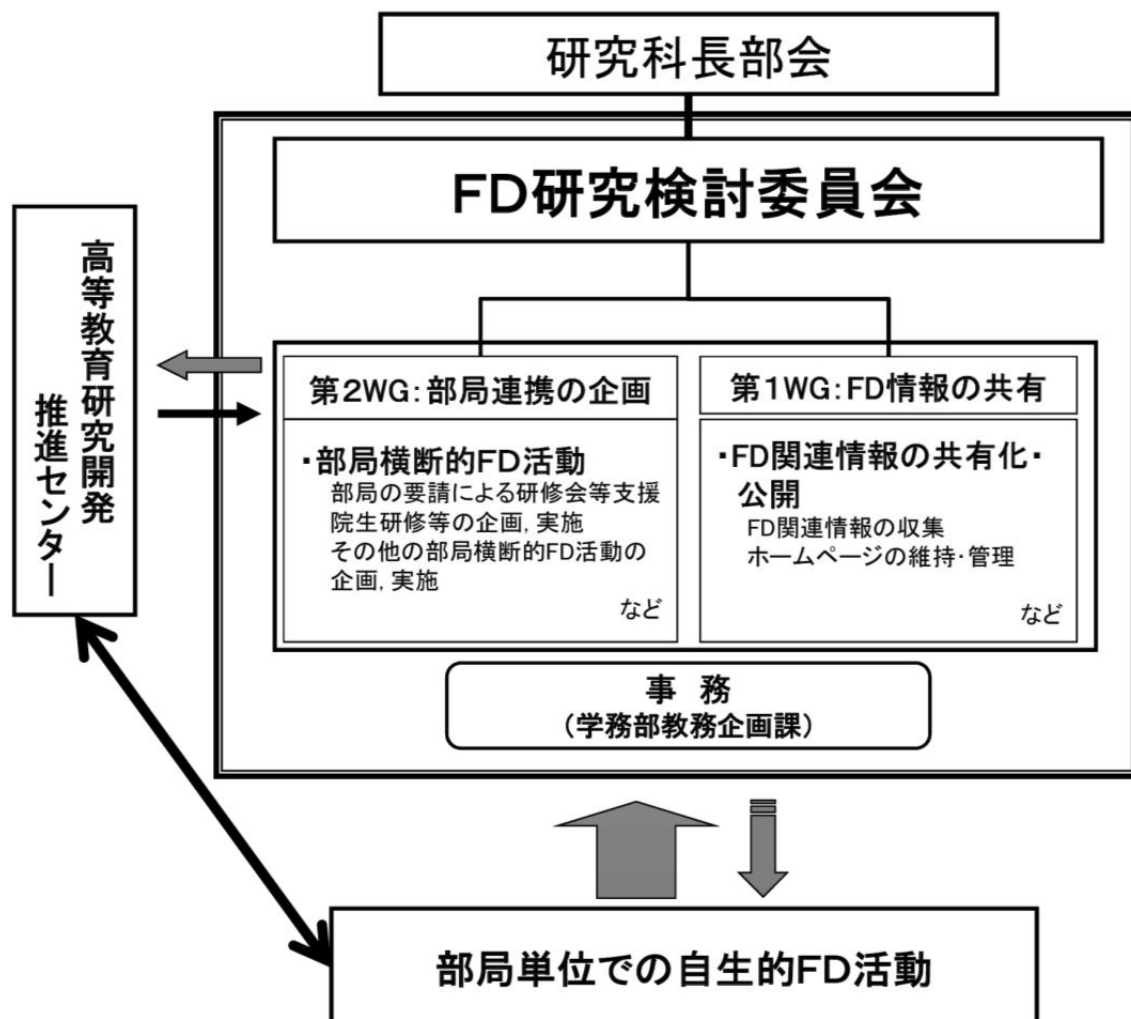
RIGHT:

II. 学内連携

II-1. FD 研究検討委員会

1. FD 研究検討委員会の概要

FD 研究検討委員会は、FD に関わる大学設置基準の改正（2008 年度）に先立ち、2006 年 12 月に発足した。本委員会の設置は、高等教育研究開発推進センターが 2006 年 7 月に、学部をもつ 10 の研究科を対象として、FD や教育改善に関わる活動状況やそれに対する支援の要望等についてヒアリング調査を実施したことにより、大きく促された。FD 研究検討委員会は、各研究科がそれぞれ実質的な教育改善活動に取り組んでおり、それらの取組に関する情報をお互いに共有することが有用であり、また、その場を通して、本学としてそれらの取組を組織化することが重要であるとの認識が共有され、本委員会の発足に結びついたと言える。従って、本委員会では、委員会からトップダウンで FD 活動を各研究科に対して強要するということは基本的にはせずに、FD に関わる情報収集・共有の場として位置づけることから、「FD 研究検討」という委員会名にしている。また、そのことを通じて FD を実施する際に何らかの支援を必要とする場合、あるいは、研究科横断的な FD 活動などのニーズが生じた際などに、高等教育研究開発推進センターが適宜支えるという体制をとっている。



委員会の当面の課題としては、当初、1) 各部局で実施されている FD 活動に関連する情報の集約、2) 他大学（外国の大学を含む）等で実施されている FD 活動等の情報提供、3) 公開研究会、勉強会等の開催、4) 各部局が企画する FD 活動への全学的支援体制の組織化、5) FD 関連情報のホームページ化、6) 「大学院生のための教育実践講座（プレ FD）」の開催、7) 本委員会の自己点検・評価の実施、以上 7 項目が取り上げられ、これらの課題を実行するため、ワーキンググループ（以下、WG）を発足させ各種課題に取り組んできた。WG は、FD 研究検討委員会と高等教育研究開発推進センターのスタッフで構成される少人数のグループから成り、情報の収集と提供、とりわけ、ホームページの維持管理をミッションとする第 1WG、および、部局の FD 活動や部局横断型 FD 活動の支援をミッションとする第 2WG の二つで構成された。なお、委員会の活動全般は、事務的には、学務部教務企画課によって所掌されている。

2. FD 研究検討委員会の 2011 年度の活動概要

FD 研究検討委員会の活動は、二つの WG を中心とした活動の他、委員会としての活動の三つのレベルで行われてきている。

第 1WG では、FD 研究検討委員会のホームページを開設 (<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/>) し、委員会の活動に関わる資料や記録、また、各部局の FD や教育改善関係の資料等を収集し、それらはホームページ上で参照することができる。

第 2WG では、高等教育研究開発推進センターとの共催の形をとりながら、プレ FD、公開授業・検討会、部局 FD 活動支援、『京都大学の FD』の刊行などを行ってきている。

委員会全体では、2010 年度より開始された、新任教員教育セミナー、FD 研究検討委員自身を対象とする勉強会などが行われている。

2011 年度に関しては、以下のような活動が行われている。

① 第 1WG の活動

◇ホームページの充実

FD 研究検討委員会主催、あるいは、部局等との共催の FD 活動が、ホームページに公開され、情報共有が図られている。また、2011 年度に開催された FD 研究検討委員会の勉強会で持ち寄られた各部局で行われている授業評価アンケートなどのアーカイブも設置されている (<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/session/post04.php>)。

◇自学自習調査

京都大学の学生の学習実態を明らかにするための調査を実施した。主として KULASIS を利用して、Web 調査として、2011 年 11 月に実施した。回答者数は、1 回生（1,221 名）、2 回生（945 名）、3 回生（562 名）、計 2,728 名、4 回生（270 名）であった。2012 年 2 月 24 日の FD 研究検討委員会勉強会にて、速報の報告が行われた。

② 第 2WG の活動

◇大学院生のための教育実践講座（第 7 回）

2011 年 8 月 4 日（水）10:00～18:30 に、京都大学百周年時計台記念館 2 階の国際交流ホール、および、会議室を利用して実施された。今までで最高の Basic コース 53 名、Advanced コース 13 名の計 66 名が参加している。コース履修者には総長の修了証が授与される。詳しくは、II-4. を参照されたい。

◇文学研究科プレFDプロジェクト

文学研究科では、2009年度より、哲学基礎文化学系ゼミナール、基礎現代文化学系ゼミナール、また、2010年度より、行動・環境文化学系ゼミナール等で、オーバードクター（OD）の若手研究者の学部学生を対象としたリレー講義を、公開授業・検討会として2011年度も引き続き実施している。リレー講義担当講師は相互に参観し、自分の授業実施も含めて、8回以上の授業に参加すること、および、2012年2月23日（木）13:00～18:30に行われた研修会に参加することを前提として、総長の修了証がやはり授与される。詳しくは、II-3. を参照されたい。

◇公開授業・検討会

高等教育研究開発推進センターで始めたのが起源と言われる「公開授業・検討会」は、授業参観後、1時間程度の短い時間であるが、授業検討会を、担当講師と授業参観者で行うことが特徴の一つとなっている。2011年度は、FD研究検討委員会を通じて実施した公開授業・検討会は、前期2011年7月12日（火）16:30～18:00・検討会18:15～19:15に実施された、稲葉理江子情報学研究科情報教育推進センター特定講師による、全学共通科目・複数科目群（A・B群）『情報と教育』、また、後期2011年11月1日（火）10:30～12:00・検討会12:15～13:15に実施された、酒井博之高等教育研究開発推進センター特定准教授による、全学共通科目・複数科目群（A・B群）『音響心理学概論』の二つの授業で行った。詳しくは、II-2. を参照されたい。

なお、K.U.PROFILE との連携の下、2011年12月22日（木）8:45～10:15に、溝上慎一高等教育研究開発推進センター准教授によるKUINEP授業『Self-formation in Adolescence』の英語による公開授業・検討会を行った。

◇工学部教育シンポジウム

工学部教育シンポジウムが2011年12月2日（金）16:30～19:00に、京都大学桂キャンパスの桂ホールにて行われた。「私の授業」と題して、自らの授業の紹介があった他、高等教育研究開発推進センターより、最近の大学教育に関する動向、高等教育研究開発推進機構が行っている2回生進級時アンケートの工学部に関する結果の推移について話題提供を行った。詳しくは、II-6. を参照されたい。

◇『京都大学のFD2011』の発刊

京都大学のFD活動のさらなる情報共有のため、また、アカウントビリティを示す資料の一つと位置づけられるニューズレター『京大のFD2011』を発刊した。

③ 委員会全体の活動

◇新任教員教育セミナー

2010年度より開始された新任教員教育セミナーが、本年度も2011年9月1日（木）13:00～18:30、百周年時計台記念館2階で実施された。ミニ講義、「私の授業」の紹介、グループ討論などが盛り込まれたプログラムに、新任教員57名の熱心な参加があった。詳しくは、II-5. を参照されたい。

◇FD研究検討委員会「勉強会」

FD研究検討委員会では、高等教育の動向に関わる情報共有や京都大学内の各部局で取り組まれているFD活動の情報交換を図るために、2010年度より「勉強会」を行っている。

本年度は、2011年7月7日（木）10:00～12:00、吉田南1号館共106室にて、通算第4回の勉強会を開催した。そこでは、各部局の授業評価の現状と課題について、各委員から報告があり、出席者間で情報共有を行った。各部局の授業評価の用紙は、<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/>

[session/post04.php](#) よりダウンロードできる。また、事前アンケートの集計結果も同 URL より、参照することが可能である。

さらに、2012 年 2 月 24 日（金）13:30～、吉田南 1 号館共 106 室にて、通算第 5 回勉強会として、本年度実施した自学自習実態調査の結果が、高等教育研究開発推進センター溝上慎一准教授より報告され、質疑が行われている。

（大塚 雄作）



II-2. 公開授業・検討会

1. はじめに

平成 23 年度は前期に 1 回、後期に 1 回、計 2 回の公開授業・検討会を実施した。この公開授業・検討会は、京都大学 FD 研究検討委員会の主催による全学的な FD 活動であり、本センターでは、「大学教員教育研修のためのモデル拠点形成」プロジェクトにおける「学内連携」の一環としてこれを支援している。本節では、各回の授業の概要を記すとともに、授業とそれに続く検討会の様子を写真で紹介する。

2. 第 1 回 全学共通教育科目 A・B 群『情報と教育』（講義）

稲葉 利江子 特定講師（情報学研究科）

日時：平成 23 年 7 月 12 日（火）5 時限

公開授業 16:30～18:00（吉田南構内 学術情報メディアセンター201 教室）

検討会 18:15～19:15（吉田南構内 学術情報メディアセンター1 階会議室）

<授業のみどころ>

情報化社会となった今、社会の中では様々な情報技術が利用され、多大な影響を及ぼしている。本授業では、情報技術と教育との接点について e-Learning、e-exhibition、子どもと教育を中心として取り上げる。公開した授業は、第 13 回目の授業で「子どもと教育」のトピックの初回の授業である。初等中等教育における情報科学教育について、学習指導要領、カリキュラムなどの現状を理解してもらい、その中で特徴的な情報教育活動を行っている事例として、コンピュータ・サイエンス・アンプラグド、Visual language を取り上げた。

<授業・検討会の様子>



3. 第2回 全学共通教育科目 A・B 群『音響心理学概論』（講義） 酒井 博之 特定准教授（高等教育研究開発推進センター）

日時：平成23年11月1日（火）2時限

公開授業 10:30～12:00（吉田南構内 吉田南1号館1共23教室）

検討会 12:15～13:15（吉田南構内 吉田南1号館201教室）

<授業のみどころ>

この概論講義は、定員25名程度の小規模な演習室を用いて、音が聴こえるという現象を、聴覚心理学の知見にもとづき概説するものである。主要な音響心理現象について音の物理的性質と主観的性質の関連について学び、さらに実際の音響空間などへの適用例を扱う。公開した授業は第4回目の授業であった。初回のガイダンスに続き、過去2回の授業では、音響心理学を学ぶ前提となる「音の物理的性質」「聴覚系の構造と機能」の基礎的内容を扱った。今回の授業の前半は「聴覚系の構造と機能」の残りの内容を、後半より「音の大きさの知覚」を題材に音響心理学の導入となる内容を扱った。

<授業・検討会の様子>



（高橋 雄介）

II-3. プレ FD プロジェクト

II-3-1. 文学研究科プレ FD プロジェクト

1. 文学研究科プレ FD プロジェクトの概要

1-1. プレ FD とは何か

プレ FD とは PFF (Preparing Future Faculty) プログラムとも呼ばれ、大学教員のキャリアに向けて大学院生（主に博士課程学生。ポスドクも含む）を準備させることである。日本国内でも、研究大学を中心として様々な取り組みが見られるようになった。大学教員の職務を教育、研究、社会貢献、管理・運営に分類した場合、プレ FD は本来、それぞれの役割に関する理解、知識や技術の獲得、あるいは意欲や信念の醸成などをめざすものであるが、とりわけ大学教育への準備を意図した取り組みが近年の課題となっている。本学での取り組みもその一つである（半澤礼之・田川千尋・田口真奈・松下佳代・田林千尋・小城拓理・溝上宏美・杉山卓史, 2011）。

1-2. 文学研究科プレ FD プロジェクト

文学研究科プレ FD プロジェクトは、文学研究科と FD 研究検討委員会が共同で主催する文学研究科のオーバードクター (OD) によるリレー講義形式のゼミナールであり、公開授業とその検討会、そして学期末の研修会によって構成されている。具体的には、全ての授業を公開とし、毎回の授業終了後 20 分程度の授業検討会を行う。一人の講師は 2 回から 5 回の授業を行い、自分の授業が無い時には他の講師の授業を参観、検討会への出席という形でゼミナールに参加する。半期の授業が全て終了した段階で研修会を行い、自分自身の教育活動を振り返る作業を行う。この一連の流れが文学研究科プレ FD プロジェクトである（図 1）（半澤ほか, 2011）。また、2011 年度より事前研修会を導入し、本プロジェクトの概要や実際について、プロジェクト参加者に事前に周知する機会を設けた。この事前研修会は、これまでのプロジェクト参加者から開催の要望が出ていたものであり、参加者のニーズをプロジェクトに反映させたものだと見える。

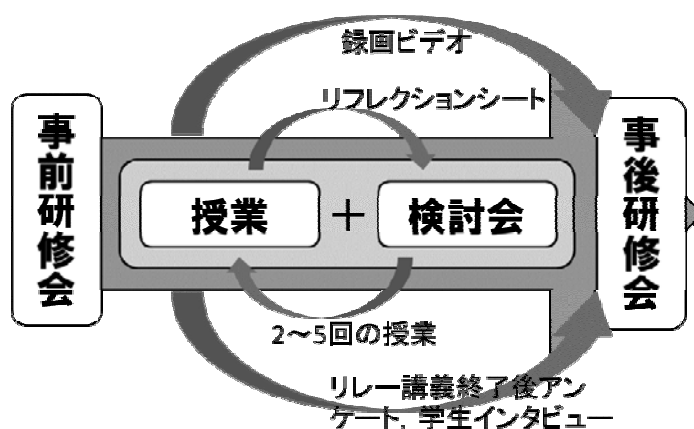


図 1. 文学研究科プレ FD プロジェクトの流れ (2011 年度)

1-3. 2011 年度文学研究科プレ FD プロジェクトスケジュール

1-3-1. 前期スケジュール

文学研究科プレ FD プロジェクト事前研修会

2011 年 4 月 4 日 京都大学文学部東館

<プログラム>

第 1 部：プロジェクトの全体像をつかむ

- スタッフの自己紹介
- 挨拶（文学研究科教授 永井 和）
- 文学研究科プレ FD プロジェクトの概要説明（文学研究科教授 福谷 茂）
- 昨年度の授業ビデオ視聴（高等教育研究開発推進センター特定助教 半澤礼之）
- プレ FD プロジェクトに参加した先輩の声（文学研究科教務補佐員 小城拓理・田林千尋・溝上宏美）（資料 1）

第 2 部 ミニ講義

- 「授業のデザインと振り返りーワークシートの活用ー」（高等教育研究開発推進センター教授 松下佳代）

第 3 部 系ごとのディスカッション

- 評価基準について
- コースデザインについて

哲学基礎文科系ゼミナール

2011 年 4 月 21 日～7 月 14 日、毎週木曜日 2 時限

検討会 12:00～12:20

<授業テーマ>

呉羽 真	心はどこにあるのか：認知哲学入門
周藤多紀	西洋中世における「嘘」：西洋中世言語思想入門
杉本俊介	「ビジネスにおける道徳」とは何か：ビジネス倫理学入門
鄭 賢娥	1950 年代日本のリアリズム絵画ーリアリズムの本質とその可能性

基礎現代文化学系ゼミナール

2011 年 4 月 14 日～7 月 28 日 毎週木曜日 5 時限

検討会 18:00～18:20

<授業テーマ>

井上 治	近代日本における芸道思想の展開
川寄 陽	植民地朝鮮と戦争動員
佐藤夏樹	ラティーノアイデンティティの形成
溝上宏美	イングランド女性は移民をどうとらえたか？ー多文化化するイギリスと自己像の変容
網谷裕一	理性と進化

1-3-2. 後期スケジュール

行動・環境文化学系ゼミナール

2011 年 10 月 6 日～2012 年 2 月 2 日 毎週木曜日 1 時限

検討会 10:20～10:40

<授業テーマ>

松本 亮	言語類型論
江南健志	山村の社会学
シルビア・スタニアク	意味論と語用論
山本理子	アジアの主婦とメイド雇用
翁 和美	認知症患者の社会学
森田次朗	オルタナティブ・スクールを事例とした社会学
宋 基燦	在日コリアンの民族教育

哲学基礎文科系ゼミナール

2011 年 10 月 13 日～2012 年 1 月 19 日 毎週木曜日 2 時限

検討会 12:00～12:20

<授業テーマ>

田中一孝	古代ギリシアにおける文芸理論と「芸術」思想
日高 明	「純粹経験」の意義：西田哲学入門
田鍋良臣・古荘匡義	現象学運動の展開と宗教哲学
濱崎雅孝	「神は死んだ」のか？－ポストモダンのキリスト教

基礎現代文化学系ゼミナール

2011 年 10 月 13 日～2012 年 1 月 26 日 5 時限

検討会 18:00～18:20

<授業テーマ>

杉本 舞	「世界最初のコンピュータ」とは？：コンピューティング史入門
中尾 央	規範と罰の深化について
富永 望	イギリスからみた戦後天皇制
小野容照	「野球」を通して考える朝鮮半島の近代

1-4. 2011 年度文学研究科プレ FD プロジェクト研修会

2011 年度の文学研究科プレ FD プロジェクト研修会は、2012 年 2 月 23 日に開催された。例年は前期・後期の二度に分けて研修会を行うが、本年度は研修会対象者が少数であったため、通年で一度の開催となった

1-4-1. 研修会（2012 年 2 月 23 日） 京都大学吉田南 1 号館

表 1. 研修会プログラム

13:30 開会式 開会の挨拶：FD 研究検討委員会委員長 教授 田中每実 司会：高等教育研究開発推進センター 特定助教 田川千尋
13:35 セッション 1：自己紹介 参加者の自己紹介と公開講座を担当しての感想
13:55 セッション 2：ビデオ視聴 講義ビデオの視聴
14:10 セッション 3：講義の振り返り

<p>ワークシートを用いた講義の振り返り 高等教育研究開発推進センター 准教授 田口真奈</p>
<p>14:35 セッション 4：学生の声の紹介 受講生に対するインタビュー結果の紹介 文学研究科教務補佐員 小城拓理・田林千尋・溝上宏美 高等教育研究開発推進センター 特定助教 半澤礼之</p>
<p>14:55 セッション 5:ミニ講義 「大学授業をどう創るか」 高等教育研究開発推進センター 教授 松下佳代</p> <p>15:20 休憩 ・ 移動</p>
<p>15:30 セッション 6:グループディスカッション グループディスカッション (30 分) テーマ 1：「学生の多様性にどのように対応するのか」 テーマ 2：「学生をどう授業に巻き込むのか」 テーマ 3：「学びを促す授業デザイン」 ミニミニ講義 (5 分) テーマ 1：高等教育研究開発推進センター 准教授 田口真奈 テーマ 2：高等教育研究開発推進センター 特定助教 半澤礼之 テーマ 3：高等教育研究開発推進センター 特定研究員 坂本尚志 グループのまとめ (20 分)</p>
<p>16:25 セッション 7:全体ディスカッション&まとめ 司会：高等教育研究開発推進センター 准教授 田口真奈</p>
<p>17:00 閉会式 閉会の挨拶：文学研究科長 教授 佐藤昭裕 修了証授与：FD 研究検討委員会委員長 教授 田中每実</p>
<p>17:15 情報交換会</p>

2. 文学研究科プレ FD プロジェクトを振り返って:文学研究科のコーディネーターから

本プロジェクトは、3つの系が開講するゼミナールをプレ FD の対象としており、文学研究科の福谷茂教授がその3系を束ねるコーディネーターとして全体の統括を行っている。以下にコーディネーターによる本プロジェクトの振り返りを示す。

もともと文学部は FD という発想にはなじみにくいところだった。元来が少人数教育の場であり、技術的な問題を度外視してしまうのが文学部的だったのである。研究者としての自覚が教育者としての自覚をうまく育てなかった、またそれでよしとしてきたのが文学部である。

こうしたなか FD が、しかもよそに例のないプレ FD という形態で文学部を舞台にして毎年実施されているのは、初年度において制度設計をされた文学部側出口康夫先生と高等教育研究開発センターの先生方の英知の賜物であり、日々の運用を支えてくれる教務補佐員たちの有能さのおかげだというほかない。縁あって初年度以来見守ってきた私にとっては自分にもっとも

欠けているものに直面する思いであった。真剣に準備し授業する OD たち、かなり難しい講義に「先輩を鍛える」ために出席し、毎回リフレクション・シートを書き、時にはインタビューに応じる学部生たち、これはなかなか感動的な光景である。ぜひ参観していただくことをお勧めする次第である。

(文学研究科教授 福谷 茂)

3. 本プロジェクトに対する学生からの評価：学生インタビューから

3-1. 学生インタビューの概要

2011 年 7 月～2012 年 1 月にかけて、本プロジェクトの講義を受講した学生に対して、学生の視点からの評価を尋ねることを目的としたインタビュー調査を行った。インタビューは表 2 に示した質問項目に従う形で行われ、インタビューのまとめにあたっては、高等教育研究開発推進センター事務補佐員古橋千恵氏、寺井佐加恵氏にご協力頂いた。

表 2. インタビュー質問項目

学生の情報	受講した講義名と時期（前期 or 後期）。単位は取得できたか（できそうか）。
受講動機	何故この授業を履修しようと考えたのか。
総括	受講してみたの、全体的な感想。
学習活動	この授業に対してどのように取り組んだのか。意識と行動。
他の授業との比較	上の学習活動は、他の授業と同じであったか否か。またその理由
講義への肯定的評価	受講してよかった・正解だったと感じられた点とその理由
改善策の提案	良かった点・正解だったと感じられた点を更に伸ばすには今後どのようなことをすればよいと思うか。
講義への否定的評価	受講して悪かった・失敗だったと感じられた点とその理由。
改善策の提案	悪かった・失敗だったと感じられた点は、今後どうしていけばよいと思うか。
成果	この授業を通してどんなことを学ぶことができたと思うか。またその理由。
お勧め度	友人にこの授業の履修を勧めたいかどうか。またその理由。
学業観	大学生活全体を考えた時に、“自分にとって”勉強はどのような位置を占めているのか（この授業だけに限らない）。またその理由。
文学部全体の授業に対する意見	文学部の授業をどのように捉えているのか。また、そのような授業に対してどのように取り組んでいるのか。
学生の情報（学生の将来展望	現時点での進路の見通し（進学か就職か）。

3-2. 学生インタビューの結果

■ Aさん：基礎現代文化学系ゼミナール履修（女性、2回生）

【学生の情報】

学生は前期の基礎現代文化学系リレー講義を受講した。レポートはすべて提出したが、出席が十分ではないため、単位が取れるかどうかはわからない状態である。

【受講動機】

もともと哲学を専攻しようと思っていたので、基礎現代文科学系には興味がなかったが、友人から、1回生向けの初歩的な内容を取り上げてくれるという話を聞き、履修することにした。

【総括】

内容に興味を持てる授業もあったが、もう少し学生を巻き込むような授業をしてくれた方が私はよかった。

【学習活動】

インターンシップに参加しているため、出席できないことがあった。授業は関心を持って聞いている。

【他の授業との比較】

リフレクション・シートは他の授業では経験したことがなかったので驚いた。

【講義への肯定的評価】

様々な話を聞けたり、参考文献をもとに自分で勉強をしたりすることができるので、今まで自分が知らなかった研究の切り口や分野の多様性を知ることができたのがよかった。また、参加型の授業を行った先生の授業については、とても興味をもって聴くことができた。

【改善策の提案】

特に無い。

【講義への否定的評価】

先生によって、話し方に熱意や明るさを感じることができない人がいて、その点で授業に興味を持てなくなる時があった。

【改善策の提案】

話し方を変えてもらえるとよい。

【成果】

興味・関心を持って聴くことのできた授業については、知識としてしっかり身につけている。

【お勧め度】

自分のやりたいことがわかっていなかったり、自分が興味ない分野でも、きちんと自分の意見を明確に持っておきたいという考えがあれば、それができるきっかけにはなると思うので、勧めると思う。

【学業観】

生活の中心だと考えることもできる。勉強とか授業というのは、生活を織りなすものの一要素として、位置づいている。

【文学部全体の授業に対する意見】

現在履修している授業に関しては、内容によって様々。一斉講義型もあれば参加型もある。自分は参加型の方がよい。

【学生の情報（学生の将来展望）】

将来大学院に行くことはなく、就職する。

■ Bさん：哲学基礎文化学系ゼミナール履修（男性、2回生）

【学生の情報】

後期の哲学基礎文化学系ゼミナールを履修。単位はこのままいけば取れる予定。授業には全て出席している。

【受講動機】

自分自身は心理学専攻だが、2回生から取れる専門の授業というのが限られていて、空いたコマに入れる自分の専門以外の授業について迷っていた。その時、この1回生・2回生用の基礎ゼミナールを見つけて、特に哲学は興味があったので履修した。

【総括】

面白かった。まだ若い教員が授業担当であったため、普段の授業と違った感じを受けて新鮮さがあった。知識のない分野について、その入り口がひらけたと思う。

【学習活動】

欠席をせず、授業は熱心に聴いていた。関心のある内容については図書館で調べて本を読んだ。

【他の授業との比較】

少し応用的な内容が聞けたと思う。

【講義への肯定的評価】

リフレクション・シートはとてもよいと思う。教員の中は、それを使って受講生の対立する意見同士を出してきて、次のテーマにつなげるといった進め方をしている人もいて、すごいなと思った。また、リレー講義という形式は、様々なテーマの話が聞けてよい。自分は広く浅くという形が好きなので、楽しかった。加えて、レジュメもしっかり作成されており、その点もよかった。

【改善策の提案】

特になし。

【講義への否定的評価】

質問やリフレクションシートで他の受講生の意見が出た際に、それを次の授業で紹介してもらって、そこから議論を広げていったらもっと面白くなるのではないかと思う。そういう教員もいたが、もっとその取り組みが広まってほしい。また、各テーマについて概説をするだけでなく、教員自身が考える結論を述べてもらえると、教員の考えが伝わってきてよかったと思う。

【改善策の提案】

多くの教員にそのやり方を取り入れてほしい。

【成果】

哲学的な考え方というものがどういうものなのかということが学べそうである。今の段階では完全に学べたとは決して言いきれない。この授業を糸口にして学べて行けたらと今の段階では思っている。

【お勧め度】

まず概論的なことを知る上では履修して損はないと思う。

【学業観】

大学院志望であるため、勉強は自分の生活の中心である。

【文学部全体の授業に対する意見】

このリレー講義より、ほかの文学部の授業の方がやる気がないと感じる先生が多い。

【学生の情報（学生の将来展望）】

大学院進学を希望している。

■ Cさん：哲学基礎文化学系ゼミナール履修（男性、1回生）

【学生の情報】

前期の哲学基礎文化学系ゼミナールを履修。全ての授業に出席し、レポートも提出した。

【受講動機】

全学共通科目でも哲学系の授業はあったが、正直期待していたのとは違っていた。このリレー講義は、若い先生たちが担当するという点に興味をもったのと、初回の授業が面白そうだったので、履修することに決めた。

【総括】

興味があったので、どの授業も楽しめた。研究している人から見た視点と、自分が本で読んでいた視点が違ったりといった経験もできた。深いところまで知ることができて、全般的に面白かった。今期履修している授業の中では一番楽しみにしていた授業であったと言ってもよい。

【学習活動】

全ての授業に出席した。授業も熱心に聴いていたが、この授業に関して特に授業外で勉強したということはない。

【他の授業との比較】

他の授業と大きくは変わらない。ただ、おしゃべりしている人がいないのはよい。

【講義への肯定的評価】

知的に刺激された点と、全学共通教育と異なり自分の研究成果を発表しているということで、最先端のことを知ることができるという点がよかった。

【改善策の提案】

特になし。

【講義への否定的評価】

否定的評価というほどではないが、哲学は難解なところがあるので、一人当たりの授業をもう一回ずつくらい増やしてもらえるとありがたいと思う。

【改善策の提案】

一人当たりの授業回数の増加。

【成果】

一般教養では、本を読めばわかるような浅い内容しか取り上げないので、深いところまで知ることができたのはよかった。

【お勧め度】

興味がある人ならよいが、興味のない人には勧めない。

【学業観】

もともと研究者志望で大学進学をしたので、大学生活の中で最上位である。

【文学部全体の授業に対する意見】

まだ履修していないのでわからない。

【学生の情報（学生の将来展望）】

大学院進学を希望している。

3-3. 学生インタビューから見えてくるもの

以上の学生インタビューの結果から、学生は本プロジェクトのリレー講義を肯定的に評価していること、また、そこから知的な刺激を受けていることがわかる。表3は、2009年度後期、2010年度前期・後期に行ったインタビューの結果を整理したものであるが（半澤・田口・田川・松下, 2011）、本年度のインタビュー結果も、これまでのインタビューによって明らかになった知見の範囲内のものであると考えることができるだろう。

表 3. 2009～2010 年度のインタビュー結果の整理（半澤・田口・田川・松下, 2011）

カテゴリーグループ	大カテゴリー	小カテゴリー	発話例
リレー講義への評価	内容的側面	最新の研究に触れる	「最新の研究、何をやっているのかわかって、それはすごく興味深かったですね」
		教養が深まる	「教養として話を聴くという姿勢で臨めるというか。教養を得られる感じではありますね」
	形式的側面	単位取得	「単位が取れそうだなっていう。まあ、ちゃんと出席して出せば、単位が取れそうな授業だなって思ったのもありますけど」
		他の授業との比較	「こういう少人数の形式で実際のやりとりもしやすく、しやすい環境で、そういう点では全体、大人数で受ける全学共通科目で受けるような科目とはまた違ったような趣があるというように思います」

	若手であること	教員との距離	「距離はやっぱ、近いかなあという感じはします」「若手であることのメリットは感じなかった」
		教員の授業に対する熱心さ	「ちゃんとした教授よりは熱心に資料とかを作ってはるなあという印象があって、そこはちょっと良かったなあって思いました」
受講態度と行動	学問追求	大学院進学	「僕は一応、大学院に行きたいなとは思ってるんですけど。そういう意味で、若手の研究者の方の研究内容って言うのは興味がありましたね」
		学問への興味・関心	「この授業を受けることで、哲学的に考えるということがどういうことなんかっていうのを、実際に考えていらっしゃる先生方の言葉なり、姿勢なりを、直接的にその感じることによって、哲学が学びやすくなったんじゃないかなと思っています」
	専門選択		「専攻が決まっていない時に、このいろんな先生の、いろんな分野の話を聞けるというのは参考になるかなというのはやっぱり思ったので」
	教養		「学問を究めたいとまでは思っていないですけど、できるだけ教養というか、いろんなことを知っておきたいと思っているので」
	テレビ視聴的		「授業内容はすぐに忘れてしまうと思います[中略]でも、90 分楽しませてくれればそれでいいです」

この学生に対するインタビュー調査は、本プロジェクトが始まった 2009 年度後期から 3 年にわたって行われてきた。インタビュー調査の目的は、リフレクション・シートでは拾いきれない受講生の声を集め、それを本プロジェクトの参加者である OD・PD にフィードバックすること、そして、学生の声を通じた OD・PD の授業のリフレクションを促すことであったといえる。上記のように、3 年間のインタビュー調査によって、受講生の傾向が一定程度把握できたと考えられる。今後は、このインタビュー調査の結果をもとにした無記名のアンケート調査といった、少数の受講生ではなく、より多くの受講生を対象とした調査を設計する必要があるだろう。多くの受講生を対象にしてその声を集め、それを本プロジェクトに参加する OD や PD にフィードバックすることによって、学生の声を通じた授業のリフレクションがより促進されることが考えられる。

4. おわりに

オーバードクターを対象としたFD（プレFD）という本プロジェクトは、全国的に広がりを見せている活動ではあるものの、まだ試行段階にあるといえる。本プロジェクトに参加したODからのコメントや文学研究科スタッフの声、そして講義を受講した学生の声といった、2011年度の活動によって得られた様々な視点を生かして更に本プロジェクトを良いものにしていくことが、2012年度の課題であるといえるだろう。

引用文献

半澤礼之・田川千尋・田口真奈・松下佳代・田林千尋・小城拓理・溝上宏美・杉山卓史（2011）．
文学研究科プレFDプロジェクト 京都大学高等教育叢書 29 相互研修型FD拠点活動報告
2010, 37-56

半澤礼之・田口真奈・田川千尋・松下佳代・（2011）． 学習者の多様性に基づく授業のリフレ
クションー京都大学文学研究科プレFDプロジェクトからー 京都大学高等教育研究 17,
123-133

（半澤 礼之、高橋 雄介、田川 千尋、坂本 尚志、田口 真奈、松下 佳代）

＝ 2011年度 文学研究科ブレFD 事前研修会 ＝

2011.4.4

**授業のデザインと振り返り
ーワークシートの活用ー**

松下 佳代
京都大学・高等教育研究開発推進センター
kmatsu@hedu.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

1

1. 授業を創る

- 授業の階層性
 - プログラム（4年間）
 - └ コース（半期）
 - └ 授業（1コマ）

…教員集団

…教員個人

授業を創る

- 授業を創る
 - (a) コースデザイン：1コース（半期）の授業
 - (b) 授業デザイン：1時間の授業

2

2. 今回のリレー講義

- コース（科目）の性格
 - 学部共通科目
 - 受講生：1～4回生（1～2回生中心の入門科目）
 - 授業形態：指定なし → 自由度が高い
 - 担当：リレー講義 → 担当者によってバラバラになりがち

↓

- コースについてのコンセンサスが必要 → 第3部
 - 評価基準
 - 授業にもりこむべき内容
 - 授業間の関連 など

3

3. 授業デザイン

- 授業をデザインするために
 - 「知のたのしみ 学へのよこび」を伝えることは重要
but 授業≠自分の研究のアウトリーチ活動
 - learningが生起しなければteachingとはいえない
 - 何を・どう教えるか → 何を・どう学んだか
 - 知識中心 → 知識と能力
 - <テレビ視聴的授業>ではなく、<学生がコミットし、学生に深い学習を引き起こすような授業>を
 - 講義は動機づけと能力が高い学生には有効だが…
 - 大学院に進学するのではない学生も視野に

4

- 「授業デザインワークシート」 → 別紙、事例
 - 授業デザインのためのツール
 - 自分の担当回の授業すべてについて作成

5

3.1 授業の構成要素

- 「授業デザイン用ワークシート」の各カテゴリー
(cf. Engeström, 1994)

- 授業の構成要素
 - 時間
 - 内容
 - 教授機能
 - 授業形態
 - 集団様式
 - 教材
 - ツール
 - (メモ)

教材、ツール
媒介

日常世界 学問世界

学習者 対象

授業形態

内容

集団様式

6

3.2 授業のプロセス

- 「授業デザイン用ワークシート」のタテの流れ
- 授業のプロセス
 - 教授機能を実現していくプロセス
 - 日常世界と学問世界を橋渡しするイメージ
 - 日常世界の現象・問題 の認識
 - ↓
 - 学問世界の概念・原理 の理解
 - ↓
 - 日常世界の現象・問題 の解釈・解決
 - この授業を通じて、何を知り(知識)、何ができるように(能力) なってほしいか？

7

4. 授業の振り返り

- 「授業振り返り用ワークシート」 → 別紙、事例
 - 授業の振り返りのためのツール
 - 基本的には、「授業デザインワークシート」と同じ
 - 違いは、「メモ」と「気づいた点」のみ
 - 自分の行った授業のうちの1回について、DVDを見ながら作成
- 「担当授業後アンケート」

8

5. スケジュール

2011年度

- 4/4 事前研修会
 - 研修会終了後 MLでワークシート(2種類)とアンケートを配布
 - 授業1 学生のリフレクションシートを返却
 - 授業2 学生のリフレクションシートを返却
 - 授業3 学生のリフレクションシートを返却
 - 担当回終了後 授業DVD(3回分)を配布
 - ～1/31 ワークシートとアンケートを回収
- 2/23 事後研修会 全員のワークシートとアンケートを使って研修

9

6. 最後に

- お願い
 - ワークシートを作成することが目的ではありません。
 - ワークシートは、あくまでも、授業のデザインと振り返りのためのツールです。
 - できれば、デジタル形式でお願いします。
- 問い合わせ
 - わかりにくい点があったら、各系の教務補佐員さんに尋ねるか、MLに流してください。

10

参考になる文献・Webサイト

- 文献
 - 池田輝政他 (2001).『成長するティップス先生』玉川大学出版部.
 - 夏目達也他 (2009).『大学教員準備講座』玉川大学出版部.
 - エントウィスル, N. (2010).『学生の理解を重視する大学授業』(山口栄一訳) 玉川大学出版部.
- 京大
 - 大学授業データベース(京大以外も含む)
 - <http://www.online-fd.com/edunet/DB/index.html>
 - 京都大学オープンコースウェア(京大の授業のみ)
 - <http://ocw.kyoto-u.ac.jp/>
- その他
 - 教授・学習サポートツール(名古屋大学高等教育研究センター)
 - <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/>
 - 高等教育用語集(愛媛大学教育企画室)
 - <http://web.opar.ehime-u.ac.jp/vocabulary.htm>

11

II-3-2. 大学院生のための教育実践講座 —大学でどう教えるか—

1. はじめに

「大学院生のための教育実践講座」は、大学教員を目指す京都大学の学内者を対象にした講座である。「大学院生のための」とは銘打たれているが、大学院生の他にも、ポスドク、研究員、オーバードクターなどの参加も多数ある。平成 17 年度に第 1 回が実施されて以来、毎年開催され、今年度で 7 度目の実施となる。平成 18 年度までは、高等教育研究開発推進センターが企画、運営していたが、平成 19 年度より FD 研究検討委員会の主催となり、今年度も本センターは企画、運営の補助を行った。

平成 19 年度からファカルティ・ディベロップメント（FD）が義務化されて以降、各大学において大学教員の教育を改善すべく様々な取り組みが行われるようになってきている。本学においても、文学部のオーバードクター（OD）によるリレー講義などをはじめとし、大学院生や OD を対象とした予備的な FD、いわゆる「プレ FD」（Preparing Future Faculty : PFF）と呼ばれる取り組みが年々充実してきている。しかし、全国的にみれば、プレ FD の取り組みはまだ多いとはいえない状況にある。そのような中で、本講座は大学教員を目指す大学院生が多い本学の特性を生かした FD の取り組みとして、学内外から注目されるものになってきている。大学院生は、将来、研究者としてだけではなく、授業を担当することも求められており、まずは教員として授業を担当するための自覚を促し、現在の大学教育における課題を共有することがこの講座の 1 つの大きな目的である。

2. 企画目的、実施の背景

本講座では過去の受講生の要望を受け、平成 20 年度より「Basic」と「Advanced」の 2 つのコースを開講している。今年度も、基本的なコース枠組みは昨年度を踏襲し、そのうえで昨年度の反省をふまえながら、参加者の要望を汲み取りつつディスカッションを中心とした内容を充実させた。

Basic コースは、将来、大学で教授職につくことを希望する大学院生を対象とし、Advanced コースは、昨年度までに本講座を受講した経験のある大学院生、あるいは非常勤講師などで大学において授業担当経験のあるものを対象としている。

Basic コースでは、担当教員によるミニ講義で現在の大学教育がおかれた状況や課題を学び、グループディスカッションなどを通して、自身が大学の授業を受けてきた経験を振り返りつつ、大学で教えることがどのような課題を抱えているのかを考える機会を設けた。Advanced コースでは、具体的に大学の授業を構成する際に生じる課題を共有するために、2 名の参加者による模擬公開授業を実施し、それについてディスカッションをする場を設けた。一昨年度より、Advanced コースではミニ講義をなくし、参加者相互のディスカッションを深める時間を多く確保したが、今年度もそのプログラムを踏襲した。また、ディスカッションをより充実させるために、参加者への事前アンケートにおいて関心のあるテーマや自分の取り組みについてまとめておくをお願いし、議論をスムーズに始めることに役立てた。平成 20 年度より、参加者からの要望をうけて設置された Advanced コースの内容は、参加者と本センターのスタッフが継続的にコミュニケーション

ンをとることによって年を追うごとに改善を見ている。

3. 実施概要

3-1. 実施概要

本講座は、2011年8月4日（木）10時から18時半まで、京都大学百周年時計台記念館2階において開催された。BasicコースとAdvancedコースは平行して行われ、ミニ講義や模擬公開授業、グループディスカッションなどのために国際交流ホールII、IIIおよび小・中会議室を4部屋使用した。参加者は当日受付で2千円（ランチ、情報交換会代を含む）を参加費として納めた。当日のプログラムに関連する資料として、プログラム内容（資料1）、事前アンケート（資料2）、ミニ講義（資料3）、事後アンケート（資料4）を掲載した。

3-2. 参加者数とグループ構成

今回実施された本講座への参加者数は、Basicコース55名、Advancedコース17名の計72名であった。いずれのコースともに過去最高の参加者数を記録したことから本講座への関心の高さがうかがうことができる。理系と文系に分けた上で、その内訳の詳細を表1に示す。今年度は、この他に、他大学職員が1名、オブザーバーとして加わった。

本講座は、例年、教育学研究科からの参加者が、他の研究科に比べて比較的多い傾向にあった。それは、教育学研究科が関わるグローバルCOEプログラム（「心が活きる教育のための国際的拠点」）の一環として「EXラボ」という企画が行われ、本講座がその企画の一つとして位置づけられたためと考えられる。「EXラボ」とは、大学院生が自分の専門以外の専門を学び、また他の専門の院生同士の交流を促すことを目的として設けられた企画である。本講座の企画実践をサポートする高等教育研究開発推進センターの教員が、教育学研究科において高等教育開発論講座を担当している関係から、本講座は今年度もEXラボのひとつとして提供された。

しかしながら、昨年度から引き続き、教育学研究科よりも他研究科とりわけ、文学研究科・経済学研究科からの参加者が多かった。

表1. 各コースの参加者の内訳

研究科・部局	Basic				Advanced			
	人数	内訳			人数	内訳		
		修士	博士	OD・PD・研究員・ 研究生・その他		修士	博士	OD・PD・研究員・ 研究生・その他
法学研究科	1		1					
経済学研究科	10	1	3	6				
文学研究科	11	2	8	1	4			4
教育学研究科	5	3	2		4		1	3
人間・環境学研究科	5	2	3		1	1		
工学研究科	2		2					
医学研究科	4	2	2		2	1		1
農学研究科	4	4			1		1	
理学研究科	4	1	3		2			2
情報学研究科	2		2		1		1	
アジア・アフリカ地域研究研究科	5		3	2				
地球環境学舎	1			1	1		1	
微生物科学寄附研究部門	1			1				
東南アジア研究所					1	1		
合計	55	15	29	11	17	3	4	10

本講座では、院生同士のディスカッションの場を設けている。理系と文系を意図的に混合することで、分野をこえて討議、交流をできるようなグループ構成を行った。さらに、修士課程と博士課程など、参加者の学年もバランスがとれるように配慮し、Basic コースでは3つのグループを編成した。Advanced コースについては、事前にグループ編成を行わず、当日、テーマに沿って希望者を集めるかたちでグループをつくり、ディスカッションを行った。ディスカッションの際には、各グループにセンターの教員が一名ずつファシリテーターとして入り、議論の進行に関するコーディネートを行った。

4. 事前アンケートの結果

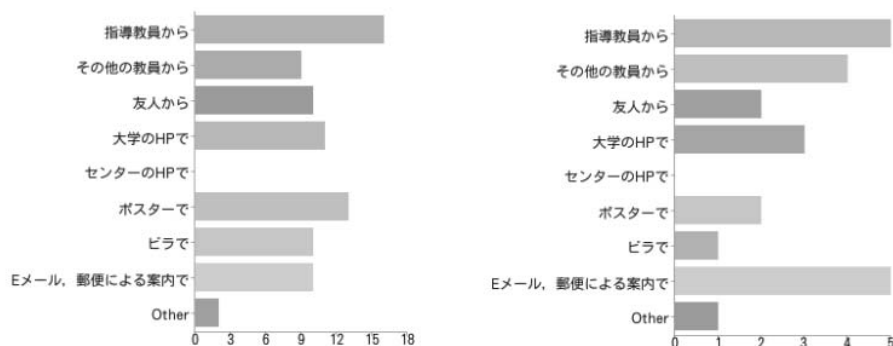
本講座を実施するにあたり、あらかじめ参加希望者に事前アンケートを電子メールで送付し、回答を依頼した（資料2）。これは、参加を希望する学生がどのような経緯で本講座を知り、どのような動機や期待を抱いているのかといった点を把握すること、およびグループに分かれてディスカッションを行う際のグループ分けの判断材料とすることを目的として行った。質問事項は、基本的に過去の回と共通する内容とした。

4-1. 本講座を知ったきっかけ

まず、どのようにして本講座を知ったのかを調べるために、「この講座のことをどのようにして知りましたか？（あてはまるものの番号をすべて○で囲んで下さい）」という質問を行い、表3にある9項目を選択肢として設けた。

表2に示した通り、Basic コース・Advanced コースに共通して「指導教員から」の紹介がもっとも多く、Advanced コースについてはEメール・郵便での案内も同時に多かった。

表2. 講座を知ったきっかけ（複数回答可）[左: Basic コース、 右: Advanced コース]



4-2. 大学での教育経験と教員への志望の度合い

次に、大学での教育経験と教員への志望の度合いを調べるため、問2で「大学での教育経験があるか?」、問3で「大学教員にどの程度なりたいか?」という質問を行った。

問2の「大学での教育経験があるか?」については、Basic コースでは、「なし」が21名、「TA」が31名、「非常勤講師」が7名であった。Advanced コースでは、「なし」が2名、「TA」が12名、「非常勤講師」が9名であった（表3）。以上のように、Basic コース参加者は、教育経験がない者は4割、また教育経験のある者のほとんどがTAであった。Advanced コース参加者は、ほとんどの参加者が教育経験をもっていた。

問3の「大学教員にどの程度なりたいか？」(5件法、「1：まったく希望していない」から「5：非常に希望している」)については(表4)、Basicコースでは、「非常に希望している」「やや希望している」と回答した者が8割以上、「全く希望していない」と回答した者はいなかった。Advancedコースでは、全員が「非常に希望している」「やや希望している」と回答した。大学教員になりたいと考えている参加者はBasicコース、Advancedコース共に多いことが明らかになった。

表3. 大学での教育経験(複数回答可) [左: Basicコース、 右: Advancedコース]

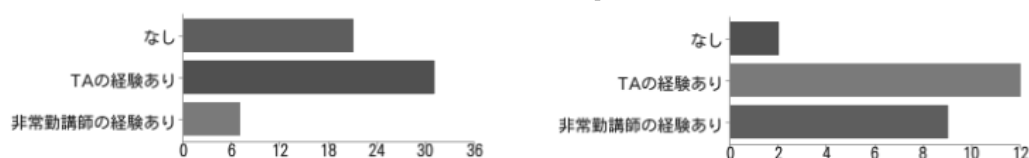
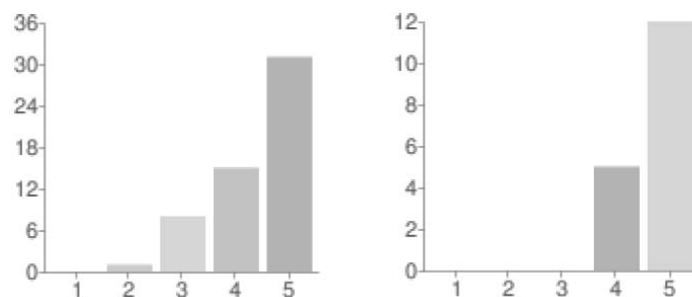


表4. 大学教員になることを希望するか [左: Basicコース、 右: Advancedコース]



4-3. 本講座の受講動機

問4では、本講座の受講動機を8つの質問によって尋ねた。一昨年度までは自由記述によって受講動機を尋ねていたが、昨年度からは、それまでの自由記述を元にした質問項目によって尋ねることとした。全ての質問は「1. 全くあてはまらない」～「5. 非常に当てはまる」の5件法で尋ねられた。表5に質問項目と、各コースの質問に対する平均値を示す。

表5. 各コースの受講動機の平均値

質問項目	Basicコース 平均値	Advancedコース 平均値
大学での教育活動に関心があるから	4.40	4.59
大学で教えるための知識・技術を身につけたいから	4.33	4.59
大学教育について考える機会が欲しかったから	3.91	4.12
実際に教育に関わる中で悩んだり困ったりしたことがあるから	2.98	3.71
他の大学院生が大学教育についてどのような考えをもっているか知りたいから	3.67	4.00
他の大学院生と、大学教育について意見交換したかったから	3.15	3.76
他の大学院生と人間関係をつくりたかったから	3.47	3.29
今後自分が大学教員として就職する際に有利になると思ったから	3.33	4.00

両コース共に「大学での教育活動に関心があるから」「大学で教えるための知識・技術を身につけたいから」の2項目の得点が高い結果となった。また、昨年度は「今後自分が大学教員として

就職する際に有利になると思ったから」という項目に対する評価は比較的低く、参加者は個人の関心に基づいた参加ではあるものの、それが自分のキャリアと直接結びつくとは考えていないという傾向があることがうかがえたが、今年度はとりわけ **Advanced** コースにおいて得点の上昇が見られた。本講座の受講者が就職を決めたり授業において役に立つポイントを得たという情報や本講座の発行する修了証が次第に認知されてきた効果によるものと考えられる。

4-4. アドバンストコース準備のための質問

問5以降は、アドバンストコースでのみ尋ねた。

問5は、模擬公開授業・検討会で授業者となり、模擬授業を行うことは可能であるかを尋ねた。「行うことは可能」は1名、「条件によっては可能」は8名、「行うことは不可能」は8名であった。「行うことは可能」もしくは「条件によっては可能」という回答が得られた受講生から、理学研究科より1名、教育学研究科より1名を選出し、模擬授業を担当してもらった。

4-5. 大学以外での教育経験、大学教育への問題意識

問6では、教員免許取得の有無を尋ねた（複数回答可）。「小学校」1名、「中学校」2名、「高等学校」4名、「その他」1名、「なし」12名と、教員免許を持たない人が多かった。

問7では、初等・中等教育での指導経験の有無を尋ねた（複数回答可）。「小学校であり」0名、「中学校であり」1名、「高等学校であり」3名、「なし」14名と、経験を持たない人が多かった。

問8では、塾・家庭教師などでの指導経験の有無を尋ねた。「あり」が10名、「なし」が7名と、経験者が相対的に多かった。

問9では、学部生時代に受けた授業への満足度を尋ねた。「1. まったく満足していない」から「5. 非常に満足している」までの5段階で評価を行った。その結果、「5. 非常に満足している」が1名、「4. まあまあ満足している」が7名、「3. どちらともいえない」が5名、「2. あまり満足していない」が4名という結果で、満足度の平均は3.29であった。

問10では、「あなたが考える大学教育における問題点」について、自由記述による回答を求めた。その結果を表6に示す。授業の形式や内容、学生側の意識の問題、大学の在り方そのものなどさまざまな問題点があげられた。

表 6. 大学教育における問題点

記述内容
大学教育で目指すべきものははっきりしていないし、また学生たち自身もあまり気づいていないこと。
他大学での大学教育の現状などを詳しく知らないので恐縮ですが、義務教育も含めて教員を評価するシステムが少ないのが問題ではないかと考えます。良い講義を行うことで公式に評価されれば、教員も講義に費やす時間を増やすことができ、学生の身になる講義を準備できると思います。評価方法については、学生の人気だけでなく、おそらく多角的な視点からの評価が必要だと考えますが、この点の困難さが現在の問題点だと感じます。
情報や知識の単純な伝達形式の講義になっていることが多く、学生自らが考え、将来実践の場で行動に移せる知恵となるようなことが伝達できていない点が問題ではないでしょうか。
大学生だったのが20年ほど前で、経済学部であったため、語学授業とゼミ以外は参加型授業ではなかった。わからないことが出てきても巻き返すことができず、そうなる単位を取ることだけに目標を移してしまった。専門科目になった時にそのあたりのフォローがあればいいのではないかと思います。
大人数の授業で一方通行的になりがちな点でしょうか。
学生自身が問題意識をもってもらうような、学生の問題意識を喚起させるような進め方になっていないのかもしれない。
学部生のときの講義についてはあまりよく覚えていません。すみません。
年配の教員と中〜若年の教員のあいだに、大学教育に対する意識の乖離があることが気になります。主に年配の教員には、大学は研究機関であり、自分たちは研究者であるという意識が強く、教育への関心や理解がないように感じます。専任教員はただでさえ事務等雑務に忙殺されがちなのに、今就職すると、わたしたち若年の教員が大学の教育改革を一手に引き受けることになるのではと不安です。

大学とは、「学ぶ」ための場である。この「学び」は主に、講義（知識の獲得）と演習（プレゼンテーション）によって構成されている。ゆえに大学教育においては、インプット・アウトプット双方に対する配慮が十分になされているように見える。
しかし、その「学び」においては＜共感＞の要素が不足していると思われる。豊富な知識と高い表現力を獲得することはもちろん重要である。キャリア教育や「学士力」涵養において不可欠とされていることから明らかであろう。しかしながら、コミュニケーションの場面においては、「相手の話を聞き、応答できる力」を身につけておくことが肝要であると思われる。この視点から改めて大学教育を捉えると、「どのくらい知識を獲得できたか」「いかに上手に発表できたか」に対する評価は積極的になされている一方、「聞いた内容をどのように説明するか」「相手に対する質問は適切にできたか」という点に対してはあまり注目されていない。
したがって、＜共感＞という、人と人との相互作用に焦点を当てた教育が推進されてもよいと考えられる。これまでは、「上手に」「積極的に」質問できるのは、もともと学ぶことに対して高い意欲をもっているからだ、と考えられてきた節がある。しかし、相手の真意に共感することに対する一種の「技術」「慣れ」を身につけておくことこそが、円滑なコミュニケーションの実現に寄与し、さらには学ぶ意欲の向上にもつながるのではないだろうか。もしこれが真ならば、＜共感＞の視点を大学教育に組み込むことには大きな意義があるといえよう。
とくに京都大学について言えることかもしれないが、大学での基本的な勉強・研究の「技術」的側面（文献を探したり、レポート・論文の書き方、フォーマットを学んだり）が、学生の自発的努力に任されている、任せすぎている点。
講義形式の授業が多く、演習や実習で、特に議論をする機会が少なかったように思う。大学院に入って議論が増え、最初はかなり戸惑ったので、そういった議論の機会をもっと学部教育でも実施してほしい。
受けている講義の意味やおもしろさを見出せずにいる生徒が多いのではないかな。
先にも述べたが、「お客様」である学生の要望と、教員の提供する「サービス」がほとんどすべての講義で対応していないことである。もちろん、教員は学生が想像もつかないような方法により学生が求める以上のものを提供することもあり、またそもそも学生の要望が的外れであることも多いが、このギャップに起因してその分野への興味を失う、あるいは講義を休みがちになる学生が多く、大学教育の問題点であるといえる。また、特に京都大学にいえることであるが、そもそも教員が教育に興味がなく、「サービス」をするつもりがないことも大きな問題であり、上記のギャップの大きな要因になっていると考えている。
教授する内容、レベルの手がかりが少ない点は、授業内容の作成の上で困難を生じているように思います。
今の大学は学生にとって「将来を考えるのを先延ばしにする口実」になっている側面がある。大学や大学院に求められているのは知識よりも、研究の仕方などの物事に対する取り組み方や、議論の仕方などに重点が置かれていると思う。一方でそのような教育を行うには教員の負担が大きくなる。大学は教育機関なのか研究機関なのか微妙な部分があり、教育によって評価される人がいても良いと思う。
大学教員は研究者と教育者の側面を双方もっているので、研究における勉強・リサーチの成果が教育活動に持ち込まれることが理想だが、実際はそうはなっていない（学生のレベル、社会が大学生に求めることノ関係で）
研究と教育の双方を行うことを求められるのが大学教員であると考えているが、研究と教育を比べると教育の比重が軽いように感じたことがこれまでに何度かあった。より具体的に言えば、題材は面白いはずなのに授業が面白くない場合があり、残念であった。

問 11 では、「研修会当日に議論したいテーマ」について自由記述で回答を求めた。その結果を表 7 に示す。講義を行う技術上の問題から、大学教育や大学教員そのもののあり方を考えるようなテーマまで、幅広い記述が得られた。

表 7. 研修会当日に議論したいテーマ

記述内容
根本的に考えることが好きではない学生を相手に、どのように授業を行ったらいいのかな。
研究会当日に議論したいテーマ： 「 大学生に求められる能力とはなにか？ 」 「 どのような講義を行えば、その能力を育むことができるか？（育むきっかけとなるか？） 」
・ 学生参加型の講義方法について（どのようにして学生の関心を講義に集中させるかなど） ・ 課題の出し方と、評価方法・基準の考え方について（ピンポイントなテーマで恐縮です。また科目によっても千差万別かと思いますが、特に論文・レポート形式の課題を出題した場合の採点方法や採点基準の考え方について、みなさんどのようなお考えで実施されているかお聞きしてみたいです。）
新しい知識を獲得してもらおう際に、講義時間の割合と学生に考えてもらい知識定着を確認する時間の割合をどの程度にするとメリハリがついていいのかな。また、学生からフィードバックしてもらった点をどのように補完するのがよいのか私の課題だと思っています。その点をほかの方からアドバイスいただきたいと思っています。
議論というよりは皆さんがどのような授業をされているのかを知る機会になればと思います。
前のページでの関心事項で記入したことと同じ。
教える内容のレベルを学力の低い学生に合わせた方がいいのか、それとも高い学生に合わせた方がいいのか。
講義内容に興味を持っていない学生に興味を持たせようと努力することは、そもそも必要なのか？（授業改善の努力は惜しみませんが、ときどき、そうまでして無理矢理学生の興味を引こうとするより、学生の興味の向く方向へ自由に進ませてやることも必要では...と思っています）

他の参加者が大学教育をどのように捉え、何を問題と考えているかに興味があります。そのなかで、上に述べた＜共感＞について、その意義や可能性、要不要を議論できれば幸いです。
大教室授業での私語・内職についてどう対応すべきか。講義タイプの授業で、出席をどれほど重視すべきか。
大学教育と小中高での教育は何が違っているか、今求められている教育は何で、それを達成するためにどのような取り組みが必要か。
大学では、何を、どう教えたら良いのか。（補足：記入欄がないのでここに書きます。私は、学部時代を XX 大学で過ごしました。問 9 で「非常に満足している」と答えたのは、XX 大学の授業です）
問 10. の他、大学で「どこまで」教育する必要があるのか、というところも議論したい。従来自由な学風を掲げ、好きなように勉強しなさいというスタンスでやってきたのは京都大学は特にそうであり、また他の大学でもこれに近いスタンスで教育しているところは少なくない。しかし、このやり方には私個人としては賛成できない。この理由と、他の人が賛成か反対か、さらにはこれに関する議論を踏まえてどのような講義・演習を設定すべきかを、可能な限り授業経験者の方と詳細に議論したい。
授業中の私語への対処
習得内容の評価方法
かつては大学でしか身につけられないものがあり、大学で学ぶことは教養、専門知識の両面において大きく人間的に成長することだったかもしれない。しかし今は知識はどこでも得られ、教養よりもビジネスマナーが重視される。社会人として知っておくべき教養は、日々変化し、生涯学習が重視されていると言えるかもしれない。このような中であって、大学には何が求められているのか。
授業の技術を高める方法。
・教養科目として自分の専門を教える際に、どの程度の専門性や知識の達成度を設定すべきか。
・（特に大教室で）生徒が騒がしい時の対処法
・集中力を持続させるための魅力的な授業の手法

5. 事後アンケートの結果

本講座の当日、すべてのプログラムが終了した時点で、事後アンケートを実施した（資料 4）。参加満足度や各プログラムに対する有意義度および改善すべき点について、評定と自由記述をもとに構成した。質問事項は、基本的に昨年度とほぼ同様にもものとした。当日参加者のうち、回答が得られた者は、Basic コース 55 名中 51 名、Advanced コース 17 名中 13 名であった。

5-1. 本講座の全体的な満足度

本講座の全体的な満足度について、「本講座の参加満足度は全般的にどのようなものですか」という質問に対し、「1. まったく満足していない」から「5. 非常に満足している」までの 5 段階で評定を行った。Basic コースは平均 4.25 点（グループ討論: 4.39、ミニ講義: 4.45、ボディ・ワーク: 3.94）、Advanced コースも平均 4.43 点（模擬授業・検討会: 4.43、グループ討論: 4.43）となり、本講座に対する高い満足度がうかがえる。

5-2. 本講座の満足度の理由（自由記述）

本講座に対する満足度の評定値（5 件法）とその理由に関する自由記述を以下に資料として挙げる。

表 8. 満足度の評定とその理由（Basic コース）

評定値	記述内容
4	内容の深い議論ができたが、致し方ないかとは思うが、少々時間が厳しかった。
4	プラスとマイナスを相殺するとプラスが上まわったから。
4	他分野の方々のお話が聞ける機会が得られてよかった。少しグループの人数が多かった。（しょうがないとも思いますが。）4 人ぐらいがいいです。
5	スケジュールがきつにつき過ぎるように感じた。もう少しプログラムの数を減らして、その分内容を充実させたら良いと思います。
4	全体的に詰め込みすぎの印象は受けたが、（議論時間が参加人数に対して少なすぎた）何と言っても普段交流のない研究科の方々や普段してない議論ができたこと自体意義があった。
4	討論やミニ講義の部(1、2)にはとても満足した。ボディーワークはちょっと話に論理の飛躍があるようでした。（身体の揺れを心の揺れと考えるなど）講師の先生の熱意は感じました。

4	考えがまとまりました。また京大の他の大学院生の方々のご意見聞けて、視野が広がりました。高等教育に関する論文も読みたいと思います。
4	自分の大学生活を見つめ直すことができました。色々な方と議論できてよかったと思います。今後の勉強と研究に向けて、自分の将来の道を考えながら、今の自分の身分である学生と将来の目標である教員の関係をもう一度設定し、京大生活を送りたいと考えます。
5	他の人の大学教育に対する意見を聞けた。今年に入ってから人前で発表することに非常に緊張するようになっていたが、濱野先生のお話で、少し自分をコントロールできるようになり、セッションで全員の前で発表することができた。
5	小グループで討論した方たちが教育経験があったので、それらを通じて深い話をする 것이できた。最後に active ではなく passive について意図していたというお話を聞くことができて得心できました。
5	教育について深く考える時間を得ることができて良かった。このように教育のことだけ考える時間はなかなか得られない機会がない。自分の意見と他人の意見を交換出来て良かった。
2	「机上の空論」というのが第一印象です。グループディスカッションについて、教育の現場を知らない人が自分達の願望を並べただけだと思いました。実体験に基づいた、現場の声や経験を聞いて議論できることを期待していたのでアテが外れたと言わざるを得ません。ミニ講義で話して下さった先生方は、いずれも非常に良く考えられた素晴らしい内容だったと思います。
4	スケジュールが過密すぎる。2 日間の日程を一日に圧縮した感じで余白がない。いっそのこと 1 泊 2 日の合宿形式にして、酒を飲みながら議論したい。
5	同じ立場の人々と意見交換ができて良かった。
5	普段全く交流のない方々とお話できた。また、自ら進んで学ぼうと思わないだろうことを考えるきっかけとなった。
4	大変密度の濃い内容で、今日の講座自体には非常に満足している。ただ私自身がディスカッションに慣れていなかったため、なかなか討論に参加しきれなかったことを残念に思う。
4	自分の積極性が今ひとつであった。
4	グループに別れてディスカッションを行えたことが良かった。しかし、1 人 1 人が発言をするためにも、全体討論をグループごとに行えれば、私としてはよかったと思う。
5	一方的な講義のみならず、何回かに分けた討論の中に考えるヒントがたくさんあった。ミニ講義も非常に内容が濃かった。～大学教育をとりまく現状や教師として考えるべき心構えがわかった。ボディーワーク～最初はボディーワークをする意味が分からなかったが、心と体のつながり、教師と学生との関係について深く考えるきっかけになった。
4	セッション 7 でのディスカッションで、「できること、やりたいことばかりを考えるのではなく、できないことを考えるべきでは」という意見に非常に共感した。
4	考えていたより（主な）参加（院生）の学年が低かった。大学院生向けなので当然です。すみません。まさに今教育を受けている側の話意見が聞け、教育の変化を知ることができ勉強になった。一方で実際に非常勤等で直面している・感じている課題について具体的に話合うことが出来なかった。議論は大変勉強になった。有り難うございました。来年是非 Advanced に参加し、今年学んだことをより発展させたい。
4	院生との意見交換の機会をもてたから。また、ミニ講義の内容がよくまとめられており、分かりやすかったから。
4	他の人の様々な経験や考えを知ることができたのは有益だった。一日ではなく数日もっと長期にわたって実施して実習なども取り入れて欲しかった。
4	参考になることも多かったが、一日ではやはりきつい。また、せっかく知り合った人たちとの交流の時間が少ない。
4	修士の学生から研究員の方まで幅広い層の人と意見を交わせたのが良かった。単純に「講義を受けてきただけの学生」以外の意見が聞けて良かった。やはり短時間だったため、自分の考えや議論を深めることができなかったのが少し残念。今回でいうと、グループ討論で扱う問い・テーマを事前に教えてもらえると良かったかも。
5	教員になるという意識がある人達と話せた。大学で研究したいという人の中にこんなにたくさん「教えること」に関心を持った人があるのが分かった。
5	大学教育について活発的に討論して、色々考えることが出来ました。大学教員になるための就職活動にも大変役立つと思います。
4	他の参加者の方々が、大学の教員に求めるものについて具体的に話されることが聞けたので、特に、ミニセッションの内容は、大学教員が置かれている現状についての報告となっており、とても参考になるものだった。
4	様々な分野の方の意見を聴くことができたこと。ディスカッションのてーまとしては、初めてだったので、色々考えるきっかけとなった。
4	セッションの内容が丁寧に体系づけられていたことには申し分はありませんでしたが、それを超える受け手の反応を個人的に示せなかったことが残念でした。
4	小グループでのディスカッションでは濃密な（というと言い過ぎだが）議論ができたようで、また色々な立場の人の意見を直に聞けて有意義だった。ファシリテーターの方の誘導やコメントもさすがと思わせるものがあった。
4	自分と意見の違う人と議論することで、考え方が広がった気がする。願わくばもっと議論する時間が欲しかった。しかし、発言する人が偏っていた現状を考えると、難しいかもしれないとも感じた。
5	個別グループに別れたディスカッションであったため、1 人 1 人の発言を引き出すことができたため。欲を言うと、ディスカッションの時間をもう少し長く欲しかった。
4	実際のガイダンスを聞けて、参考になったから。最後の田中先生の「教員は active すぎではダメ」説は良かった。グループワークでも active 支持派の意見が多かったように思ったので、パンキョーのトップの先生が上記のような考えで安心した。
5	それほど参加費は高くなく、大学教育の現況について理解が深まった。
3	グループ討論がよいと思えなかった。ありきたりというか、予想される内容ばかりだし、しかも抽象論ばかり。仕方

	ないと言えは仕方ないが、半分の時間でいいと思いました。
5	普段接することのない方々の話を聞いたから。
5	大学教育について、自身が考えていた問題点について議論することができた。他専攻の方の話を聞いて、様々な分野の教育へのアプローチを知ることができた。大学ごとによりニーズが異なるので、自分の立場をよく考えるべきだと思った。
4	所属の異なる人々と話すことができ、それぞれ考え方の違いを感じました。それがとても興味深かった点です。
4	本講義の内容以外に、教育実績に一応なるものを積めるというのは大きい。(非常勤講師になること自体が難しい中で、教育実績を上げること自体が貴重)
5	This course was more stimulating than I expected.
5	参加型で多くの人と交流しながら実践的に学ぶことができた。
4	ボディーワーク・・・講義ではダメなのか？悪い訳ではないが、ボディーワークのアナロジーが人間関係でも成立するのか自明ではないような気も。
5	今まで考えたこともなかったようなことに対して、意識を向けるきっかけになったから。
4	他の研究科の方の話を聞いたのが良かったと思っている。違う考え方に触れることが出来た。
5	普段院生同士で話合うことのない大学の教育について色々な意見が聞けたから。
3	大学教育の現状の一端を垣間見たことは非常に良かったです。その問題の根深さを痛感しました。小中高校まで限定された制度的な縛りの上に立って、現在の大学教育あるいは自分たち自身の意識もあるのだという思いを受講以前より強くしています。現在の自分の教育制度・段階の下では、高校までの教育と大学の教育がどう違うか、という議題が上がりましたが、個人的には高校以前にすり込まれた常識と固定概念を取り除くことにこそ大学教育の意味があると思います。
4	将来の講義に対する問題意識を共有することができた。ミニレクチャーが参考になった。
4	大学の現状が良く分かったことは、良かった。ディスカッションの時間がもうちょっと長く取れたら良かったかなと思う。周りの教員志望の学生さんとの交流・情報交換ができたことは貴重で刺激的でした。
4	レクチャーとディスカッションのめりはりがきいていたから。
4	グループ討論は普段交流がない人と意見を交わす場となっており、刺激的だった。

表 9. 満足度の評定とその理由 (Advanced コース)

評定値	記述内容
4	同じような状況にいる人が集まって率直な意見交換をすることで、Tips 得ることができる。又、模擬授業の後の検討会でという点を改善すればよいかわかる。
4	他の教職経験者の授業の現場でどのようなことが問題となっているかが分かった。
4	自分が持っていた問題意識やもやもやしていた思いや不安を整理することができ、講義に臨むのが楽しみになりました。「非常に」としなかったのは、これから実際に講義を行ってみて評価したいと思ったからです。
5	専門科目を取得しなければいけない学科にいて、基礎系の方がどのように授業を組み立てているのかが知ることが出来て良かった。クリアしなければならない課題が明確になった。科目の必要度 (必修か否かなど) や対象のレディネスによりアプローチが変わるのは仕方がないにせよ、到達点をどう設定するのが大切だと理解できた。
4	授業をする上での小ネタや注意事項について理解を深められたから。
4	学生との人間関係など、普段あまり注意していない側面について改めて考える機会が得られた。
5	模擬授業が面白かった。大学院に入るとなかなか他の人の講義の仕方を見ることがないし、どういう工夫をしているかという視点で授業を見るとまた新しい発見があった。
5	実際に教育を経験された方の体験を数多く聞くことができ、Basic とはまた違う意味で勉強になった。また自分の教育経験が足りないことを実感し、Motivation の向上につながった。他研究科の方との交流のよい機会になった。
4	十分に討論することができたから。(時間も確保されていたし、皆にも積極的な姿勢があった。自分も意見を言いやすい雰囲気だった。)
5	授業をしながら 1 人で悩んで来たことを話合う事ができて良かったです。人の講義を聞くのとても勉強になりました。授業を良くするアイデアを頂けました。
4	色々な立場での話が聞けて良かったと思います。理系で数学の授業では関係ないと思えるような事がたくさんありました。
4	多彩なバックグラウンドと経験を持った方と意見交換・交流ができとても刺激になった。教養科目 VS 専門科目、文系科目 VS 理系科目などの違いについて具体例を挙げて話し合えたことが今後講義をする際の心構えとして参考になった。長いお時間有り難うございました。

5-3. 今後の改善に向けて

来年度の改善を検討するために、「今後に向けて改善した方がいいと思われる点がありましたら、自由にお書き下さい」という質問のもと、自由記述による回答を求めた。その結果を表 10、表 11

に示した。

Basic コースでは、グループ討論の時間やグループの数に関する記述が多く見られた。今後、さらにグループ数を増やして議論の活性化を促すことなどを考えるべきかもしれない。昨年度までは時間が長すぎるなどの意見が目立ったが、今年度はそこまで目立つ意見ではなく、本講座が大学院生にとって有意義な議論の場として成熟しつつあると言える。

逆に、本年度は、Advanced コースにおいて、形式についての改善点・希望が多く見られた。Advanced コースではミニ講義を外して議論の時間を多めにとるように工夫してきたが、教育の専門家の講義・意見も聴きたかったという意見も見受けられた。

表 10. Basic コースの今後の改善点に関する自由記述

記述内容
受講者の人数をもう少し限定すべきかと思う。(もしくは、Basic のグループを 3→4 とするなど)
イベント数は、休み時間が無いほど充実しているけれども、イベント内容はそれぞれが冗長だった。予習教材を事前に配布してはどうか？
全体討論をある程度犠牲にしてもさらにグループ討論を充実するという手もあるかと思いました。時間を増やす。テーマを増やすなど。
グループ討論は、グループ 10～15 人くらいに絞るべきではないか(会場の制限があるにせよ) 参加者全員に対するフィードバックがあるのかよく分からないが事前アンケートやこのアンケートの結果は分かるようにして欲しい。(分かるのならいいのだが)
ボディーワーク以外には満足でした(すみません。)
小島先生のガイダンス例は大変興味深かった。もし可能ならば小島先生と全然異なる考え方でガイダンスを行われている先生のお話も聞けると良かったかもしれない。
1人1人に発表の代表者として、チャンスを与えられたらよい経験になると思います。
桂キャンパスでも開催できると良いかと思います。工学研究科は博士課程の学生が多いはずなのに参加が私を含め Basic で2名のみだったのが気になりました。
議題を事前にあげていて、それについての持論を用意してこれるようにすると、議論がより濃密になるのではないかと思った。
疲れさせる事が目的であったと言うものの、移動が多すぎたり、ドリンクが飲みづらかったり、多少度が過ぎた印象があります。せめて、ペットボトルの配給や、もう少し休み時間があると有り難かったかなと思いました。
グループ討論にさける時間が短すぎる。あと 30 分くらい長くできますか？お願いします。
もっと直伝してほしい。
グループ討論の人数をもう少し少なくしてもらえるとうれしいです。
今日の講座の内容は大変興味深く、様々な問題を提示され、有意義な時間を過ごすことができた。問 6(2)にあるような今後も議論が続けられるような場があれば、一回きりであるから気軽に参加出来たという側面もあるが、より有意義な体験にできるのではないかと思う。
グループ討論、より少人数であったほうがよいと思う。討論の各回毎の時間を増やすか、回数を増やすかしてもよいと思う。
グループディスカッションが停滞した時に、スタッフの方がちょっとした誘導すると、より活発なスムーズな議論が展開されると思いました。
おそらく参加人数が年々増えているためだと思いますが、一部参加者としかコミュニケーションを取れなかったです。(そのためグループ全体の議論も一部の人がまとめる傾向がありました。)
グループ討論のまとめの時間をもう少し長くともってもらいたい。「大学の授業の現状」についての説明(5～10分)を導入時にしてからグループ討論を始めると、討論が更に盛り上がるのではないだろうか。ミニ講義の講師にもグループ討論に加わってもらえないだろうか(意見の聞き役、アドバイザー・コメンテーターなどとして)
グループの人数が多いので、練った議論がしにくい。Basic コースはもう少しグループの人数を減らしても良いと思う。
大学が多様化している中で、研究拠点として・地域密着・社会人として求められるスキルの養成など、大学によって役割が大きく異なっていることを知ったが、今回は参加者が全て(?)京大生だったということで、学生の質が高いことが前提とされる議論が多かったと思うし、それ以外の大学の議論については学力の低い学生に対する対応などが限定的に話された程度だったと思う。より多様な大学の役割とそこでの講義の役割を考えるべく、他大学との交流もあっても面白いかなと思った。
ボディーワークは非常に良かったが、いかんせん冗長であった。短時間でより議論を深めるために、グループワークの前にある一定の結論もしくは落とし所を見つけることを意識させた方が良い。グループ間でまとまり方がまちまちだとやりにくかった。
大学教員の方が実践に講義を行った時に、気が付いた点、感想など、ミニ講座として実施していただければ有り難いです。
全体討論は、人数が多すぎたせいか、決まった人だけの意見になっていたようにも思い、もう少し少人数での討論の場であったら良かったのではないかと思った。
このような事後アンケートについても、事前に web で行って頂けたように web 上でレスポンスすることができれば良いなと思いました。(資源的にもエコというのは後づけで、フィードバックを即時にしばらく者にとってじっくり振り返った上で誠実にコメントしたいというのが本音です。)

全体ディスカッションは参加者が多いこともあり、多少前準備やファシリテーターの方の交通整理があってもいいかと思います。傍観していて勝手な意見ではありますが。
個人的には、講師の方々も交えて議論できる場が欲しかった。知識を持っている方々がどのような考えを持っているのか知りたかったから。
ボディーワークで伝えられたことが抽象的であった。時間も長かったため、もう少し短くしてディスカッションの時間を長くした方がよいと思う。各グループの意見をまとめる時間は、グループ討論終了直後にした方がよいと思う。その方が議論の内容を覚えているため。
授与式って必要？
ボディー・ワークについて、事前にどういうことをするのか情報が欲しい。
グループ討論を減らしてミニ講義時間を増やして欲しい。ボディー・ワークも減らして欲しい。
「日本の学生は質問あるか聞いても手を挙げない」などの始めから双方向なコミュニケーションを諦めているような発言を聞くと、なかなか教育を改善するのは難しいのだろうと感じました。
正論は大事だが、公募を通る上での技術面にも触れて欲しい。これは情報が不足している中での情報交換を前提にして。
現場での具体的な話が面白かった。様々なレベルの大学で教えている方の話などがあったら聞いてみたい。
グループ討論の時間をもう少し設けた方がよいと思う。全体討論での各グループの発表が難しかった。議論のテーマを新たに設けても良かったのではないかな。例えば、話合いたいテーマを各グループから持ち寄ってもらうなど。
前回までの討論の内容を踏まえて話し合いできるように討論ごとにファシリテーターの先生を変えない方がよいと思いました。
グループ討論について、さすがに議論が多すぎたように思います。実際の教授経験の少ない自分たち院生は、具体的な提言をまとめ上げるより、議論自体にもっと多く時間を割き、問題意識を共有することに努めた方が有意義だったのではないかと感じました。午前・午後1つずつのトピックに絞って話合うというのも1つの選択肢としてあるかと思います。
全体討論で議論は盛り上がったが、各グループの意見が集約された結果、先に個別のディスカッションでの議論の面白い部分も捨象されてしまった印象があった。

表 11. Advanced コースの今後の改善点に関する自由記述

記述内容
同じ境遇にいる人（大学院生）の模擬授業だけでなく、ロールモデルになるような授業のうまい人の模擬授業も見たい。学術的成果に基づいた授業の改善方法についてのトークがあればよい。
大学院教育についても考える機会が少し欲しい。
ホワイトボードは1つが大きすぎたように思います。小さいもの×2の方が良かったように思えます。
(1)については、最後に論点整理のような形でキーワードだけでもホワイトボードに出してもらえると良かったかもしれません。
(2)特に問題は感じませんでした。各グループの論点を共有でき有意義でした。
すごく疲れますが、こういうものはやはり一日集中にした方がよいと思うので、プログラム構成はこのままでよいのではないかと思います。WEBなどでフォローアップして頂ければ嬉しいです。卒後にもこのような場に関わっていけるような装置をつくっていただけると、自己研鑽できるのにな・・・と思いました。
前もって講座に参加したことがある人がいてよかった。特に改善を希望する点はありません。時間が長い点を除いては・・・。
お互いのティップスを交換・共有し合うような時間があるとどうでしょうか。
グループ討論が難しかった。何をディスカッションするかテーマの自由度が少し広がったのかなと思いました。もう少し絞ると、2グループの比較もしやすくて良いような気がします。
グループ討論の時間をもう少し長くして欲しい。また各人の経験を踏まえて、グループ分けとディスカッション内容を明確にして欲しい。教育の専門家の方の話を知りたい時間も欲しい・模擬授業をもっと少人数でディスカッションしたい。やはり2日以上コースが良いのではと思います。
午前中に互いの交流を深めるようなことがあまりなく、昼食時の席がばらけづらい。性別とか研究科で偏りがち。
ランチメニューが油っぽいものが多く、フルーツやデザートが少なかったので改善してもらえると有り難いです。今のままでも十分満足ですが・・・。
模擬授業をいくつかのグループに分けてやってはどうでしょうか？少しでも多くの人が授業をやった方がよいように感じました。
(1)(2)共にとても為になりました。特に、具体例を挙げながら、議論できた点が良かったです。ただし、(1)(2)以外にも時間を使って、内容を深めたかった。時間制約上厳しいですね。

5-4. 来年度の本講座やオンライン/対面コミュニティへの参加希望

Basic コースの受講生に対して、「来年度、アドバンストコースが開講されるならば、参加したいと思いますか」という質問のもとに、「1. まったくそう思わない」から「5. 強くそう思う」までの5段階で評定してもらった。その結果、「5. 強くそう思う」が14名(27.5%)、「4. そう思う」が26名(51.0%)、「3. どちらとも言えない」が9名(17.6%)、「2. あまりそう思わない」が2名(3.9%)、「1. まったくそう思わない」が0名(0.0%)で、平均が4.02であった。Basic

コースでは、昨年度よりも継続的な参加意欲は高まっていると言える。

また、来年度の参加案内の送付希望を「希望する」、「希望しない」の2択で尋ねたところ、Basic コースは47名（92.2%）、アドバンストコースでは9名（69.2%）、「希望する」と答え、両コースともにこれまでの年度同様の継続的参加への意欲がうかがえる。

最後に、「今後も継続して大学の授業改善について考える次のようなコミュニティがあれば、参加したいと思いますか」という質問に「はい」「いいえ」の2択で回答を求めたところ、「(1) SNS などを利用し、オンライン上で情報・意見交換をするコミュニティ」については Basic コースで27名（52.9%）、Advanced コースで8名（61.5%）が「はい」と回答していた。「(2) 実際に集まり、対面で情報・意見交換をするコミュニティ」については Basic コースで46名（90.2%）、Advanced コースで11名（84.6%）が「はい」と回答していた。これまでの傾向と同様に、対面コミュニティを望む声が多い。本講座から派生した大学教育を考えるコミュニティである Young-RICE といった事例もあるように、本講座の参加者の多くは、一日の研修に留まらない継続的な交流を望んでいることがこの結果から推測される。

6. おわりに

本講座は、将来、大学教育に携わることを希望している京都大学の大学院生、ポストドクター（PD）、研修員のために、ファカルティ（大学教員）へと自己形成していくきっかけとなる場を提供するものである。第7回目の今年度の受講生からの評価もおおむね例年通り高いものであったと言える。特に、アドバンストコースの満足度は非常に高く、一昨年度に行ったミニ講義を Basic コースのみに限定し、公開模擬授業・検討会とグループ討論に焦点を絞ったプログラム改善が成功であったことがうかがえる。しかしながら一方で、現職の大学教員による講義を生で聴きたいという意見も少なからず残っていることには考慮の余地がある。また、今年度は他大学職員がオブザーバーとして参加し、センター教員とも積極的に意見交換を行うことができた。さらに、今年度のプログラムのミニ講義のひとつを担当された先生は京大で学位を取られ、本講座の元・受講生であり、本年度より大学教員として就職された方であった。このように実際に分かる形で本講座の成果が出ていることはたいへん喜ばしいことである。

冒頭でも述べた通り、本講座は「大学院生のための」と銘打ってはいるが、Advanced コースが創設されて以来、大学院生以外からの参加者も非常に多く、その多様化が激しい。今年度の Advanced コースは、大学院生の参加者よりもそれ以外の参加者（OD・PD・研究員・非常勤講師など）のほうが多い。今後は、そういった参加者層も含めながら、本講座の活動が拡散することのないように、交流・ネットワークの形成を行い、運営側の適切な道筋づくりが重要になるといえる。

（高橋 雄介、藤本 夕衣、及川 恵、松下 佳代）

7. Advanced コース参加者の感想

私がはじめて「大学院生のための教育実践講座」（以下「実践講座」）に参加したのは2007年のことであった。その時に会った何人かの参加者が不定期に連絡を取り合い、交流を続け、2010年にはYoung-RICEという名前で活動し始めたことは、本叢書第29巻（2011年）所収の「若手研究者による講義力向上検討会（Young-RICE）の設立と本年度の活動について」（99-111頁）で報告したとおりである。こういった活動が取り持つ縁で、私は本年4月から、高等教育研究開発推進センターの研究員に採用していただいた。

ちょうどその頃、Young-RICEでは、東日本大震災の被災地支援のため、講演会を開催しようという企画が持ち上がった。当初、この企画には賛同者が多く、熱心な議論が繰り広げられたが、やがて大小様々な問題に阻まれ、残念ながらこの企画は実現しなかった。

8月に実施された「実践講座2011」には、Young-RICEから私を含む3名が、Advancedコースのボランティア・スタッフとして参加させていただいた。毎回、必ず得るものはあるが、今年は実質的に即役立つ助言が頂け、例年にも増して感謝している。

私は、2年前から某大学の非常勤講師として、毎年後期開講の講義を受け持っている。講義の準備にどれだけ時間をかけても、十分な講義ができたと思えたことはなく、この2年間、私にとって非常勤講師の仕事はほとんど苦行のようなものであった。

しかし、3年目の今年、私は初めて自分の言葉で話せるようになった。そうすると、学生が親しみを持って話しかけてくれるようになった。講義をすることが楽しくなってきた。きっかけは、今年の「実践講座」で出会ったある受講生のアドバイスだった。

彼女は、私が非常勤先で困惑したある出来事を話すと、「操作性のある学生には気をつけて下さい」と言った。「操作性のある学生」とは、学生と教員の間に立ち、利益誘導を武器に自分の立場を優位に持って行く学生のことだという。往々にして、そのような学生は教員を見くびっている。さらに、そのようなタイプの学生は、卒業後も職場の人間関係を混乱させ、迷惑をかける可能性が高いと指摘した。だから、そういう学生に対しては「強く出て下さい」と言われた。私は目から鱗が落ちたような気がした。

私は自分が漠然と悩んでいたことの正体を知った。講義力もさることながら、教員である私は、学生から力関係の駆け引きを仕掛けられていたのだ。そう思い当たると、今年度は初回の講義から、自分のペースに学生を巻き込むことにした。すると、昨年までの悩みからすっかり抜け出せたのである。

さて、今年度、Young-RICEでは定期的な活動をすることはなかったが、例年通り、不定期に飲み会は開かれた。年度末には離京するメンバーの最終講義と追い出しコンパをする予定である。今やYoung-RICEのメンバーは、大半が大学院生ではなくなり、活動拠点が分散する傾向が顕著である。だが、元々緩やかに結ばれた絆は、今も緩やかに結ばれている。おそらく今後もしも不定期に集まり、交流を持ち続けるだろうと思われる。

（井藤 美由紀）

実施プログラム

= Basic =

9時45分～	受 付
10時00分～	開会式 挨拶 京都大学理事 淡路 敏之 趣旨とプログラムの説明 高等教育研究開発推進センター教授 大塚 雄作
10時20分～	セッション1 グループ討論1：（自己紹介）「大学の授業をどう思うか」
11時20分～	セッション2 ミニ講義1：「大学授業の現在」 高等教育研究開発推進センター准教授 田口 真奈
11時45分～	セッション3 ランチと自由討論
13時00分～	セッション4 グループ討論2：「大学の授業で教師に求められるもの」
14時00分～	セッション5 ボディワーク：「他者とのつながり・自分とのつながり」 京都文教大学教授 濱野 清志
15時40分～	休 憩
15時50分～	セッション6 ミニ講義2：「大学授業におけるガイダンスの重要性」 滋賀医科大学准教授 小島 隆次
16時15分～	グループ討論整理
16時30分～	セッション7 全体討論：「大学で教えるために」
17時30分～	セッション8 ミニ講義3：「大学で教えるために」 高等教育研究開発推進センター教授 田中 每実
17時50分～	閉会式 挨拶・修了証授与 高等教育研究開発推進センター教授 田中 每実
閉会式終了後	情報交換会（18時30分まで）

実施プログラム = Advanced =

9時45分～	受 付
10時00分～	開会式 挨 拶 京都大学理事 淡路 敏之 趣旨とプログラムの説明 高等教育研究開発推進センター教授 大塚 雄作
10時20分～	セッション1 全体討論1：（自己紹介）「教える側からみた大学授業」
11時45分～	セッション2 ランチと自由討論
13時00分～	セッション3 模擬公開授業・検討会
	休 憩 （10分）
15時20分～	セッション4 グループ・全体討論
17時50分～	閉会式 挨 拶・修了証授与 高等教育研究開発推進センター教授 田中 每実
閉会式終了後	情報交換会（18時30分まで）

「大学院生のための教育実践講座－大学でどう教えるか－」

事前アンケート

京都大学 FD 研究検討委員会

このアンケートは、本講座の実施と改善に役立てるために実施するものです。記名式になっていますが、結果の公表は、統計量あるいは無記名での自由記述の内容紹介にとどめ、個人が特定されることはありません。また、上記の目的以外に使用することは決してありません。ご回答のほどよろしくお願い申し上げます。

お名前：_____

ご所属：_____

*京大以外の方は、大学名もお書き下さい

あてはまる番号 1 つを〔 〕内にご記入下さい。

ご身分：

■大学院生の方

課程 ① 修士 ② 博士 []

学年 ① 1 年 ② 2 年 ③ 3 年 ④ 4 年以上 []

■大学院生以外の方

① PD ② 研究員 ③ その他 () []

参加コース： ① Basic ② Advanced []

問 1 この講座のことをどのようにして知りましたか？（あてはまる番号すべてを〔 〕内にご回答の上、⑥・⑨の場合は詳細を（ ）内にご記入下さい）
〔 〕

- ① 指導教員から ② その他の教員から ③ 友人から ④ 大学の HP で
⑤ センターの HP で ⑥ ポスターで（掲示場所： ）
⑦ ビラで ⑧ E メール、郵便による案内で ⑨ その他（ ）

問 2 大学での教育経験はありますか？ある方は行っている年数もお答え下さい。（あてはまる番号すべてを〔 〕内にご回答の上、②・③の場合は年数を（ ）内にご記入下さい）
〔 〕

- ① なし ② TA（約 年） ③ 非常勤講師（約 年）

問 3 大学教員になることをどの程度希望していますか。(あてはまる番号 1 つを〔 〕内にご記入下さい) 〔 〕

- ① 全く希望していない ② あまり希望していない ③ どちらともいえない
④ やや希望している ⑤ 非常に希望している

問 4 どうして、この講座を受講しようと思いましたか？(あてはまる番号 1 つを〔 〕内にご記入下さい)

問 4－1.大学での教育活動に関心があるから。〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問 4－2.大学で教えるための知識・技術を身につけたいから。〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問 4－3.大学教育について考える機会が欲しかったから。〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問 4－4.実際に教育に関わる中で悩んだり困ったりしたことがあるから。〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問 4－5.他の大学院生が大学教育についてどのような考えをもっているか知りたいから〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問 4－6.他の大学院生と、大学教育について意見交換したかったから。〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問 4－7.他の大学院生と人間関係をつくりたかったから。〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問 4－8.今後自分が大学教員として就職する際に有利になると思ったから。〔 〕

- ①全く当てはまらない ②やや当てはまらない ③どちらともいえない
④やや当てはまる ⑤非常に当てはまる

問 4－9.その他の受講動機がある方は、欄内に自由にご記述ください。

【これ以降は、Advanced コースの参加者のみお答え下さい】

問 5 「模擬公開授業・検討会」では、参加者のうちどなたかに実際に模擬授業を行っていただく予定です(1 授業につき概要説明 10 分＋実演 20 分程度)。あなたがその授業者となり、模擬授業を行っていただくことは可能ですか？(あてはまる番号 1 つを〔 〕内にご記入下さい。②の場合は、懸案事項を()内にご記入下さい)〔 〕

- ① 行うことは可能
 ② 条件によっては可能(懸案事項：)
 ③ 行うことは不可能

問 6 いずれかの教員免許をお持ちですか？(あてはまる番号すべてを〔 〕内にご記入下さい。④の場合は、詳細を()内にご記入下さい)
 〔 〕

- ①小学校 ②中学校 ③高等学校 ④その他() ⑤なし

問 7 小・中・高等学校での指導経験はありますか？(あてはまる番号すべてを〔 〕内にご記入下さい)
 〔 〕

- ①小学校であり ②中学校であり ③高等学校であり ④なし

問 8 塾・家庭教師などでの指導経験はありますか？(あてはまる番号 1 つを〔 〕内にご記入下さい)〔 〕

- ①あり ②なし

問 9 学部生時代に受けた授業はどの程度満足なものでしたか？(あてはまる番号 1 つを〔 〕内にご記入下さい)〔 〕

- ①まったく満足していない ②あまり満足していない ③どちらともいえない
 ④まあまあ満足している ⑤非常に満足している

Ⅱ－３－２. 資料 2

問 1 0 あなたが考える大学教育における問題点について、欄内に自由にご記述下さい。

問 1 1. 研修会当日に議論したいテーマについて、欄内に自由にご記述ください

【参加にあたってのお願い】

- 研修会当日までに、自分が大学で授業を行う上で抱えている問題点(授業経験のない方は、問題になると考えられる点)と、それに対する対応策について整理しておいてください。
- また、自分が授業を行う上で参考にしている文献などがありましたら、当日ご持参頂ければと思います。

ご協力ありがとうございました。

大学院生のための教育実践講座2011
-大学でどう教えるか-



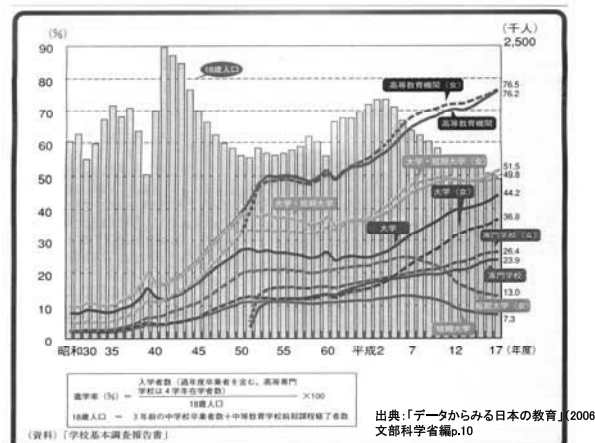
BASIC セッション2 ミニ講義1

大学授業の現在

田口 真奈

京都大学高等教育研究開発推進センター

taguchi.mana.3z@kyoto-u.ac.jp

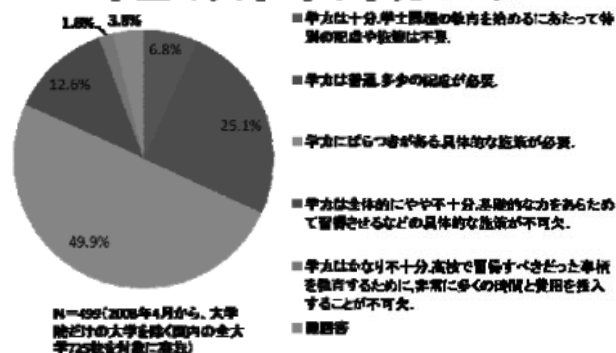


高等教育の段階移行

	エリート段階	マス段階	ユニバーサル段階
大学進学率	～15%	15～50%	50%～
高等教育機会	少数者の特権	多数者の権利	万人の義務
特 色	同質性 (共通の高い基準)	多様性 (多様なレベル)	極度の多様化 (共通の水準の喪失)
			(マーチン・トロウによる)

3

学生の入学時の学力レベル



読売新聞教育取材班「教育ルネサンス大学の実力」p.325

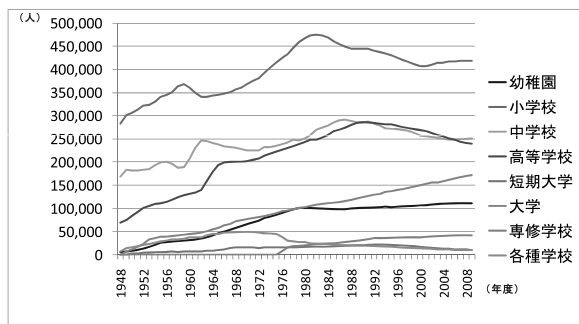
大学教員のルーツ

- 大学の誕生: 12世紀、中世ヨーロッパ
 - ボローニャ大学(イタリア)、パリ(フランス)
 - 学問をするもの(教師と学生)の自律的な共同体
 - ギルド(組合): 親方(学者、教師)、徒弟(学生)、一人前の職人としての資格証明(学位、博士号)
- 聖職者、法曹、医者といった専門職と大学教員の後継者養成が目的
 - 神学・法学・医学+学芸(人文)学部
- 19世紀以降、知識創造の必要性⇒研究機能の重視、応用的・実用的な学問領域

大学教員の職務

- 教育、研究、社会サービス+管理運営
 - 知識の伝達、知識の創造、知識の活用
- 雇用形態
 - 教授、准教授、講師、助教、助手

本務教員数の変遷



学校基本調査報告書より

多様化する雇用形態

- 近年、採用形態、報酬体系、契約事項などが多様化している。
 - 終身雇用を前提としたテニユア付き教員
 - 研究プロジェクトの期限による任期付き教員
 - 教員以外の職業経験を買われるハイブリッド教員
 - NPOの運営や企業経営も行い、「教える」という活動は生活の一部でしかない「カジュアル教員」
 - 潮木守一(2010)『第三段階教育の登場と大学教員の変貌』,IDE
- 大学教員の初職である助手への採用年齢
 - 1971年: 28.0歳⇒2004年: 32.7歳
 - 加藤毅(2007)『日本の大学教授市場』

教員になりにくい時代



求人数(大学教員増加数)÷求職者数(前年度の博士課程修了者数)

竹内洋(2010)『大学教員の世代間格差と衝突・軋轢』,IDE

大学教育への要請

- まずは経済界から
 - 経済産業省「社会人基礎力」
 - 3能力12要素
 - 厚生労働省「若年者就職基礎能力修得支援事業」
 - 5領域、認定講座
 - YES-プログラム: 2004年10月スタート(2009年度で終了)
- 文部科学省も
 - 学士力(中教審)
 - 4分野13項目
 - 学士課程共通の学習成果に関する参考指針

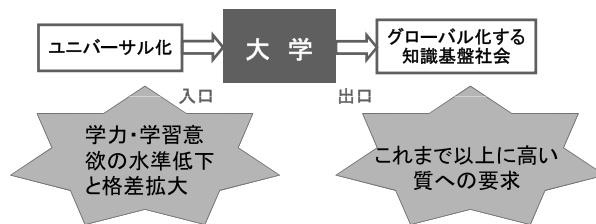
学士課程教育の改革

- 3つのポリシー
 - 入学者受入れ、教育課程編成・実施、学位授与
- FDの法制的義務化(2008.4)
- 単位制度の実質化
 - 単位制度
 - 「1単位」＝「45時間の学修」
 - 厳格な成績管理(GPA: Grade Point Average)
 - A, B, C, D, Fに4～0のポイント
 - 履修科目キャップ制
 - 年間の取得上限単位数の設定
 - 大学の卒業要件: 124単位の修得が基本



大学教育の「質保証」

－「入口」の質保証から、「出口」の質保



日本だけでなく、先進国共通の傾向

多様化する学生、多様化する大学

- 大学の機能別分化？
 - 「大学の授業」といってもローカルな文脈によってまったく異なる。
- ⇒大学教員を送り出す大学と雇用する大学のニーズの不一致
- Preparing Future Faculty プログラム

大学の機能別分化

- 世界的研究・教育拠点
- 高度専門職業人養成
- 幅広い職業人養成
- 総合的教養教育
- 特定の専門的分野(芸術, 体育等)の教育・研究
- 地域の生涯学習機会の拠点
- 社会貢献機能(地域貢献, 産学官連携, 国際交流等)

中央教育審議会（2005）我が国の高等教育の将来像（答申）

大学初任教員の不安

- 初任者の不安調査
 - － 大学教員初任者に対して「何に不安を抱き、どのようなサポートを必要としているのか」に関する質問紙調査を実施
 - 田口真奈, 西森年寿, 神藤貴昭, 中村晃, 中原淳 (2006) 高等教育機関における初任者を対象としたFDの現状と課題, 『日本教育工学会論文誌』, 30(1), 19-28

不安調査

- 不安得点の高い項目
 - － 研究活動との両立に関する不安
 - － 授業内容に関する知識を自分が十分もっているかどうかに関する不安
 - － 他の授業に劣らないような授業ができているかに関する不安
- 因子分析の結果
 - － 「教育方法に関する不安」
 - － 「学生に関する不安」
 - － 「教育システムに関する不安」

「教育方法に関する不安」

- － (12)授業中の話術に対する不安
- － (3)他の授業に劣らないような授業ができているかに関する不安
- － (10)授業内容に関する知識を自分が十分もっているかどうかに関する不安
- － (35)一時間半しゃべり続けることに関する不安
- － (18)授業の流れや指導計画に対する不安

「学生に関する不安」

- (36)学生からの暴力・暴言に対する不安
- (23)学生の意欲の度合がわからない不安
- (11)自分の授業の目標とするレベルまで学生がついていけるかどうかに関する不安
- (31)授業に出てこない学生への対応に関する不安
- (22)学生間の噂やインターネットなどで誹謗・中傷を受ける不安

「教育システムに関する不安」

- (27)学部・学科のカリキュラムの目的や意義が分からないという不安
- (5)具体的に何をどのように教えてよいのか分からない科目を担当する不安
- (41)他の授業とのつながりがわからないことに関する不安
- (28)大学の教育方針と自分の授業の方針が合致しているかに対する不安
- (32)大学側から講義に関する決まりについて説明がないことへの不安

初任者の不安

表11 研修の実施率と初任者と機関の必要性の比較

項目	回答率	研修の実施	おおいに必要		
			初任	機関	差
02. 事務手続き		32.7	72.8	43.0	29.8
07. カリキュラム		18.4	60.2	43.3	16.9
06. 成績評価		15.7	56.3	40.0	16.3
04. 大学の経営戦略		17.1	36.9	27.9	9.0
11. ネットワーク等		12.2	41.7	36.2	5.5
08. 授業設計		13.4	33.0	35.1	-2.1
10. IT スキル		11.1	16.5	19.8	-3.3
05. 学生の実態等		16.6	35.0	39.1	-4.2
03. 職務倫理		27.3	42.7	48.1	-5.4
09. 授業方法		15.1	29.1	35.3	-6.1
01. 機関や部局の概要		34.3	29.1	39.1	-10.0

どうすればいいのか？

- 「心の準備」は必要。情報収集。
- 個人でもできること＝授業改善
 - － ティップスやノウハウ
 - ・ ここ数年で整備された。
 - － 教員同士が協働する
 - ・ 授業をしてみて、振り返り、他人の授業をみて、また振り返る。
 - ・ 自分の授業だけでは見えない視点。

答えがどこかにあるわけではない。

授業だけの問題か

- 個々の授業だけで解決できることは限られている。
- 教員だけの問題でもない。
- しかし、不満を口にしているも事態は改善しない。
 - － 大学人自らが、考えていくことが必要では？

参考になる文献

- 池田輝政 他著 (2001)『高等教育シリーズ』成長するティップス先生』玉川大学出版部
- 杉江修治 他編著(2004)『高等教育シリーズ125 大学授業を活性化する方法』玉川大学出版部
- ケン・ベイン著(2008)『ベストプロフェッサー』玉川大学出版部
- 中井 俊樹編(2008)『英語で授業シリーズ① 大学教員のための教室英語表現300』株式会社アルク
- 夏目達也 他著 (2010)『大学教員準備講座』玉川大学出版部

参考になるWebサイト

- － 教授・学習サポートツール(名古屋大学高等教育研究センター)
 - ・ <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/>
- － 高等教育用語集(愛媛大学教育企画室)
 - ・ <http://web.opar.ehime-u.ac.jp/vocabulary.htm>
- － あっとおどろく大学授業NG集(山形大学高等教育研究企画センター)
 - ・ <http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/kyouiku/video.htm>
- － 教授技術学習システム『匠の技』(岩手大学大学教育総合センター)
 - ・ <https://takumi.iwate-u.ac.jp/>
- － 京都大学オープンコースウェア(京都大学)
 - ・ <http://ocw.kyoto-u.ac.jp/>
- － MOST(京都大学高等教育研究開発推進センター)
 - ・ <https://online-tl.org/portal>

「大学院生のための教育実践講座－大学でどう教えるか－」

事後アンケート（Basic コース）

京都大学 FD 研究検討委員会

このアンケートは、来年度の本講座の実施と改善に役立てるために実施するものです。記名式になっていますが、結果の公表は、統計量あるいは無記名での自由記述の内容紹介にとどめ、個人が特定されることはありません。また、上記の目的以外に使用することは決してありません。ご回答のほどよろしくお願い申し上げます。

お名前：_____

ご所属：_____ 研究科

あてはまるもの 1 つに○をつけて下さい

ご身分：

■大学院生の方

課程 ① 修士 ② 博士

学年 ① 1 年 ② 2 年 ③ 3 年 ④ 4 年以上

■大学院生以外の方

① PD ② 研究員 ③ その他 ()

以下の設問に対して、もっともあてはまる番号に1 つだけ○をつけ、空欄内は自由に記述してください。

問 1 本講座への参加満足度は全般的にどのようなものですか。

5. 非常に満足している 4. まあまあ満足している 3. どちらとも言えない

2. あまり満足していない 1. まったく満足していない

その理由をお書き下さい。

裏面もご回答ください

II-3-2. 資料 4

問2 下記の(1)～(3)についてどの程度有意義であったか、お答え下さい。

5. 非常に有意義だった 4. まあまあ有意義だった 3. どちらとも言えない
2. あまり有意義ではなかった 1. まったく有意義ではなかった

(1) グループ討論 5 4 3 2 1

(2) 三二講義 5 4 3 2 1

(3) ボディー・ワーク・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5 4 3 2 1

問3 今後に向けて改善した方がいいと思われる点がありましたら、自由にお書き下さい。

[illegible]

問4 本講座では、Basic コース経験者や大学授業経験者を対象とした Advanced コースを設けています。来年度、Advanced コースが開講されるならば、参加したいと思いますか。

5. 強くそう思う 4. そう思う 3. どちらとも言えない
2. あまりそう思わない 1. まったくそう思わない

問5 来年度も本講座の参加案内の送付を希望されますか。

1. はい 0. いいえ

問6 今後も継続して大学の授業改善について考える次のようなコミュニティがあれば、参加したいと思いますか。

(1) SNS などを利用し、オンライン上で情報・意見交換をするコミュニティ

1. はい 0. いいえ

(2) 実際に集まり、対面で情報・意見交換をするコミュニティ

1. はい 0. いいえ

ご協力ありがとうございました

「大学院生のための教育実践講座－大学でどう教えるか－」

事後アンケート（Advanced コース）

京都大学 FD 研究検討委員会

このアンケートは、来年度の本講座の実施と改善に役立てるために実施するものです。記名式になっていますが、結果の公表は、統計量あるいは無記名での自由記述の内容紹介にとどめ、個人が特定されることはありません。また、上記の目的以外に使用することは決してありません。ご回答のほどよろしくお願い申し上げます。

お名前：_____

ご所属：_____ 研究科

あてはまるもの 1 つに○をつけて下さい

ご身分：

■大学院生の方

課程 ① 修士 ② 博士

学年 ① 1 年 ② 2 年 ③ 3 年 ④ 4 年以上

■大学院生以外の方

① PD ② 研究員 ③ その他（_____）

以下の設問に対して、もっともあてはまる番号に1 つだけ○をつけ、空欄内は自由に記述してください。

問 1 本講座への参加満足度は全般的にどのようなものですか。

5. 非常に満足している 4. まあまあ満足している 3. どちらとも言えない

2. あまり満足していない 1. まったく満足していない

その理由をお書き下さい。

裏面もご回答ください

II-3-2. 資料 4

問2 下記の(1)～(2)についてどの程度有意義であったか、お答え下さい。

5. 非常に有意義だった 4. まあまあ有意義だった 3. どちらとも言えない
2. あまり有意義ではなかった 1. まったく有意義ではなかった

(1) 模擬公開授業・検討会・・・・・・・・・・・・・・・・5 4 3 2 1

(2) グループ討論 5 4 3 2 1

問3 今後に向けて改善した方がいいと思われる点がありましたら、自由にお書き下さい。

[illegible]

問4 来年度も本講座の参加案内の送付を希望されますか。

1. はい 0. いいえ

問5 今後も継続して大学の授業改善について考える次のようなコミュニティがあれば、参加したいと思いますか。

(1) SNS などを利用し、オンライン上で情報・意見交換をするコミュニティ

1. はい 0. いいえ

(2) 実際に集まり、対面で情報・意見交換をするコミュニティ

1. はい 0. いいえ

ご協力ありがとうございました

大学院生のための 教育実践講座 2011

PFF Workshop for Graduate Students

～大学でどう教えるか～

この講座は、将来、大学教育に携わることを希望している本学の大学院生（PD、研修員などを含む）のために、フナカルティ（大学教員）へと自己形成していくきっかけとなる場を提供するものです。今年で第7回となりますが、「大学教育を考える視点が広がった」「院生同士のネットワークができた」と毎回好評を得ています。参加者の要望にあわせて、Basic（初参加者向け）とAdvanced（本講座参加経験者・大学授業経験者向け）の2講座を設けました。

なお、どちらの講座もプログラムの全てに参加した院生には、総長の修了証が授与され、就職に向けての1ステップになります。

（プログラムの詳細は裏面をご覧ください。）

主催：京都大学FD研究検討委員会

共催：関西地区FD連絡協議会

協力：高等教育研究開発推進センター

開 講 日：平成23年8月4日（木）
場 所：京都大学百周年時計台記念館 2 階
参 加 費：2,000円

※当日、受付で徴収します。
なお、キャンセルする場合は、7月28日までにお知らせください。
それ以降は、参加費を徴収させていただきます。

参 加 人 数：60名程度（Basic：40名程度、Advanced：20名程度）
※申込が多い場合は、先着順になります。

申 込 締 切：平成23年7月8日（金）
※なお、参加者には追って事前アンケートを送付します。

申 込 方 法：参加申込書をダウンロードし、
E-mailまたはFAXにてお申し込みください。
※京都大学HPのトップページ右横にリンクバナーがございます。
<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja>

申込・問い合わせ先：京都大学学務部教務企画課教育企画掛
E-mail：ksui-kkikaku-kyom02@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
T E L：075-753-2395（内線2395）
F A X：075-753-2485（内線2485）

大学院生のための教育実践講座2011

～大学でどう教えるか～

プログラム

BASIC

- 9:45～ 受付
- 10:00～ 開会式
 - 挨拶
理事(教育担当) 淡路 敏之
 - 趣旨とプログラムの説明
高等教育研究開発推進センター教授 大塚 雄作
- 10:20～ セッション1
 - グループ討論1
「大学授業をどう思うか(自己紹介)」
- 11:20～ セッション2
 - ミニ講義1
「大学授業の現在」
高等教育研究開発推進センター准教授 田口 真奈
- 11:45～ セッション3
 - ランチと自由討論
- 13:00～ セッション4
 - グループ討論2
「大学の授業で教師に求められるもの」
- 14:00～ セッション5
 - ボディワーク
「他者とのつながり・自分とのつながり」
京都文教大学教授 濱野 清志
- 15:40～ 休憩
- 15:50～ セッション6
 - ミニ講義2
「大学授業におけるガイダンスの重要性」
滋賀医科大学准教授 小島 隆次
- 16:15～ グループ討論整理
- 16:30～ セッション7
 - 全体討論
「大学で教えるために」
- 17:30～ セッション8
 - ミニ講義3
「大学で教えるために」
高等教育研究開発推進センター教授 田中 每実
- 17:50～ 閉会式
 - 挨拶・修了証授与
- 閉会式終了後～18:30 情報交換会

ADVANCED

- 9:45～ 受付
- 10:00～ 開会式
 - 挨拶
理事(教育担当) 淡路 敏之
 - 趣旨とプログラムの説明
高等教育研究開発推進センター教授 大塚 雄作
- 10:20～ セッション1
 - 全体討論1
「教える側からみた大学授業(自己紹介)」
- 11:45～ セッション2
 - ランチと自由討論
- 13:00～ セッション3
 - 模擬公開授業・検討会
- 15:40～ 休憩(10分)
- 15:20～ セッション4
 - グループ・全体討論
- 17:50～ 閉会式
 - 挨拶・修了証授与
- 閉会式終了後～18:30 情報交換会

留意事項

1. Basic講座では、ボディワークを行いますので、動きやすい服装・靴で参加してください。
2. 昼食、情報交換会等の飲食代は参加費から準備します。
3. 過去の講座の雰囲気は右記のURLをご参照ください。 http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/gp/gp_inseikoza.html

II-4. 新任教員教育セミナー

1. プログラムの目的と経緯

1-1. 全学的な取組として

京都大学では、全学的な FD 活動として、毎年 9 月に、高等教育研究開発推進機構主催の「全学教育シンポジウム」が開催されている。このシンポジウムには、総長・理事をはじめ 200 名あまりの教職員が参加し、教育に関するテーマについて情報提供や意見交換が行われている。だが、教育経験別教育研修としては、大学院生対象の「大学院生のための教育実践講座」（II-4 参照）が実施されているのみで、全学的な教員向けの研修は平成 21 年度まで行われていなかった。

一方、京都大学の第 2 期中期目標・中期計画では、学内の取組事項として下記の項目があげられている。

- ・ FD 研究検討委員会において FD の現状分析を行い、情報の共有化を促進する。
- ・ 在学生、卒業生による授業評価の実施について検討する。
- ・ 部局 FD への支援を行う。
- ・ 院生・OD 等を対象としたプレ FD の普及を行う。
- ・ 初任者研修を実施する。
- ・ ワークショップ等による情報の共有化を図る。

工程では「初任者研修」は平成 23 年度から実施することとなっていたが、平成 22 年度より試行的に実施することになり、センターが学務部教務企画課の支援を受けながら企画・運営にあたることになった。本年度は第 2 回である。

1-2. 目的と名称

「初任者」とは、ふつう「採用の日から 1 年間」以内の教員を指し、初等・中等教育では、初任者研修が法律で義務づけられている（教育公務員特例法第 23 条）。大学では初任者研修は義務づけられてはいないものの、近年、初任者研修を実施する大学は増えている（関西地区 FD 連絡協議会の「FD 共同実施ワーキンググループ」は初任者研修の共同実施を行っている。III-4 参照）。

しかし、初等・中等教育の「初任者」が教育実習以外にはほとんど教壇に立った経験がない教員であるのに対して、大学教員の場合は、その大学で採用されて 1 年間以内であっても、他の大学での教育経験をもっている場合が少なくない。したがって、初等・中等教育の教員と大学教員とでは、自ずと初任者研修の目的も異なってくる。とりわけ、京大の場合は、新規採用教員の中に、長い教育経験を有する教授も少なくないことが予想された。そこで、私たちは、「初任者」に代えて「新任教員」という呼称を用いることにし、その研修の目的を、＜京都大学らしい教育とはどのような教育か＞を考え、＜そうした教育を行うためにどのような教育サポート・リソースがあるのか＞＜大学・部局や教員はどんな教育課題を抱え、それにどう取り組んでいるか＞を知ってもらうこととした。これは、「本学の理念や目的に呼応したファカルティ・ディベロップメント（FD）」という中期目標の内容にも合致している。

本年度は、試行として実施された平成 22 年度の反省を受け、以下の 4 点についてプログラムの改定を行った。1 つ目は、京都大学では毎年 4 月に事務的なガイダンスを中心とした教職員研修が行われているため、その研修と重複する内容を除いたという点である。これによって、より教育に特化したプログラム構成とすることができた。2 つ目は、「京都大学の教育サポート・リソース」(<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/center/support-resource.pdf> よりダウンロード可能、資料 1) を作成したことである。学内に複数ある教育サポート・リソースを横断的にまとめたパンフレットを作成し配布することで、個々の教員が日常の教育活動の中で抱える問題に対して、直接的・間接的に対応するための情報を提供することを意図した。3 つ目は、プログラムの中に「私の授業」というセッションを設けたことである。教育経験豊富な教員に実際に自分の授業について語ってもらうことで、より具体的に京都大学らしい教育について考えるきっかけとしてもらうことをめざした。4 つ目は、グループワークのテーマの見直しである。平成 22 年度の試行結果を受け、グループワークのテーマを一部修正した。

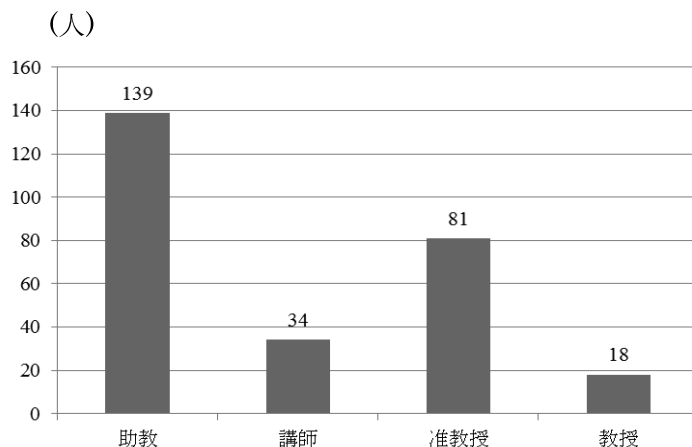
以上の作業により作成された本年度のプログラムは、具体的には、全体を、全学のポリシーの説明（セッション 1）、京大生の特徴の紹介（セッション 2）、京大の教育的取組の紹介（セッション 3）、京大の授業実践の紹介（セッション 4）、各教員の試みの紹介とグループ討論（セッション 5）、全体での共有（セッション 6）、という 6 つのセッションで構成した（2-1「開催日時とタイムテーブル」参照）。全学、部局、個々の教員という異なるレベルでの教育的取組を、ミニ講義や討論などを通じて理解してもらうことを意図したものである。前期終了後の 9 月に実施することで、前期の教育経験をふまえてそのふり返りの機会となることもめざした。

1-3. 対象者

新任教員といっても、職位、雇用形態などきわめて多様である。また、この研修は教育目的に限定されているので、研究を目的に雇用された教員については除外する必要がある。そこで、本研修の対象となる新任教員を、「平成 22 年度の本セミナー実施以降、本学に採用されて、正規科目を担当している者」と定義した上で、学務部教務企画課経由で、各部局に対し、該当者のリストをあげてもらおうよう依頼した。

その結果得られた対象者（計 272 名）の分布を、(1)職階別、(2) 新採・昇進別、に表すと以下ようになる。職階別では助教の人数が最も多い。また、新卒・昇進別では新卒の方が多かった。昇進については、それまでの職階では教育活動に従事していなかったが、昇進によって従事するようになった者が含まれていると考えられるだろう。

(1) 職階別



■内訳

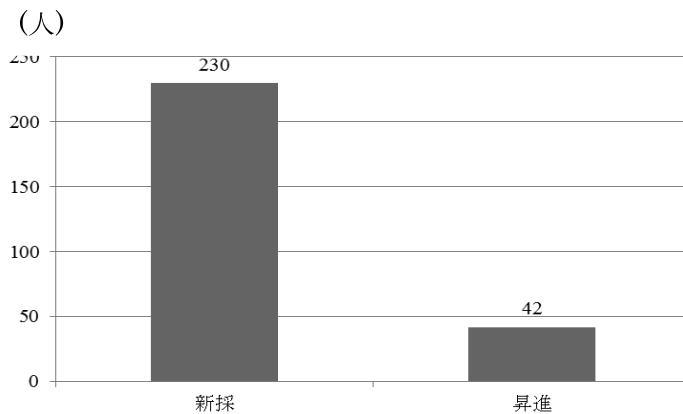
助教（助教 42 名、特定助教 66 名、大学院担当助教 31 名）

講師（講師 14 名、特定講師 12 名、大学院担当講師 8 名）

准教授（准教授 23 名、特定准教授 35 名、大学院担当准教授 23 名）

教授（教授 10 名、特定教授 4 名、大学院担当教授 4 名）

(2)新卒・昇進別



2. プログラムの実際

2-1. 開催日時とタイムテーブル

開催日時：2011 年 9 月 1 日 13:00～17:50

開催場所：京都大学時計台百周年記念館

参加人数：61 名

タイムテーブル

13:00	開会式（司会・進行：高等教育研究開発推進センター教授 大塚雄作） 挨拶 京都大学総長 松本 紘 趣旨説明 高等教育研究開発推進センター長 田中 每実
13:10	セッション 1：ミニ講義 1「現在の大学教育の動向と京都大学のポリシー」 教育・学生担当理事 淡路 敏之
13:30	セッション 2：ミニ講義 2「京大生の学習と生活」 高等教育研究開発推進センター准教授 溝上 慎一
14:30	セッション 3：ミニ講義 3「京大の教育的取組」 全学共通教育（ポケゼミ） 少人数教育部会部会長 吉田 純 K.U.PROFILE 国際交流推進機構長 森 純一 文学研究科（プレ FD） 文学研究科准教授 出口 康夫 京大の教育サポート・リソース 高等教育研究開発推進センター
	セッション 4：ミニ講義 4「私の授業」 理学研究科教授 戸部 博
	休憩
15:30	セッション 5：グループ討論 「京大でどう教え、指導するか」

17:00	セッション 6：ラップアップ
17:50	閉会式 挨拶：高等教育研究開発推進センター長 田中毎実

2-2. セッション 5 グループディスカッションのテーマ

テーマ 1. アクティブ・ラーニング型の授業をつくる

- ・ 事例紹介・情報提供：学術情報メディアセンター教授 喜多 一
- ・ テーマの説明：グループワークや発表など、学生の授業参加を促しながら、授業内容のレベルも維持するにはどうすればよいのか。

テーマ 2. 学力の低下、学生の多様化にどう対応するか？

- ・ 事例紹介・情報提供：工学研究科准教授 須田 淳
- ・ テーマの説明：京大生の中にも、受験産業にどっぷりつかったために本当の勉強のしかたが分からない学生や、自分の選んだ専門分野に対する興味の希薄な学生もいる。どんな学生に照準を合わせ、そこからどう引き上げていくか。

テーマ 3. 英語による授業をどう行うか？

- ・ 事例紹介・情報提供：農学研究科教授 縄田栄治
- ・ テーマの説明：留学生を含む英語による授業では、日本人学生に対する日本語による授業とは異なる工夫が必要になる。それはどんな工夫か。

テーマ 4. ソーシャル・メディアを使った双方向型授業

- ・ 事例紹介・情報提供：経営管理研究部教授 若林靖永
- ・ テーマの説明：Twitter など新しいソーシャル・メディアを使って、双方向型の授業をどうつくるか。

テーマ 5. 困難を抱えた学生に向き合うには？

- ・ 事例紹介・情報提供：カウンセリングセンター長 青木健次
- ・ テーマの説明：修学上の不適応を起こした学生に対し、教員はどう向き合えばよいのか。

テーマ 6. 博士課程院生のキャリア形成支援

- ・ 事例紹介・情報提供：キャリアサポートセンター教授 梅田幹雄
- ・ テーマの説明：欧米と同様、わが国でも文系・理系を問わず、博士課程修了者が社会で広く活躍することが求められつつある。博士課程院生に対して、アカデミック・ポスト以外のキャリアも含む多様なキャリア形成を支援していくにはどうすればよいだろうか。

2-3. セッション 5 のまとめ「各グループではどのような議論が行われたのか」

セッション 5 では、参加者が 6 つのテーマの中から自分の希望するものを選択し、テーマごとにグループに分かれてディスカッションが行われた。ディスカッションは、初めに事例報告者による事例報告が行われた後、ファシリテータの司会によって自由に展開された。そしてその結果は、各グループの代表者によって「セッション 6：ラップアップ」で報告された。以下に示したのは、各グループのディスカッションの概要である。この概要は、当日の発表の逐語録を元に報告者によって作成されたものであるため、口語体となっている。

グループ 1「アクティブ・ラーニング型の授業をつくる」

事例紹介・情報提供：学術情報メディアセンター教授 喜多 一
ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター准教授 田口真奈

第1班のテーマは「アクティブ・ラーニング型の授業を作る」でした。グループでの議論を通じて、必ずしも全ての授業においてアクティブ・ラーニングが必要ではない、ということが明確になりました。例えば喜多先生から伺ったポケットゼミの成功例のように、少人数クラスにおいて双方向の授業は大変有効であり、学生にとって有意義であることがわかりました。その一方、大人数対象の講義では、双方向性を保つアクティブ・ラーニング型授業は、通常困難です。一例として、講義中に学生自身に考えさせるために指名しても、学生はなかなか答えられず、双方向性は保てません。その一つの解決法として、指名する前に自分の考えを紙に書かせた上で発表させる、などの工夫がアクティブ・ラーニング型授業と言えます。別の例では、学生に授業の目的意識を持たせるために、講義の最初で「なぜこの授業を受けるのか」「将来どのような目的があるのか」というのを授業者が学生の前で明らかにすることで、学生の意欲を上げ、アクティブ・ラーニング型授業になるのではないかと、という意見がありました。

確かに、学生にとっては、講義中に質問を受けるのは恥ずかしく、ディスカッションは難しい面があります。しかし、大学を卒業したら、自分の意見を言わなければならない場が増えるので、大学生のうちから訓練する必要があります。よって、自分の意見を発言する訓練という面からも、アクティブ・ラーニング型授業の導入はますます必要になっていくと思います。

(報告者：化学研究所助教 榊原圭太)

グループ2「学力の低下・学生の多様化にどう対応するか」

事例紹介・情報提供：工学研究科教授 須田 淳
ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター教授 松下佳代

第2グループの「学力の低下・学生の多様化にどう対応するか」をまとめさせていただきました、工学研究科都市社会工学専攻の小池克明です。多分、出席者の中で一番年上ということで、お鉢が回ってきました。

このセッションには8名の参加者がありましたが、すべて理系の先生でした。まず、これまで半年間のご経験をもとに、授業の中で京大の学生にどのような問題があると感じておられるのかを、各先生から話していただきました。共通して出された問題をご紹介します。

第一には、学生の思考が幼稚化しているということ。論理的思考能力が低下していて、応用力に欠ける—簡単な問題なら解けるけれど、ちょっとひねると全然解けなくなる—、そういう問題が挙げられました。

二番目は、学習意欲の低下です。学力の低下自体は他大学と比べると、京大ではまだそれほど大きな問題ではないけれど、その学力よりもモチベーションの低下の方が問題ではないかという意見が出されました。

第三は、留学生の問題です。京大には2千人近く留学生がいますが、その中に学力が非常に低い学生がいる。日本人学生だけでなく留学生の学力の低下の問題もあるのではないかと、ということが挙げられました。

第四は、学生の多様化です。多様化というのは、一つは、トップクラスの学生と、全然勉強がわからない学生とに分かれているという、幅の大きさということですが、もう一つ、留学生や社会人学生の増加という、そういう面での多様化もあります。その意味での多様化は非常に良いのではないかと、という意見がありました。

また、こうした学生の問題に対する指導の問題もあわせて挙げられました。私たちの学生の頃に比べて、今は指導体制が非常にキッチリしてきています。例えばレポートや本試験を添削して返しておられる先生もいるかと思いますが、そういう新しい指導にどう取り組むかということです。また就職志望の学生が大学院生にも多くいますが、そういう就職志望の学生に対して、研究へのモチベーションをどうすれば保たせられるのかということも問題として挙げられました。

このように、参加者から各自が感じている問題を出しあった後に、須田先生から電気電子工学科の取り組みとご自身の授業での取り組みが紹介されました。須田先生の授業で特に面白かったのは、座学ではなくて、手を動かせるということです。どうしても話を聞いているだけではわかるようにはならないものですが、須田先生の授業では、毎回、復習レポートを出して、授業で学んだ知識を使って問題を解かせるということをさせておられるそうです。また、電気電子工学科では、夏休みにサマーキャンプといって、3日間くらい、プロジェクト型の活動をやっているそうです。

その中で感じている問題として、須田先生から、そういう活動をさせると、トップクラスの学生はさらに伸びるけれど、勉学の意欲のない学生は、せっかく良い企画があっても参加しないということがあげられました。

このような取り組みに対して、参加者から、「そういう学生にケアをすればするほど、学生がケアされることに慣れてしまって、さらに教員の負担が増すのではないか」というような懸念が出されたのですが、須田先生からは「こういう手間をかければ伸びる学生はぐんぐん伸びていくし、自分の研究室に入ってくれることもあるので、決して苦労ばかりではない」という回答をいただきました。一方で、「このような丁寧な指導ができればよいが、教員に対して労力が大きすぎるので、学期末試験やレポートの採点にはTAを付ける、というようなシステムを作っていたきたい」という要望も出されました。

プロジェクト型の活動でもモチベーションの上がらない学生は、卒業研究になっても上がらないということでしたので、1、2回生の時にどうやってモチベーションを上げるかが大事だ、ということになりそうです。友人にモチベーションのある学生がいればそういう問題は避けられるのですが、それだけでなく、教員の側からも、モチベーションのある学生を積極的に後押しするということが大事なのではないか、という意見も出されました。

要は、学生と一人一人向き合えるように、教員が再度、努力していかなければならないし、また、それを支える体制づくりが必要だと思います。以上です。

(報告者：工学研究科教授 小池克明)

グループ3「英語による授業をどう行うか？」

事例紹介・情報提供：農学研究科教授 縄田栄治

ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター特定助教 田川千尋

第3グループの農学研究科の吉永です。第3グループは「英語による授業をどう行うのか？」ということについて、ディスカッションを行いました。私個人は入学したての1回生の時にKUINEPに参加しました。受講者は留学生が半分、日本人が半分といった講義で、日本人が週を追うごとにどんどん脱落していくというような感じでした。英語で授業を行う時、京大で英語の授業を増やしていく時にどういうことが問題になっていくのかという点については、現在も興味がありますが、これらについて今日は縄田先生からいろんなことを指摘していただきました。まとめますと、まずはテクニカルな問題があります。例えば英語で授業をすることによ

って情報量が減ってしまうとか、専門分野の単語をどう英語で表現していくのか、という点については技術的に改善することは可能ではないかと。例えばスクリーンに日本語を併記するか、プリントで補足するといったやり方があると教えていただきました。一方で、留学生と日本人が同じクラスに混在することで生じるメンタルな問題として、例えば日本人学生の発言がいつも以上に出てこないという現象も紹介されました。その点についても、グループディスカッションの形式をとる、教官の側からも発言を喚起するような雰囲気をつくる、授業後にメールで個別にバックアップして対応していく、という方法があげられました。

今回G30という事例にどういう改善可能性があるかということを中心に話が進んでいたんですが、根本的な問題として、英語で貫くことが重要なのか、内容を相手に理解させることが優先なのか、ということがあり、これはなかなか解決しにくいのではないかと感じました。まだまだこの問題点については、これといった正解はないということで、一人ひとりの先生が試行錯誤しながら授業をしていくしかないのではないかと、というところに議論はまとまりました。以上です。

(報告者：農学研究科助教 吉永直子)

グループ4「ソーシャル・メディアを使った双方向型授業」

事例紹介・情報提供：経営管理研究部教授 若林靖永

ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター特定准教授 酒井博之

それでは第グループ4の「ソーシャル・メディアを使った双方向型授業」についてのまとめをさせていただきます。このグループでは、経営管理大学院の若林先生が事例紹介をご担当いただき、その事例を使ってどういうふうに授業をしていけばいいのかということをお話されました。セッションの内容をまず簡単に話しますと、ツイッターやフェイスブックといったソーシャル・メディアを使って、授業において双方向のコミュニケーションを取り入れた時にどういうことが起こるかという事例紹介を我々が聞いて、その後のディスカッションで勉強させていただいたという感じです。

いくつかポイントがあります。この資料に若林先生のレジュメがありますがけれども、おそらく一番大事なことは、先生が伝えたかったことの80%、85%ぐらいは、まず授業そのものの良さが第一義的に重要であるということです。双方向性を考える前に、授業を考えましょうということを一番最初に伝えられたと認識しております。その上で双方向性ということをお考えないといけないということです。また、質問をしてくれるような双方向性の高い学生、例えば何か聞きに来るだとかメールを投げるとか、そういったことを起こす学生と、そのような学生の成績の間に相関があるのではないかと感じておられるというお話もありました。ただ教壇で質問がありますかと教員が尋ねても、誰も手をあげないということは仕方のないことではないとも言われました。そこでツイッターをツールとして使うことによって、全員とはいわないまでも、10%から20%ぐらいの学生がツイッターを通して発言をするようになってくれる。これは0よりもすごくいいことなんじゃないかということです。発言を基にどういうふうな学生がどのくらい理解してくれているのかを確認したりもできます。双方向性を求めるためには、例えばアンケートのようなものを毎回の授業で紙で配って回収するということもできますが、それよりもツイッターのいいところは、何か疑問に思った時に、それをその場で発言できるということです。その場で発言して、若林先生は授業のスライドを映しているところにリアルタイムに表示するということをやっておられる。それに対してその先生が「あ～この質問はね・・・」とこういう感じで答えていけるような環境になっているという、そういうところが大事だとい

うことです。

最後、課題についていうと、今はその利用率が10%から20%ということでしたので、情報メディアに対するリテラシーの向上や大学の環境整備が重要であると思いました。インターネットが使えない部屋が存在するといったことがあるそうなので、その辺りについては改善の余地があるのかなというふうに感じました。以上です。

(報告者：情報学研究科助教 大島裕明)

グループ5「困難を抱えた学生に向き合うには？」

事例紹介・情報提供：カウンセリングセンター長 青木健次

ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター特定准教授 及川 恵

農学研究科の鬼頭と申します。大学教育の中で困難を抱えた学生に対するケアに関してお話しさせていただきます。私自身、これまで関わってきた学生の中に問題を抱える人がいた経験がありましたので、このグループに参加しました。また、このグループに参加された先生方の多くが、自分の関わってきた学生の中に問題を抱えた学生がおり、どのようにケアを行っていかばよいのかについて悩んでいらしたそうです。このグループでは、ディスカッションというよりも、カウンセリングセンターの青木先生のお話とそれに対する質疑という形で行われました。その内容についてご報告させていただきます。

まず青木先生より、新入生から大学院生に至るまでの過程と、学生がその中でどのような問題を抱えるのかについてお話がありました。まず入学後の問題です。当然個人差が大きいわけなのですが、大学生活の中であれもこれもやろうと思いつつ、オーバーペースになって、睡眠・食事のペースが崩れ、そして鬱の状態に至ってしまう学生がいるということです。こうした際には、目標をうまく切り替えて、自己イメージを修正していくことが必要になります。

また2回生や大学院生になると、実験など共同で行う研究が始まり、対人関係に問題を抱える学生が出てきます。こうした問題を抱えても、周りに相談できないことがあるのですが、教員にだけは相談できる場合があるため、教員はそういった相談を受け、話をする役割があります。

また鬱についてですが、鬱とはダムの水位が下がった状態であって、水位を上げることが必要であるということです。薬だけに頼るのではなく、元々の水位を上げることが必要というお話でした。どのようにして治していくのかということですが、まず薬の助けを借りて生活のリズムを整えていくこと。そして次に身体を動かすこと。その次に、リズムが整えられてきた時点で、自分自身で取り組むことのできる活動を確保して少しずつ増やしていくこと。そして最終的に、医師の指導の下に薬をやめていくということです。こうしたプロセスの中では、大学あるいは個々の教員だけの問題ではなく、学生本人と個々の教員、それから学内の専門家すなわちカウンセリングセンターの先生方ですね、それから医療機関、そして保護者の方と、そうした五者の協力、そして役割を認め合うことが重要になっていくということです。

また、専門家にみせた方がよいと考えられた場合にどうするかということについてですが、まずちょっと重い方から勧めるのがよいということでした。病気なのではないかということで、まず京大の診療機関と医者を勧めると。そこまでの問題ではなく、薬は必要ないということであれば、その次にカウンセリングセンターを勧めることになります。ただし、医師のところに行くのを嫌がるようであれば、まずカウンセリングセンターを勧めてくださいということでした。

このセッションを通して私が特に感じたこととしては、向き合い方というのは学生ひとりひ

とりの状況に応じて異なるわけなんですけれども、医療機関や、あるいはこういうカウンセリングセンターを訪れるハードルを下げていくことが重要なのではないかと思います。また学生に向き合うにあたって、他の先生やカウンセリングセンターの先生、あるいは学生の保護者、あるいは医療機関と相談すること、相談するということのハードルを下げるのが重要になってくるのではないかと感じています。以上です。

(報告者：農学研究科特定助教 鬼頭弥生)

グループ6「博士課程院生のキャリア形成支援」

事例紹介・情報提供：キャリアサポートセンター教授 梅田幹雄

ファシリテータ：高等教育研究開発推進センター特定助教 半澤礼之

環境安全保健機構の安田と申します。我々グループ6におきましては、「博士課程院生のキャリア形成支援」というテーマに関しまして、キャリアサポートセンターの梅田先生、そしてファシリテータの半澤先生のもと、我々の方8名合わせまして、計10名でディスカッションを行いました。我々のグループの方々、実はここに来るまでにいろいろなキャリアを積んでこられた方ばかりで、皆様苦勞をされているということにして、それぞれの経験に基づいたディスカッションとなりました。

まず、「博士課程院生のキャリア形成支援」というテーマを議論する上で、とても重要な点としては、何より京大の博士課程学生はアカデミア志望が多い。その一方で、アカデミアとして就職できる大学院生の具体的な数字を把握しておかないといけないと思います。皆さん、その値が何パーセント程度かご存知でしょうか？この点について梅田先生からいただいた情報によりますと、配付資料37頁の右下の方に赤字で書いてありますように、博士課程の院生で、アカデミアへの就職率はわずか10%です。すなわち10人の学生がいるとすれば、そのうちアカデミアへ行くのが1人、それ以外へ進むのが9人です。この点について、アメリカは率が高いらしいのですが、それでも25%程度だということで、アカデミアへの就職は困難だという現状を踏まえておかなければいけません。我々は教員として大学院生の進路指導をしないといけません、我々というのはアカデミアの住人です。つまり、アカデミアへの道の進路指導は容易にできるわけですが、それ以外の道、それは主に産業界になるわけですが、そういった方向への進路指導を行うというのは非常に難しいため、どのように取り組んでいけばよいのだろうということをこのグループではディスカッションさせていただきました。色々議論させていただいたのですが、こういった話は簡単に答えがでるものではなく、地道に見ていかなければいけないという方向で議論が進みました。そこで大きく3つほど、方向性について提案が出ましたのでここで報告させていただきます。

第一に、大学の中だけにいますと、学生が触れ合うのは、我々のような教員に偏ってしまうということがあります。大学院生を産業界にも送り込むといったことを考えた場合、彼らにとってアカデミアと産業界といった異なる選択肢がある中で、片方にしか触れる機会がないということはよろしくない。ですので、アカデミアの側として成功している大学教員だけではなく、産業側で就職した人間側の情報も得られるようにしないといけない。そのためには、研究室の中ではきちんと研究の指導をするものの、学外に出たときには、たとえば学会では発表だけをさせるのではなく、企業の方々との懇親会の場など、様々な領域の方と関与できる場をきちんと学生に対して作らないといけないといったことがあげられると思います。

第二に、そういう他領域の方との場においては、自分の研究領域の話をするだけでは十分とはいえません。例えば、研究一つに関しても、バックグラウンドを含めて幅広くかつ色々な

角度の切り口で語ることができるようにしておき、相手と話せる話題を数多く持てるようにしておくことが重要なのです。そのためには、論文執筆などの研究出力を出すだけでいっぱいにして、自分の研究を様々な側面から見ることができるような、バックグラウンドからきちんと勉強する時間を学生に与えないといけないということが考えられるのではないのでしょうか。

最後に、大学院生が志望の視野に入れる企業に関して、選択肢の幅という問題があります。すなわち、京大は大学としては全国でも高いレベルにあるわけですが、大学院生の就職に関しては無理にネームバリューの高い企業を求めないということです。名が知れておらずとも実力を兼ね備えており、かつ新戦力を求める企業も日本には数多くあるわけで、我々教員側も産業界のそのような事柄について具体的に知っておかないといけないです。そして、研究室に所属する学生に対しては、アカデミアと産業界の良いところと悪いところの情報を、包み隠さずに両方まとめて発信するといったことをしていかななくてはいけないと思います。

まとめますと、産学の現実の状況を広く踏まえて指導していけば、博士課程学生のキャリア支援にもなると期待しております。またその結果、産業界の状況を見ながらもアカデミアを選択したという学生が、時がたって指導する立場になった時代には、現在と比べてより産学の両方の視点を持った教員ということになります。このようにすることで、10年後20年後といったスパンで、徐々に支援の体勢ができるようになっていけるものと考えております。以上です。

(報告者：環境安全保健機構助教 安田幸司)

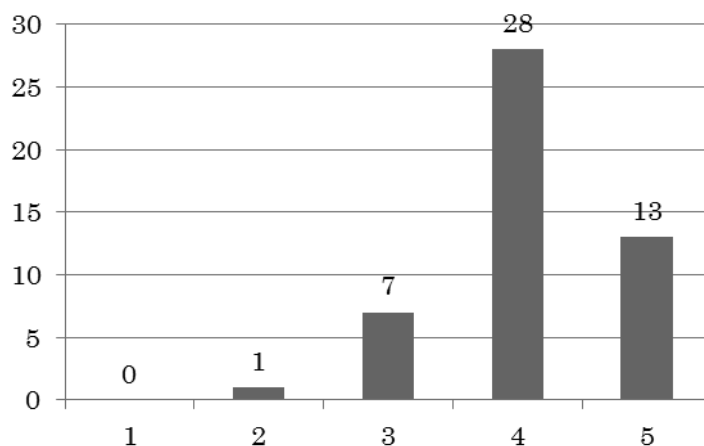
2-4. 参加者からの意見・感想

新任教員教育セミナー参加者に対して、セミナーに対する意見・感想を問う事後アンケートを行った。その結果、52名から回答が得られた。回答者の内訳は教授4名、准教授11名、講師6名、助教18名、不明13名であった。各質問に対する回答を以下に示す（質問によっては欠損値がある）。

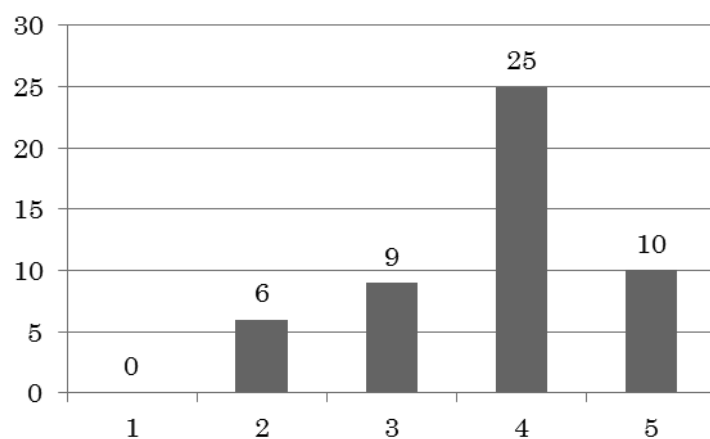
(1) 質問1.各セッションの有意義度

各セッションの有意義度を「1.まったく有意義ではなかった」～「5.非常に有意義だった」の5件法で尋ねた。平均で3.98～4.36となり、全体として高い評価を得ることができた。特にセッション5「グループ討論：京大でどう教え、指導するか」の平均値が4.36と高い値を示した。

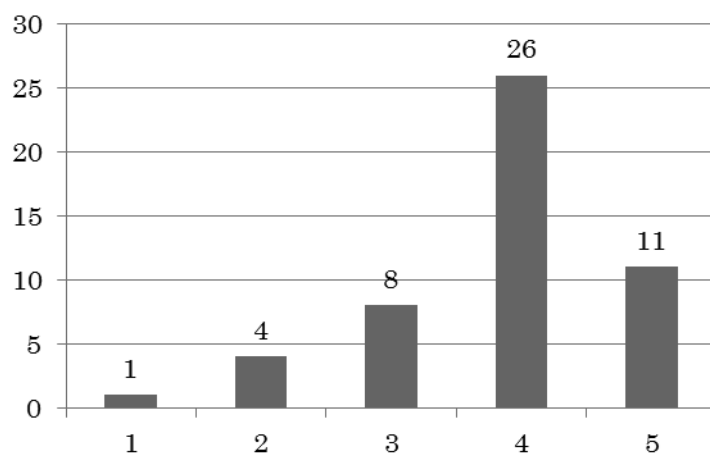
a.全体の総合評価 平均値：4.08



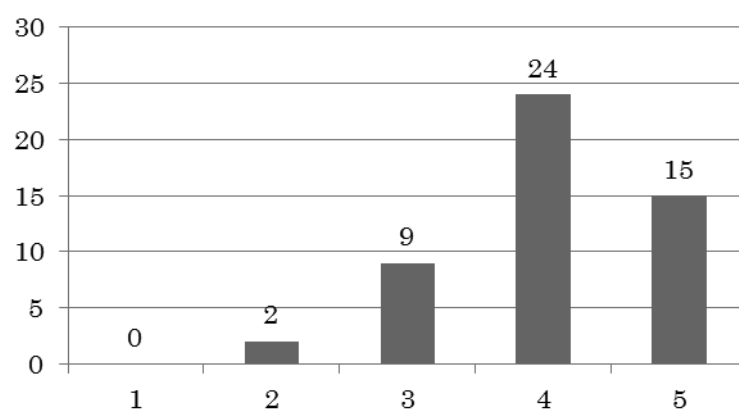
b.セッション1「現在の大学教育の動向と京都大学のポリシー」 平均値：3.78



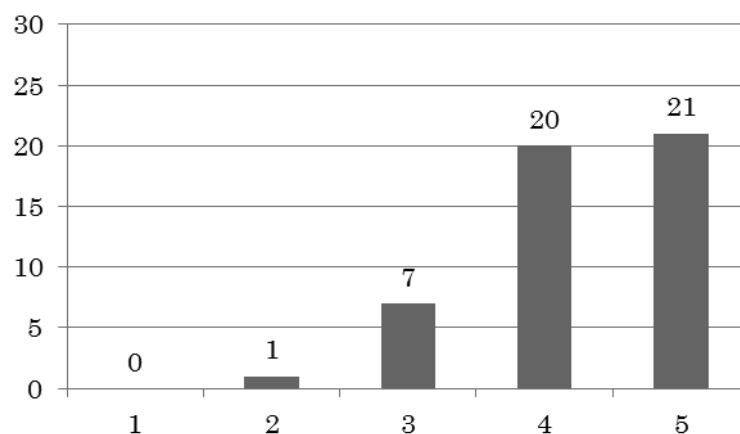
c.セッション2「京大生の学習と生活」 平均値：3.45



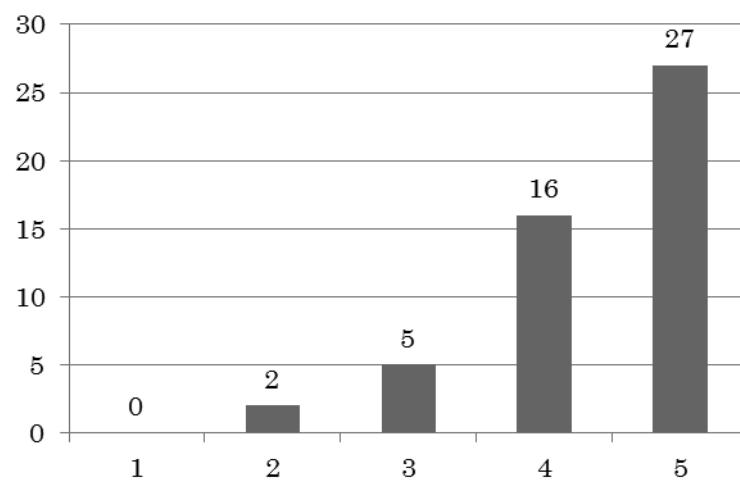
d.セッション3「京大の教育的取組」 平均値：4.04



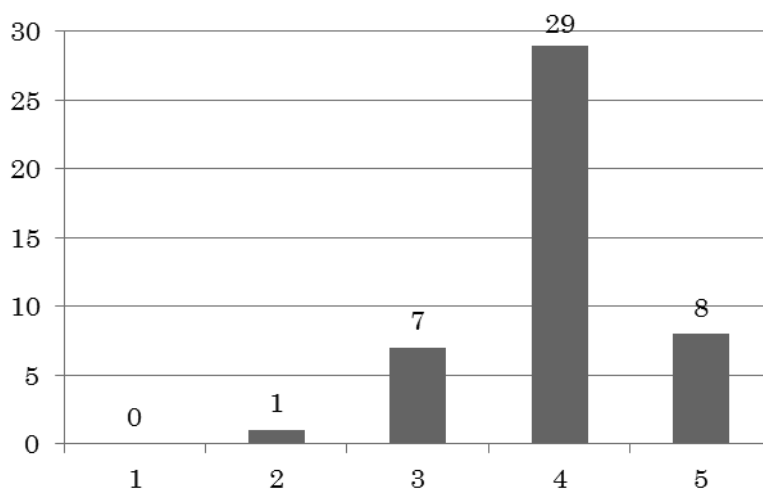
e.セッション4「私の授業」 平均値 4.24



f.セッション5「グループ討論」 平均値 4.36



g.セッション6「ラップアップ」 平均値 3.98



(2) 質問 2. セミナーの開催時期について

セミナーの開催時期について「適切であった」「どちらともいえない」「適切ではなかった」のいずれかを選択してもらい、その理由を自由記述で尋ねた。その結果、「適切であった」が 30 名、「どちらともいえない」が 16 名、「適切ではなかった」が 3 名という結果であった。概ね肯定的な評価が得られたが、適切ではなかったとする理由として以下の記述が見られた。

■適切ではなかった

- 本セミナーの出席について上司におしかりを受けた。「特定拠点助教に教育セミナーは必要ない！」とのこと。各学部・各研究科の教授会できちんと承認とれているのか非常に疑問だった。
- 着任してから半年ではなく、1 サイクル経験した 1 年後が良かったです。
- フィールド調査に出る研究者には夏季の中央は出席するのが難しい。

(3) 質問 3. セミナープログラムに追加するとよいと思われる内容

セミナーを受講した上で、プログラムに追加するとよいと思われる内容を自由記述で尋ねた。その結果を内容ごとに整理したものが表 1 である。現在のプログラムに組み込まれている内容の改善を求めるものから、新たなプログラム内容の提案まで、様々な記述が得られた。

表 1. 追加したほうがよいと思われるプログラムとその記述例

追加した方がよいと思われるプログラム	記述例
京大の教育や教育観	海外の大学では、研究の出力が低くとも、教育の良い（講義の人気のある）先生はデニユアとして採用される。日本の場合は、研究業績は評価の対象として扱われる一方で、教育への評価は無いに等しい。京大として、教育へのウエイトをどのようにしていくのかの方針に対する講義。
私の授業	追加よりもむしろ、減らす方がよい。ただし、学外から来た教員、京大から離れていた期間が長い教育むけにまず、全体像を解説してほしい。パンフレットのタイトルになっているが、そもそも FD の意味が分からない。
私の授業	私の授業、のような小セミナー(20 分くらい)が楽しく参考になるかも。 「私の授業」をもう 1 つくらい追加しても良いと感じた。
教育方法・授業法	授業のしくみについて（現行の単位やシラバスの書き方等） 何かひとつ「このようにするとよい」という方法論を入れておくとよいと思います。それが Tips のレベルでも。本来 Session4 はこのためにあったように感じました。
学生	学生の能力の変遷に関する客観的資料はありますか。京大生の意識調査の結果はありますか。 心に問題を持つ学生に対するケアなど。
大学院	大学院の指導に関して、学部とは異なるものがあると考えます。そのようなコースがあるとよいかと思います。
セッション	近い分野毎のセッション（語学なら語学など） 質疑応答の時間、他を減らして。

(4) 質問 4. 「セッション 5：グループ討論」に追加するとよいと思われるテーマ

セミナーを受講した上で、「セッション 5：グループ討論」に追加するとよいと思われるテーマを自由記述で尋ねた。その結果、表 2 のような記述が得られた。「学生評価・対応」「アカハラ」といった内容や、社会貢献に関わるものまで、多様な記述が得られた。

表 2.追加するとよいと思われるテーマとその記述例

追加するとよいと思われるテーマ	記述例
学生評価・対応 (含留学生)	学生に学ぶ目的をどう意識付けるか？大学生になってそもそも何のために学んでいるのか？講義を受けているか？学生の目的意識がうすい。 「留学生との向き合い方」文化の違いなどといった問題もあるが、京大生との学力や基礎知識の違いに対して、どう対処すべきかについても問題になってくると思います。
アカハラ	アカデミックハラスメントに関して、相談を受けたら、見たら—その対応方法—
その他	企業技術者などへの教育（すなわち学生以外一般人への教育）を大学として如何に行うか、社会貢献の形として考える 教員の教育方法をいかに教育するか？

(5) 質問 5. セミナーの改善点

セミナーを受講した上で、改善したほうがよいと思われる事柄を自由記述で尋ねた。その結果、表 3 のような記述が見られた。「時間的な余裕」については昨年度も同様の指摘が得られており、今後の検討課題とする必要があるだろう。

表 3.セミナーの改善点

改善点	記述例
時間的な余裕	各講義の時間が短すぎる。もっと時間をとってゆっくり説明してほしい。 時間がタイトで中身が豊富だったので、すべての内容についていくことが出来なかった。もう少し内容を減らしてもいいのでは・・・。
京大らしい教育を知りたい	京大らしい教育とは、何か分からなかったので、もう少し分かり易く具体的に示してもらえたらと思った。（抽象的答えはあるが、具体的には答えはない？） こういうのは京大生への講義として正しいのか、間違っているのが正直わからない。（手取り足取り教えること）（課題が多いこと）・・・京大外から着任したものにとって、その辺りもわからない状態です。何かフォローしてほしい。別に自由にやっていいなら良いのですが、他先生とお話すると、「京大スタイル」があるようで・・・。考えすぎでしょうか？
対象	新任向けよりは、全員を対象としてアイデアを交換する場にしたい方がよいと思う。ワンテーマの研究会にしてはどうか。 難しいとは思いますが、新任だけでなく、このような企画がいろいろあるとよいと思います。

参加方法	より多くの人に参加をうながすべき。新任でも簡単に欠席できてしまう。 新任教員は全員参加にすべきではないか。
京大生について	京大生の学習と生活の統計データは、聴衆としては役に立たせることのできない切り口。学部ごとに統計をとったデータを見せられても、対応のしようがない。 学生の教育がテーマだったが、学生の生の姿、意識、不満、問題などはよくわからなかったです。全国的に見て京大生がどのような特徴を持っているかのもとになっているアンケートの実施方法などをもっと具体的に知りたかったです。
その他	グループ討論のグループ人数を10人以下(6人程度)にしてはどうか。同じテーマのグループが複数あってもかまわないと思う。限られた時間での討論を深めることが難しい。

(6) 質問 6. セミナーのよかった点

セミナーを受講してよかった点を自由記述で尋ねた。その結果、表4のような記述が見られた。「他教員との交流」については、昨年度も同様の結果が得られており、本セミナーが教員間の交流の場として機能していることが伺える。

表4. セミナーのよかった点

よかった点	記述例
他教員との交流	分野や年齢の違う(若い)教員の考えや経験をグループ討論を通して知ることができた。 他分野の先生方と会う機会そのものがよい刺激になった。貴重なコメントが書いてある小冊子が非常に参考になった。
京大の方向性の確認	教育ということに大学としてより力を入れていこうとされているんだと感じました。 京大の教育方針等をまとめて聞く機会がこれまでになかったので、大変参考になりました。
教育について考えるきっかけ	教育について、まじめに考える機会になった。 講義(教育)の仕方については、教育を受けたことがなかったので、参考になり良かった。また、実際に講義をされている先生方が試行錯誤されて得られた知見(意見)についても聞け、参考になった。
その他	サポートリソースの冊子は役に立ちそう。全学的なプロジェクトの存在があることが分かったこと。 講義に集中して半日で終えていた点

(7) 事後アンケートから

事後アンケートを行った結果、全ての参加者から回答を得ることはできなかったものの、概ね肯定的な回答を得ることができた。改善点として挙げられた「時間的な余裕」のなさや、セミナーのよかった点としてあげられた「他教員との交流」は、先述の通り昨年度も同様の結果が得られている。プログラムを変更した本年度であっても同様の結果が得られたことから、プログラムに左右されない、本セミナーを実施することそのものが持つ課題や特徴として捉えることが出来ると考えられる。今後は、これらの課題や特徴をふまえながら、参加者がより京都

大学の教育について考え、語りあうことのできる場をつくっていくことが求められるといえよう。

(半澤 礼之、松下 佳代、田口 真奈)



京都大学 Center for the Promotion of Excellence
in Higher Education, Kyoto University
高等教育研究開発推進センター

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町 | 電話: 075-753-9343 | Fax: 075-753-6691



京都大学の教育サポートリソース

How Kyoto University supports your teaching and student learning

情報環境機構

図書館機構

総合博物館

障害学生支援室

国際交流推進機構 国際交流センター

カウンセリングセンター

キャリアサポートセンター

女性研究者支援センター

高等教育研究開発推進機構

高等教育研究開発推進センター



本パンフレットは、京都大学にある様々な部局の活動を、「教育サポート」という視点でまとめたものです。

教育を行う上で私たちは多様な問題に直面します。例えば、授業内外における学びの支援や、心理的・身体的に問題を抱えた学生への対応などです。京都大学には様々な教育サポートリソースが存在します。これらのリソースを知り、有効活用することで、このような問題に対して直接的・間接的に対応することが可能になります。

ここでは、「情報環境機構」「図書館機構」「総合博物館」「障害学生支援室」「国際交流推進機構 国際交流センター」「カウンセリングセンター」「キャリアサポートセンター」「女性研究者支援センター」「高等教育研究開発推進機構」「高等教育研究開発推進センター」の10の部局の取り組みを、教育サポートという視点から紹介しています。取り組みの詳細については、各部局のウェブサイトなども参照していただく必要がありますが、本パンフレットが、各部局の取り組みに関心を持ち、それを活用しようと考えらるきっかけになれば幸いです。



CONTENTS

情報環境機構	5
図書館機構	9
総合博物館	11
障害学生支援室	12
国際交流推進機構 国際交流センター	13
カウンセリングセンター	15
キャリアサポートセンター	17
女性研究者支援センター	19
高等教育研究開発推進機構	21
高等教育研究開発推進センター	23

こんなときには・・・

▼ 教育活動・授業について

- ・学生に資料の探し方を教えたい → 図書館機構 p.10
- ・教材を作成したい → 情報環境機構 p.7
- ・京大でどのような授業が行われているのか知りたい → 情報環境機構 p.8
- ・他の教員が行っている授業の工夫について知りたい → 高等教育研究開発推進センター p.25
- ・インターネット環境を利用して他大学と共同で授業を行いたい → 情報環境機構 p.7
- ・学生に授業外でグループワークをさせるための施設・設備を知りたい → 図書館機構 p.10 情報環境機構 p.5
- ・普段の教室以外の場で資料・標本・ツールなどを活用して授業を行いたい → 総合博物館 p.11 図書館機構 p.10 女性研究者支援センター p.19 情報環境機構 p.5-6
- ・障害を抱えた学生に対して、授業でどのような工夫が必要なのかを知りたい → 障害学生支援室 p.12
- ・部局で教育改善の担当者になったが「何をすべきかわからない」 → 高等教育研究開発推進センター p.23
- ・京大の教育についてどのようなことが議論されているのかを知りたい → 高等教育研究開発推進機構 p.21 高等教育研究開発推進センター p.24
- ・どのような教育研修の機会があるのかを知りたい → 高等教育研究開発推進センター p.24-25

▼ 学生指導・学生支援について

- ・学生や院生から進路について相談を受けた → キャリアサポートセンター p.17-18
- ・心理的に問題を抱えていると思われる学生がいる → カウンセリングセンター p.15 女性研究者支援センター（女子学生に限る） p.20
- ・中国人学生から留学・入学についての問い合わせが来た → 国際交流推進機構 国際交流センター p.13
- ・学生から海外留学について相談を受けた → 国際交流推進機構 国際交流センター p.14
- ・学業や生活面で困っている留学生がいる → 国際交流推進機構 国際交流センター p.13
- ・障害を抱えた学生が自分の指導学生になった → 障害学生支援室 p.12
- ・指導学生の英語力を高めたい → 国際交流推進機構 国際交流センター p.14 情報環境機構 p.6 高等教育研究開発推進機構 p.22

▼ 研究活動について

- ・学内で開催した国際シンポジウムをインターネット上で配信したい → 情報環境機構 p.8
- ・保育室付きの会議室（10名程度）を利用したい → 女性研究者支援センター p.20
- ・遠隔会議を行いたい → 情報環境機構 p.7
- ・海外からの研究者に必要な生活情報を提供したい → 国際交流推進機構 国際交流センター p.13
- ・育児と仕事・研究の両立で悩んでいる → 女性研究者支援センター p.20





情報環境機構

<http://www.iimc.kyoto-u.ac.jp/>

問い合わせ先 E-mail : soumu@media.kyoto-u.ac.jp

情報環境機構は、以下の機能を全学に提供しています

- 全学の情報基盤に関する企画と整備
- 高度な情報技術、情報活用能力を備えた人材の育成等

2 語学実習CALL教室

- ・CALL教室とは、CALL (Computer-Assisted Language Learning: コンピュータ支援型外国語教育)を展開する特殊実習教室のことです。学術情報メディアセンター南館内および、共通教育棟にCALL教室が設置されています。現在は学術情報メディアセンター南館内で前・後期合わせて90コマ程度のCALL関連授業が実施されており、共通教育棟のCALL教室でも同規模の授業が実施されています。
- ・本学の教育内容に合致した質の高いマルチメディア外国語教育支援CALL教材は、CALLシステム運用委員会の教員を中心に、各外国語部会の教員と学術情報メディアセンター教員が密接に協力しながら作成しています。

【CALL 教室における授業】

- ・CALL教室では、各端末にCCDカメラやヘッドセットマイクが付属しており、外国語の発音の録音や口唇形状の録画ができるようになっています。また、教室には100インチのスクリーンが設置されており、各種の外国語教育に利用されています。
- ・CALL教室の利用希望調査は前年度に共通教育推進課を通じて実施され、通常前年度の12月に教室の割り当てが決定されます。
- ・また、前・後期開始時を中心に教員やT.A.を対象として、CALL教室に導入されているコースウェアマネージメント(CMS/LMS、学習管理システム)を利用したAV機器の操作や、学生連の一括操作やCALL教室のパソコンの基本操作についての講習会も開催されています。

▶問い合わせ先：教育推進部共通教育推進課 TEL：075-753-9943



【e-ラーニングの展開】

- ・教室側CALL授業に加えて、特に再履修者を対象として、e-ラーニングによる初修外国語の自律学習型CALL授業を新たに展開しています。

【外国語の自律用教材の整備】

- ・メディアセンター南館OSL (Open Space Laboratory) の入口付近に16台のCALL自律学習端末が設置されており、各種語学教材がインストールされています。現在利用可能な教材は以下の通りです。端末が空いていれば、誰でも自由に利用することができます。
- ▶中国語・英語・フランス語・ドイツ語・オランダ語・ベトナム語 (韓国・朝鮮語は準備中)

1 教育用コンピュータシステム

- ・京都大学のすべての学生・教職員は、利用コード(ECS-ID)の交付をうけることで、学内の教育用コンピュータシステムを利用することができます。学内27箇所に1000余台のパーソナルコンピュータ端末が設置されており、自由に利用することができます。

◆ECS-ID交付・自律用端末環境の詳細について

- ▶URL : <http://www.iimc.kyoto-u.ac.jp/services/ecs>
- ▶問い合わせ先：情報環境機構 情報基盤課 共同利用支援グループ TEL：075-753-9000



【コラボレーションスペースラボラトリ(CSL)】

- ・教育用コンピュータのPC端末を利用したグループ学習を行うためのスペースです。PC端末の他、ビデオプロジェクトター、電子白板などを活用したグループでの学習のための空間が4スペースあります。
- ▶設置場所：学術情報メディアセンター北館
- ▶問い合わせ先：教育システム支援グループ
TEL：075-753-9009 E-mail : edu-qa@media.kyoto-u.ac.jp

【マルチメディア演習室】

- ・PC端末のほか、教室の前面に100インチのプロジェクタが設置されており、資料の提示表示や音響設備を備えています。
- ▶設置場所：学術情報メディアセンター南館203・204
(教室型配置：PC設置数60台)・303(鳥型配置：PC設置数30台)
- ▶問い合わせ先：共同利用支援グループ (南館窓口)
TEL：075-753-9009 E-mail : edu-qa@media.kyoto-u.ac.jp

3 遠隔講義支援サービス

- ・海外の大学との遠隔講義から、国内の他大学・研究機関との遠隔講義・会議、学内のキャンパス間で行われる遠隔講義まで、幅広いニーズ・ネットワーク環境に応じた遠隔講義・会議の実施を支援しています。



【遠隔講義の支援】

- ・遠隔講義システムとして、学内の18教室における高精細遠隔講義設備の導入と運用を行っています。この設備間では黑板・パノコン画像・講義室の高精細な映像を同時に実行しています。
- ・遠隔講義室に映し出すことが可能です。学外の他のシステムとも接続性の高い標準的な方式を用いています。講義アーカイブなどの取扱いに関しても、ご相談を受け付けています。

遠隔講義が可能な教室

吉田 工学部2号館355号室	吉田南 学術情報メディアセンター南館2階201講義室
吉田 工学部6号館1階101講義室	吉田南 学術情報メディアセンター南館2階202講義室
吉田 工学部3号館1階N1講義室	吉田北 農学部総合館W402講義室
吉田 工学部総合校舎213講義室	医学部 医学部G棟2階セミナー室
吉田 総合研究4号館2階共通3講義室	医学部 先端科学研究棟1階小セミナー室
吉田 総合研究5号館2階会議室(小規模)	
吉田 国際交流本館国際交流多目的ホール	

宇治 生存圏研究所1階遠隔講義室(S143H)	桂 A2棟3階308講義室
宇治 防災研究所5階セミナー室Ⅲ(E517D)	桂 A1棟1階131講義室
	桂 C1棟1階192講義室
	大山 霊長類研究所本館1階大会議室

【遠隔セミナー、シンポジウムの支援】

- ・海外・国内・学内・学外の間の遠隔セミナーや教育目的のシンポジウムなどの実施をサポートしています。国際標準規格に準拠した各種製品(Polycom, TANDBERG, SONYなど)を導入していますので、必要に応じて適切な機器を利用することができます。
- ・遠隔講義・遠隔会議、セミナーやシンポジウムでは、機材・人員の確保などの準備を前もって行う必要があります。構想段階で、具体的な期日や内容が未定でも構いませんので、できるだけ早くご相談ください。

▶ お問い合わせフォーム： <https://www.iimc.kyoto-u.ac.jp/ja/inquiry/>

▶ 遠隔講義支援サービス担当

TEL：075-753-9005 FAX：075-753-9001 E-mail： dt-qa@media.kyoto-u.ac.jp

4 コンテンツ作成室

- ・学術情報メディアセンター南館にコンテンツ作成室を設け、研究や教育に関わる各種学術系コンテンツの企画・制作を行うコンテンツ作成支援サービスを行っています。
- ・コンテンツ作成室内には、コンテンツ作成のための各種機材やソフトウェア、バーチャルスタジオシステムなどの各種施設が設置されています。良質なコンテンツ作成を支援するために、教員など依頼者へグラフィックデザイン、映像に関わる専門的なアドバイスを行い、コミュニケーションを綿密に図りながら、映像コンテンツ、冊子やポスター、Webサイトなどのデジタルコンテンツなどについて企画・制作・提供しています。

- ・詳細につきましては、コンテンツ作成支援サービス担当までお問い合わせ、ご相談ください。一般的なコンテンツの作成には、予算・機材・人員の確保などを前もって行う必要があります。また、制作期間が短い場合、あるいはコンテンツの趣旨や利用者の対象によって支援をお引き受けできないこともあります。支援をお考えの方は、構想段階の内にてできるだけ早くご相談いただくことをおすすめします。

▶ お問い合わせフォーム： <https://www.iimc.kyoto-u.ac.jp/ja/inquiry/>

※お問い合わせは種別は「コンテンツの作成・利用・運用」とご選択ください。

▶ E-mail： cpt@media.kyoto-u.ac.jp

5 学習支援システム (WebCT)

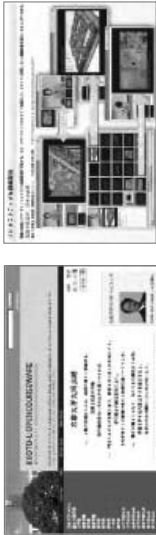
- ・情報学研究科と情報環境機構の連携により学習支援システムとしてコース管理システムBlackboard Learning System (旧名称 WebCT) を運用しております。授業資料の配布、学生からの課題提出、小テストの実施などを行うことができますので、これにより遠隔授業や自習の支援などを行うことも可能です。
- ・KULASISが、履修登録や成績提出、シラバスの提供、閲覧など主に授業に関する事務手続きを目的に作られているのに対し、WebCTは、授業の運営における教員と学生の活動を支援するために作られている点が異なります。

▶ http://www.iimc.kyoto-u.ac.jp/ja/services/ecs/services/web_ct.html

6 京都大学オープンコースウェア

- ・オープンコースウェア (OCW) とは、京都大学で実際に行われている講義の資料や、実際の講義の様子、公開講座やシンポジウムなどをインターネットで公開できる教員のための授業支援ツールです。文部科学省は、平成22年度から教育情報の公表を規定しました。皆さんもOCWを活用して、授業の講義や資料、参考文献を掲載して、授業をアピールしてください。OCWは新しい教育情報公開メディアとして、現在800以上の講義映像コンテンツがアップされています。

▶ <http://ocw.kyoto-u.ac.jp>



- ・京大OCWには、すでに平成23年度の全部局のシラバスがアップされています。

◆コンテンツのアップロードまでの流れは以下のとおりです。

1. 学内認証京都大学教職員用認証システム (https://www.iam2.adm.kyoto-u.ac.jp/ocw/login_form/) よりログイン ログインが成功しますと以下のようなOCWトップ画面に繋がります。
2. 講義ページ作成 講義ノートと著作権処理 OCW テストサイトのコンテンツ確認
3. 京都大学OCW 本サイトにアップロード



- ・詳細は京都大学オープンコースウェアプロジェクトまでお問い合わせください。

▶ TEL & FAX 075-753-9081 E-mail： request-ocw@media.kyoto-u.ac.jp



図書館機構

<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/>

問い合わせ先 図書館機構HP > お問い合わせ

所在地・開館日程 図書館機構HP > 京都大学図書館・室一覧

図書館機構のネットワーク

京都大学には、附属図書館のほか、学部や研究所などに約50の図書館・室があります。図書館機構は、これら図書館のネットワークです。

1 図書館の資料を利用するには

・蔵書数は全学で約647万冊です。利用条件は、所蔵している図書館・室により異なります。一部を除いて、京大蔵書検索システム「KULINE」(クライン)で検索できます。

▶ 図書館機構HP > 資料検索 > 京大蔵書検索KULINE

・電子ジャーナル(のべ6万タイトル以上)、電子ブック(のべ24万タイトル以上)、データベース(100種類以上)が利用できます。ご利用にあたっては、SPSID(教職員グループウェアID)もしくはECS-ID(情報環境機構提供教育用コンピュータシステムの利用者コード)が必要です。

▶ 図書館機構HP > 資料検索 > 電子ジャーナル

▶ 図書館機構HP > 資料検索 > データベース

・利用者個人のためのオンラインサービス「MyKULINE」(マイクライン)では次のことができます。ログインにはSPSIDもしくはECS-IDを使います。

◆自分が借りている資料の返却期限の延長申し込み

◆現在他の人が借りている本の予約

◆京都大学が所蔵していない資料の他大学をからの取り寄せ

◆遠隔地キャンパスからの取り寄せ

▶ 図書館機構HP > サービス > 図書館のオンラインサービス > MyKULINEの紹介

・図書館のご利用全般については、機構HPの案内をご参照ください。

▶ 図書館機構HP > サービス



2 研究・教育のサポートを受けるには

・研究用図書の購入手続きについては、通常、所属部局の図書館・室が担当しています。詳しくは、所属部局図書館・室の図書購入担当もしくは部局事務担当にご確認ください。

・図書館では、文献の所蔵場所や探し方、資料に関するご質問にお答えしています。各図書館・室の担当窓口にお問い合わせください。附属図書館ではオンラインでも受け付けています。

▶ 図書館機構HP > 学習/研究サポート > 参考調査の申し込み

・文献収集法、データベースの使い方などの講習会を実施しています。また、ご要望に応じて、個別講習会を実施いたします。

▶ 図書館機構HP > 学習/研究サポート > 講習会

・各種データベースの使い方や資料別の探し方をご案内する「レファレンス・ガイド」がご利用いただけます。

▶ 図書館機構HP > 学習/研究サポート > レファレンス・ガイド

【利用できる施設】

・附属図書館、医学図書館、人間・環境学研究所・総合人間学図書館には、共同学習・研究のためのスペースがあります。



図書館名	室名	室数(室)	収容(人)	対象
附属図書館	共同研究室	5室	4~20	学内所属者
	グループ学習室	3室	2~12	
医学図書館	セミナー室	1室	24	医学部及び関係部局所属者
	小図書室	2室	4	
	2エリア	10		学内所属者
人環・総人図書館	グループ学習室	1室	8	入環・総人所属者

3 研究・教育成果を公開するには

・研究成果を「京都大学術リポジトリKURENAI」で公開することができます。KURENAIでは既に9万件以上の学術雑誌掲載論文、紀要論文、学位論文、学会発表資料などが公開されています。

▶ 図書館機構HP > KURENAI > 京都大学学術情報リポジトリ総合案内サイト

4 その他

【最新の図書館情報・文獻情報を得るには】

・図書館機構HPまたは附属図書館・室HPのニュース欄をご確認ください。

・Mail News「Library Service News (LSN)」では、附属図書館からのお知らせを配信しています。

▶ 図書館機構HP > 京都大学図書館・室一覧 > 附属図書館HP > メールマガジン

・MyKULINEに条件を登録して、新着図書・雑誌のアラートサービスを利用できます。また、各種データベースに条件を登録して、論文のアラートサービスを利用できます。



【図書館の情報を授業に生かすには】

・図書館では、辞書・事典、データベース、図書、雑誌等を提供しています。これらを利用して、学生は文献リストやレポートを作成することができます。また、基本的な文献収集法やデータベースの活用方法等の講習会も開催しています。これにより、学生は図書館資料の利用方法を身につけることができます。



総合博物館

<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/>

問い合わせ先 E-mail : info@inet.museum.kyoto-u.ac.jp TEL : 075-753-3272

総合博物館の収蔵物

京都大学総合博物館は、大学の各学部や研究所などに個別に保管されていた資料を適切な環境の下で集中的に保管・管理し、広く学内外の先端研究や教育において活用されることを促進し、かつ、その成果を一般に公開することを目的として設置されたものです。京都大学が1897年の開学以来、100年にわたって収集してきた貴重な学術標本（自然史、技術史、日本史など）約260万点を収蔵しています。

1 入館について

- ・京都大学の学生は、学生証を提示すれば無料で入館できます。
 - ・京都大学の教職員は、職員証等の身分証を提示すれば無料で入館できます。
- ▶開館時間：水曜日～日曜日 9時30分～16時30分（入館は16時00分まで）



2 授業での利用について

- ・例年、理学研究科等の博物館実習、文学研究科の古文書演習や考古学演習が、博物館の所蔵する標本を素材として行われています。また、要望があれば、大学院生による標本の研究に対応しています。近年では、展示室を教育・研究の場として活用したいという要望が寄せられるようになり、分野を問わず積極的に受け入れています。
- ・また、大学院生等による自主的活動として、毎週土曜日に「子ども博物館」の活動が行われています。自分の専門研究の内容をわかりやすく子どもや一般向けに解説するプログラムで、学術コミュニケーションの能力を育てるのに役立っています。



障害学生支援室

<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education/campus/support/counseling/>

問い合わせ先 E-mail : s-sien@mailadm.kyoto-u.ac.jp TEL : 075-753-2317

障害学生支援室の設置

京都大学では、障害があるなどの理由により、修学上様々な悩みや相談ごとを抱える学生への支援を行うため、障害学生支援室を設置しています。

1 障害学生支援室の役割

- ◆障害のある学生の授業保障や学生生活をおくる上での支援・相談
- ◆障害のある学生をサポートする支援学生の養成・派遣
- ◆支援に関連する部局や教職員との連携
- ◆支援物品、関連図書の実出
- ◆支援ノウハウ、情報の蓄積
- ◆支援に関する各種講座等の開講
- ◆施設・設備の情報と目的地までのバリア（障壁）を表示したフリーアクセスマップの作成・配布 など



2 修学支援について

- ▶対象：聴覚障害、視覚障害、肢体不自由などの障害により修学上支障がある者（必要性が認められる場合は、病弱虚弱や一時的な怪我などの相談にも応じます。）
- ▶範囲：講義、行事など必要であると認められる範囲

＜支援の内容例＞	
聴覚障害／ノートタイカーの配置、ICレコーダーの貸出など	＜貸出物品＞
視覚障害／介助者の配置、支援物品の貸出など	関連書籍
肢体不自由／移動介助、施設、設備の改善など	車椅子
	点字プリンタ
	簡易筆談器
	拡大読書器 など

3 室長相談日について

- ・障害学生支援室では、支援室員が日々の支援・相談を行うとともに、室長による相談日を設けています。障害をもった学生本人だけでなく、サポート学生、保護者、教職員などからの相談にも応じます。室長相談日は隔週水曜日の16時00分からとなっております。詳しい日程については支援室内および掲示板等に随時掲載しています。原則として予約を優先しますが、時間内には随時相談に応じますので、支援室員までお問い合わせください。



国際交流推進機構 国際交流センター

国際交流推進機構 <http://www.opir.kyoto-u.ac.jp/>

国際交流センター <http://www.ryugaku.kyoto-u.ac.jp/>

問い合わせ先 国際交流推進機構 TEL: 075-753-2049 / 国際交流センター TEL: 075-753-2543

国際交流推進機構 国際交流センターの業務

国際交流推進機構は、国際企画連携部門と国際交流センターで構成されている京都大学の全学機構です。国際企画連携部門は、全学的な国際交流事業に関する企画立案を行い、また大学の国際化を促進しています。国際交流センターは、外国人留学生・研究者に対する日本語・日本文化教育、修学および生活上の指導助言、全学的な学生および研究者交流を促進する業務を行います。

1 外国人留学生・研究者受入れに関するプログラム・支援

・京都大学での学生生活や研究生活を支援する様々なサービスを行っています。

【日本語・日本文化教育】

・国際交流センターでは、全学の外国人留学生および研究者の日本語・日本文化教育をはじめとして、多様な形態の日本語学習支援を行っています。

▶ <http://www.ryugaku.kyoto-u.ac.jp/japanese/>

【アドバイジング】

・留学生ラウンジ「きずな」および国際交流センターの留学生相談室では、留学生・外国人研究者の修学・研究上での、あるいは日本の生活上での様々な悩みや心配事について、指導・助言を行っています。

▶ <http://www.ryugaku.kyoto-u.ac.jp/advising/>

【文化交流活動（留学生ラウンジ「きずな」）】

・京都大学に在籍する留学生の相互交流、また、留学生と日本人学生および教職員の交流を促進するための様々な活動を行っています。

▶ <http://www.ryugaku.kyoto-u.ac.jp/about/cultural-exchange/>

【中国本土の大学（香港を除く）を卒業した学生への入学案内 [Admissions Assistance Office: AAO]】

・各研究科・研究所において、中国本土の大学（香港を除く）を卒業し、京都大学に研究生または大学院生として入学を希望する志願者の出願手続きが円滑に行えるよう支援します。

▶ <http://www.kyoto-u.ac.jp/education/international/students1/ku-aac.htm>

2 日本人学生送出しに関する支援

・海外留学を目指す学生のために様々な支援を行っています。

【留学説明会「留学のスズメ」】

・年間を通じて、留学説明会を開催しています。学生向けの海外留学最新情報は下記のサイトで見られます。

▶ <http://www.kyoto-u.ac.jp/education/international/news/domestic.htm>

【海外留学に関するアドバイス】

・学生の海外留学支援のために、各種留学相談を受け付けています。相談スタッフ・相談予約方法・連絡先の情報は、下記のサイトで見られます。

▶ <http://www.ryugaku.kyoto-u.ac.jp/study-abroad/>

3 国際的な教育プログラム

・国際交流推進機構・国際交流センターでは、様々な国際教育プログラムの企画立案、提供、支援を行っています。

3-1. 海外派遣プログラム

【交換留学（派遣留学）】

・大学間学生交流協定による派遣留学のプログラムです。

▶ <http://www.ryugaku.kyoto-u.ac.jp/study-abroad/exchange/>

【超短期留学・研修】

・主に休業中に参加できる日本人向け海外留学プログラムです。大学を通じて応募するプログラムと、直接個人で応募するプログラムに大別されます。

▶ <http://www.kyoto-u.ac.jp/education/international/students3/guide/scholarship/other.htm>

【国際交流科目】

・国際交流科目は、提供を希望する学部・研究科あるいは研究所と国際交流センターが協力して企画する全学共通科目（A群科目・2単位）です。夏季休業等に海外で本学の教員が集中講義を行い、科目内容は現地研修および事前事後の講義等から構成されます。科目は毎年異なりますので、全学共通科目履修の手引きを参照してください。

▶ <http://www.kyoto-u.ac.jp/education/international/program/curriculum.htm>

3-2. 京大で学ぶ英語によるプログラム

【京都大学国際交流プログラム (KUINEP)】

・海外の協定校の交換留学生と京都大学の学生を対象とした英語による講義です。

▶ <http://www.ryugaku.kyoto-u.ac.jp/study-abroad/kuinep/>

【英語学習支援・運用能力養成のためのコース】

・英語力を磨きたい学生のためのコースです。

▶ <http://www.ryugaku.kyoto-u.ac.jp/study-abroad/improvement/>

3-3. KCJS・SCTI講義聴講制度プログラム

・KCJS (Kyoto Consortium for Japanese Studies, 京都アメリカ大学コンソーシアム)・SCTI (Stanford Center for Technology and Innovation, スタンフォード技術革新センター)講義の聴講制度は、米国の一流大学が提供している英語講義を、京都大学の学生が聴講できる制度です。

▶ <http://www.ryugaku.kyoto-u.ac.jp/study-abroad/kcjs-scti/>





カウンセリングセンター

<http://www.kyoto-u.ac.jp/counseling/>

問い合わせ先 E-mail : counseling@www.adm.kyoto-u.ac.jp (吉田キャンパス) TEL : 075-753-2515

カウンセリングセンターの設立

カウンセリングセンターは、1999年6月1日に、それまでの学生懇話会の業務・スタッフ・設備をすべて引き継ぎつつ、発展的に改組され設立されたものです。社会も、大学も、大きく変わりつつある現在において、人間関係の上でも、個人の内的な価値や生き方の上でも、様々な問題や悩みが生じているように思います。これらに圧倒されてしまうことなく、生き生きとしたキャンパスライフを実現していく上で、カウンセリングセンターが役に立てばと願っています。

1 学生(学部生・大学院生)を対象とした相談業務

【学生生活上の様々な悩みの相談】

- ◆人間関係について悩んでいる
- ◆自分の性格について考えてみたい
- ◆異性とのつきあい方や性のことで悩んでいる
- ◆どういうわけか研究にやる気がでない
- ◆進路を変更しようか迷っている
- ◆気持ちが落ち込んだり不安になることがあって苦しい
- ◆指導教官から性的な嫌がらせをうけている
- ◆留学してきたが、日本や大学になじみずにいる
- ◆...

2 教職員を対象とした相談業務

- ◆職場の人間関係で悩んでいる

【学生との関わり方や就労上の様々な悩みの相談】

- ◆学生との関わり方について相談したい

3 大学におけるハラスメントについて

- ・セクハラ、アカハラ、ワハラについての相談案内がwebに掲載されています。
▶ カウンセリングセンターHP>「大学におけるハラスメントについて」



4 啓発・広報

- ◆学部・学科などが主催する学生向けのオリエンテーションやガイダンスへの講師派遣
- ◆学内における教職員向けの各種研修への講師派遣
- ◆学内におけるハラスメント関係の各種研修への講師派遣

5 その他

- ・教職員が悩みを抱えた学生を援助するときの一般的なアドバイスがwebに掲載されています。
▶ カウンセリングセンターHP>「教職員が学生を援助するために」
- ・学生の両親からの相談も受けています。
- ・困難を抱えた学生がいた場合、お気軽にまた安心してカウンセリングセンターをご利用ください。他の学内支援機関との連携も進めております。積極的に活用していただければと思います。
- ・桂キャンパスでは、健康科学センターの桂分室にてカウンセリングを提供しています。
※ カウンセリングセンターでは相談業務が行われていますが、
健康科学センター／保健診療所 (<http://www.kyoto-u.ac.jp/health/kuhc-home.html>) ではメンタルヘルスに関する診療が行われています(メンタルヘルス以外の診療も行われています)。併せてご活用ください。



キャリアサポートセンター

<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education/job/careerpath/>

問い合わせ先 E-mail: shushoku@mailadm.kyoto-u.ac.jp (連絡窓口)

TEL: 075-753-2483 (吉田キャンパス), 075-383-7318 (桂サテライト), 0774-38-4553 (宇治サテライト)

キャリアサポートセンターの支援

キャリアサポートセンターは、就職活動を通して学生のキャリアパス形成を支援しています。学部生・修士院生と博士院生・ポスドクでは企業の選考基準が異なるので、個別のプログラムを準備して対応しています。吉田キャンパスに加えて、宇治キャンパス、桂キャンパスにもサテライトを設けてサービスを提供しています。
2011年度から、研究科・学部との連携を図り、役割を明確にしてより充実した学生支援の在り方および支援体制の構築を目指したキャリアサポート懇談会が発足しました。

1 学部生・修士院生の就職支援

・近年は京大生といえども、学生時代にとりわけきたか、どのような人物・性格で、なぜこの会社を選んだかが問われます。このため、しっかりと自己分析、企業研究、OB/OG訪問、およびインターンシップを行い、簡潔で目的の付いたエントリーシートの作成が要求されます。また、面接に際しては、能力、人間性、志望動機を正確かつ簡潔に伝えるとともに、マナーも問われます。したがって、キャリアサポートセンターでは、スケジュール管理、自己分析・性格診断や企業研究の方法、OB/OG訪問の注意事項、インターンシップの心構え、1対1面接・グループ面接を乗り切るために必要な講座やセミナーを開催するとともに、必要な情報を提供するための冊子類を準備して支援を行っています。授業や実験等で参加できなかった学生のために、実施した講座・セミナーの一部はwebで配信しており、後日視聴することができます。また個人面談による進路相談、エントリーシートの添削および模擬面接も実施しています。

【支援業務の概要】

◆講座・セミナーの開催 (就職ガイダンス、就職セミナー、キャリアデザイン講座、職務適性診断、SP模擬テスト、自己分析講座、プレゼンテーション講座、エントリーシート対策講座、ビジネスマナー講座、インターンシップガイダンス、業界研究セミナー、各種公務員説明会、公認会計士ガイダンス、他) ◆合同企業説明会の開催 ◆個人面談による就職相談 ◆メールマガジンの発行 ◆情報検索用パソコン設置 (インターネット接続) ◆求人情報個別ファイル ◆就職関連図書(インターネット) ◆面接ビデオ、企業セミナービデオの閲覧と貸出 ◆卒業生の就職別就職先一覧表、OB/OG訪問リストの閲覧 ◆その他



▶京大キャリアデザインセンターへのアクセス方法:京大大学求人照会システム (<https://career.gakusei.kyoto-u.ac.jp/>) にログインの上、左に示されたログイン用のIDとパスワードを入力してください。



2 ポスドククワター・博士課程院生を対象とした若手研究者のためのキャリア支援

・博士課程院生・ポスドクは採用側から年齢相当の能力を要求されます。このため、研究については、何が問題で、どのような考え方(新規性、着眼点)で解決しようとしてきたか、研究成果はどのように社会に貢献が可能かを説明するとともに、研究で身につけたスキル、優れたリーダーシップを有していることを証明する必要があります。このため、博士号取得者が主体的に進路を選択し、社会の多様な場において専門性を活かして活躍できる環境を整えるために、京都大学若手研究者キャリアパス多様化促進計画事業(KUCP: <https://kucp.gakusei.kyoto-u.ac.jp/>)を発足させて支援を行っています。
・現在では、大学での研究課題が他の研究機関でそのまま続けられることはほとんどなく、これまでの研究と就職志望先の技術を組み合わせて、新しい技術を生み出すことを提案することが要求されます。このため、各自の研究環境・条件に合わせた研究内容の整理・自己分析を行うために、個人面談によるキャリアカウンセリングに力を入れています。
・求人側・求職側の情報交換のため人材データベースの維持・管理、キャリアパス多様化のための講座・セミナー、合同企業説明会の開催も行っています。
・ポスドク・博士院生のキャリア支援活動を充実したものとするため、ヨーロッパ・アメリカの大学のキャリアパス支援の実情を延べ5週間調査し、日米英仏独の大学の歴史と役割、社会における博士の地位、ポスドク待遇と役割等の比較を行い、ポスドクガイドブック・ポスドクの就職支援への取り組みと現状」と題する冊子にまとめました。

【キャリアパス多様化支援計画の概要】

◆個人面談によるキャリアカウンセリング ◆研究者人材データベースの維持・管理による求人側・求職側の情報交換
◆講座・セミナーの開催 (「就職に際して博士・ポスドク時の強みは」「自己分析」等の講座の開催)
◆合同企業説明会の開催 ◆メールマガジンの発行 ◆求人情報ファイルの整備 ◆就職関連図書の閲覧と貸出 ◆その他



女性研究者支援センター

<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>

問い合わせ先 E-mail : w-shien@mailadm.kyoto-u.ac.jp TEL : 075-753-2437

女性研究者支援センターの活動

女性研究者支援センターは、女性研究者の研究継続を容易にするための研究・教育環境の整備と改善をめざし、男女共同参画推進室とともに活動を展開しています。女性研究者だけでなく、男性を含む教職員・学生も対象として事業を運営しています。

1 情報提供

- ・Webサイト、ニュースレター「たちばな」を通じて様々な情報発信を行っています。是非、メールマガジン登録を行ってください。

2 研究会・研修会の開催

- 【男女共同参画に関するシンポジウムや研究会】
 - ・男女共同参画に関連したシンポジウムや研究会、研修会を適宜開催しています。
- 【自己主張トレーニング講座】
 - ・院生・研究員・教員（女性のみ）を対象に、自己主張トレーニング講座を開催しています。



【介護に関する講座・講演会】

- ・認知症あんしんサポーター講座等、介護に関する講座・講演会を開催しています。

3 授業での利用、開講されている授業

【授業での施設利用】

- ・講義・ゼミの一環としてセンターを訪ねていただき、活動内容や男女共同参画の動向について情報提供することも可能です。

【性差・ジェンダーに関する全学共通科目】

- ・全学共通科目として、前期に「性差を考えるー人文社会科学の視点からー」を、後期に「性差を考えるー自然科学の視点からー」を開講しています。また、前期には、ポケットゼミ「ジェンダーと科学」も開講しています。

4 利用できる施設・設備

【保育室付き会議室・図書】

- ・小規模の会議や、研究会等の保育室としてセンター内施設が利用できます。また、教員からの寄贈図書やセンター関連書籍も備えており、図書の貸し出しも行っています。

【保育室・保育サービス】

- ・京大病院内に、感染隔離室を整備した「病児保育室（こも）」を設置しています。「保育園入園待機乳児のための保育室」、保護者に替わってセンターが子どもを迎えに行き、センターで一時保育を行う「お迎え保育」も行っています。



5 研究支援

【研究・実験補助者雇用のための支援制度】

- ・出産・育児・介護のため、研究時間の確保が困難な男女研究者に対して、研究・実験補助者の雇用経費を支援する制度です。年2回（6月、12月）募集しています。

【京都大学優秀女性研究者賞「たちばな賞」】

- ・「たちばな賞」は、優れた研究成果を挙げた本学の若手女性研究者を顕彰することによって、研究意欲を高め、我が国の学術研究の将来を担う優れた女性研究者の育成を目的として、2008年9月に創設されました。毎年、研究者部門・学生部門各1名ずつを表彰し、表彰式において受賞者による研究発表を行います。



6 相談業務

- ・女性研究者や女子学生が人間関係、育児、家庭での問題を一人で悩まずに、相談できるように開設しています。学外カウンセラーが相談に応じています。予約制です。

7 その他

【女子院生グループトーク】

- ・女子院生の交流会を、センターで開催しています。各自お応じ参加で、研究発表や情報交換などを行っています。

【女子高生車座フォーラム】

- ・高校生に、研究者という仕事かどのようなものか知ってもらうために、京都大学教員、院生が交流会を開催しています。



高等教育研究開発推進機構

<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/>

問い合わせ先 E-mail : 730soumu@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp TEL : 075-753-9343

高等教育研究開発推進機構の役割

京都大学の全学共通教育は大学院人間・環境学研究科および大学院理学研究科を実施責任部局、その他の研究科、研究所・センター等を協力部局と位置づけ、全学あげて取り組むという体制で実施しています。高等教育研究開発推進機構では各部局から提供される科目について、実施責任部局および各研究科等の教員が参画する全学共通教育システム委員会のもとに設置された4つの専門委員会と11の科目部会において、カリキュラムの設計や科目審査を行い、基礎から応用、高度な内容まで多様で特色ある科目を提供しています。

1 KULASIS (京大大学教務情報システム)

・KULASISは、オンラインシラバス・Web掲示板・授業サポーター・履修登録・成績関係・採点登録・学生からの採点確認などを含む教務情報システムで、学生はパソコン・携帯電話から学内外を問わず、教務情報（休講・授業変更・レポート）の確認・履修登録・採点確認等の機能を利用することができます。

・KULASISを使って、履修者名簿のダウンロード・休講情報の登録・授業資料の掲載・授業連絡・採点登録などが可能です。現在、全学共通科目だけでなく、学部専門科目や大学院科目にも利用範囲を拡大しています。

▶ URL : <https://www.k.kyoto-u.ac.jp/teacher/>

▶ 問い合わせ先 E-mail : 730joho2@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

2 全学教育シンポジウムの開催

・京都大学の全学的なFD活動として、総長を始め200名を超える教職員が参加し、研究分野に関係なく教育に関するテーマについて全学的な議論や意見を交わすことにより共通理解を深め、今後の教育の改善・充実に資することを目的に取り組んでいます。

＜これまでのシンポジウムのテーマ＞

- ◆「京都大学における教育のミニマムリクワイアメント*をどう考えるか」
- ◆「京都大学における教育の「質の保証」とは－教育の改善と評価の視点－」
- ◆「学部教育・大学院教育の質の改善と自己点検・評価」
- ◆「責任ある教育体制とは何か－京都大学における教育の将来像を問う－」
- ◆「京都大学における教育の将来像を問う－第11期中期目標の策定に向けて学部・大学院教育の現状と課題を考察する－」

3 全学共通教育に関する情報提供

【新入生向け少人数セミナー（ポケット・ゼミ）】

- ・ポケット・ゼミ（新入生向け少人数セミナー）とは、新入生を対象に、原則として10人程度のフェイズ・トウ・フェイズの親密な人間関係の中で、様々な形態の授業を行うものです。
- ・これまで、最先端の分野でどんなことが行われているかについて、教員が直接に学生に語りかけ、あるいは様々な研究のフィールドに誘い、いわば「京都大学そのものへの入門」の授業として機能してきました。授業は、歴史・地理・古典の講読や環境・資源・宇宙・医学等の最先端知見の紹介、野外実習など総合大学ならではの豊富なメニューがあります。
- ・以下のページに現在開講されている科目の紹介や過去の開講科目、アンケートの報告書が掲載されています。
 - ▶ 高等教育研究開発推進機構HP > 「ポケット・ゼミの紹介」

【共通教育通信】

- ・授業紹介、サークル紹介などが掲載されている『共通教育通信』の発行を行っています。
- ・吉田附1号館全学共通科目学生窓口にて配付していますが、以下のページからもダウンロードすることができます。
 - ▶ 高等教育研究開発推進機構HP > 「広報活動」 > 「共通教育通信」

【各種報告書】

- ・高等教育研究開発推進機構は、本学が掲げる教養教育の目的を達成するため様々な点検・評価を行い、全学共通教育の改善・充実に取り組んでいます。その報告書は以下のページからダウンロードすることができます。
 - ▶ 高等教育研究開発推進機構HP > 「点検・評価」

＜主な報告書＞

◆「全学教育シンポジウム報告書」

- ・毎年開催されている全学教育シンポジウムの報告書です。

◆「2回生進級時アンケート報告書」

- ・新2回生全員を対象とする「2回生進級時アンケート」を継続的に実施しています。入学後1年間の大学生活の中で本学の教育についてどのような感想を抱いたのかを問うアンケートです。

◆「新入生アンケート報告書」

- ・「全学共通教育に係る新入生ガイダンス」の内容と、その際に行ったアンケート調査の報告書です。

4 その他

【全学共通教育英語の指定図書】

- ・全学共通教育英語の指定図書として、『京大・学術語彙データベース 基本英単語1100』（研究社）を作成しました。この図書に収録されたすべての学術語彙に対して、ネイティブの発音による音声が利用できます。詳細と音声の入手先については、以下の研究社の特設ページを確認してください。
 - ▶ URL : http://www.kenkushusha.co.jp/modules/09_kyodai_podcast/





高等教育研究開発推進センター

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/>

問い合わせ先 E-mail : 730center@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp TEL : 075-753-9343

高等教育研究開発推進センターの支援

高等教育研究開発推進センターは、高等教育における教授システムの実践研究および、学内・学外の教育改善業務や全学共通教育の企画・開発・実施の支援を行うことを任務としています。また、相互研修型FD共同利用拠点として、学内のみならず、地域・全国のFD・教育改善活動の支援を行っています。

1 全学・部局・教員のFD (Faculty Development) 活動支援

- ・FDに関する多様なニーズに応えるために発足した全学的な組織である「FD研究検討委員会」への支援を行っています。
- ・FD講座会への講師派遣や、授業評価などのFDに関する各種相談に応じたり、大学教育改善に関する情報提供等を行っています。これまで、文学部や工学部などと連携してきました。
- ・公開授業・検討会を開催し、教員同士で授業改善に関する議論を行う場を提供しています。



2 教育経験別教育研修の提供

- ・新任教員や、OD (オーバードクター)・PD (ポストドクター)、大学院生などを対象に、教育経験に応じた、教育改善・授業改善に向けた研修の機会を提供しています。

【新任教員対象】

- ・年に一度、新任教員を対象として新任教員教育セミナーを開催しています。このセミナーは、＜京都大学らしい教育とはどのような教育か＞を考え、＜そつうした教育を行うためにどのような教育リソース・サポートがあるのか＞＜大学・部局や教員はどのような教育課題を抱え、それにどう取り組んでいるか＞を知ってもらふことを目的としています。



【OD・PD対象】

◆「文学研究科プレFDプロジェクト」

- ・文学研究科とFD研究検討委員会が共同で主催する「文学研究科ODによる連続公開セミナー」とその検討会」を支援しています。これは文学研究科OD向けのPFF (Preparing Future Faculty) プログラムであり、大学教員を目指す彼らに教育研修の場を提供する試みです。
- ・ODを非常勤講師として雇用して学部生向けのリレー講義を担当してもらふことで、教育研修の場を提供するのみならず、学内施設の使用を可能にさせるなど、彼らに対して有形無形の支援を行うことを目的としたものです。

◆「小中高連携推進事業—サイエンス・コミュニケーション—プロジェクト」

- ・京都大学で博士号を取得した若手研究者を対象としたプロジェクトです。若手研究者は、自身の研究テーマに関連させながら提供できる授業テーマを考え、それを基に全国各地の学校に募集を行い、各学校での出前授業や京都大学を訪れた生徒に対するオープン授業を行います。
- ・出前授業では、聴き手の知識を考慮し、研究の意義や面白さを伝えるために様々な工夫を行うことが必要となります。研究の意義や重要性を他者に伝える作業、自分自身の授業のあり方について振り返る作業を通して、若手研究者が伝える力や企画力、共感力を磨くことをめざしています。

【大学院生対象】

◆「大学院生のための教育実践講座」

- ・大学教員をめざす大学院生を対象にした講座で、FD研究検討委員会の主催で年に1回開催されています。
- ・本講座はベージックとアドバンスの2つのコースからなります。

＜ベージックコース＞

- ・担当教員によるミニ講義で現在の大学教育がはかれた状況や課題を学び、またグループディスカッションなどを通して、大学授業を受けてきた経験を振り返りつつ、大学で教えることがどのような課題を抱えているのかを考える機会を設けています。

＜アドバンスコース＞

- ・具体的に大学の授業を構成する際にていく課題を共有するために、参加者による模範公開授業を実施し、それについてディスカッションをする場を設けています。



3 大学教育実践に関する研修・交流の場の提供

【大学教育研究フォーラムの開催】

- ・全国の大学・教員によるFDや教育改善に関する最新の取り組みや情報を集約し、参加機関の相互の情報提供・相互研修をはかっています。毎年3月に本センター主催で開催され、自由に参加・研究発表が可能です。

【大学生研究フォーラムの開催】

- ・キャリア教育を含めた教育改善やFDを学生の視点から検討するとともに、正課・正課外にわたる学生と学びの成長について考えるものです。毎年1回、公益財団法人電通育英会、東京大学・大学総合教育研究センターとの共催で開催されます。

【FDオンライン環境の提供】

- ・全国のFDや教育改善の取り組みをオンライン上で公開・共有するためのサイト「MOST」を構築し、全国の大学教員などを対象にこのオンライン環境を提供しています。MOSTを利用するための講習会も開催しています。

▶ <https://online-fd.org>



【関西地区FD連絡協議会の活動支援】

- ・関西地区FD連絡協議会の代表幹事校・事務局として、関西地区の大学によるFDネットワークを形成し、教育改善や実践に関するワークショップや研修会の開催・運営をサポートしています。これらのワークショップや研修会は京都大学の教職員であればどんなでも参加可能です。

＜ワークショップ・研修会の例＞

- ◆「「思考し表現する学生を育てる」一書くことをどう指導し、評価するか？」
- ◆「授業評価ワークショップ」―授業評価の効率的実施と効果的活用―
- ◆「授業の基本ワークショップ」

▶ <http://www.kansai-fd.org/>



編集：高等教育研究開発推進センター

松下 佳代 教授
田口 真奈 准教授
半澤 礼之 特定助教

取材協力：学術情報メディアセンター

喜多 一 教授
堀江 正剛 教授
中村 裕一 教授
土佐 尚子 特定教授
元木 環 助教

情報環境機構

図書館機構

古賀 崇 准教授
赤澤 久弥 附属図書館情報サービス課参考調査掛長

総合博物館

岩崎 奈緒子 教授

障害学生支援室

村田 淳 障害学生支援コーディネーター

国際交流推進機構

森 純一 教授

カウンセリングセンター

青木 健次 センター長・教授

キャリアサポートセンター

梅田 幹雄 特任教授

女性研究者支援センター

大塚 典子 特任教授

高等教育研究開発推進機構

学務部共通教育推進課

II-5. 第7回工学部教育シンポジウム

京都大学高等教育研究開発推進センター（以下、「本センター」とする）は、京都大学工学部との学内連携の一環として、平成23年12月2日に開催された「第7回工学部教育シンポジウム」に参加した。当日は本センターの大塚雄作教授と高橋雄介特定助教が「最近の大学教育の動向について」というタイトルで話題提供をおこなった。ここでは、同シンポジウムのプログラムと大塚教授と高橋助教の発表スライドを資料として添付することで活動報告に代える。

1. プログラム

日時 平成22年12月2日（金） 16:30～19:00

場所 京都大学桂キャンパス 桂ホール

司会 田中 庸裕 教授（新工学教育プログラム実施専門委員会委員長）

時間	プログラム	発表者
16:30～16:35	開会挨拶	工学部長 小森 悟
16:35～17:05	話題提供 「最近の大学教育の動向について」	高等教育研究開発推進センター 大塚 雄作 高橋 雄介
17:05～18:05	教育改善に向けて 「私の授業－アンケート結果を受けて－」	① 建築学科 竹脇 出 ② 情報学科 奥乃 博 ③ 工業化学科 安部 武志
18:05～18:20	委員長報告	新工学教育プログラム 実施専門委員会委員長 田中 庸裕
18:20～	ディスカッション	

（高橋 雄介、大塚 雄作）

2011年 12月 2日
京都大学工学部・教育シンポジウム

最近の大学教育の動向について

—— 学生調査の工学部の特徴を踏まえて ——

高等教育研究開発推進センター
大塚雄作・高橋雄介

◆大学教育を動かす中教審答申

▶『学士課程教育の構築に向けて』（2008年12月）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm

□ 三つのポリシー

- ・ディプロマ・ポリシー 学位授与方針
- ・カリキュラム・ポリシー 教育課程方針
- ・アドミッション・ポリシー 学生受け入れ方針

□ 教育活動を支える仕組みとして

- ・FDの実質化
- ・質保証

◆学位授与の方針に関して

▶ 学習成果 (learning outcomes) への着目
→ 「学士力」の明確化と評価 → 学位授与

(1) 学位授与の方針について

他の先進国では「何を教えるか」より「何が出来るようになるか」を重視した取組が進展
一方、我が国の大学が掲げる教育研究の目的等は総じて抽象的
学位授与の方針が、教育課程の編成や学修評価の在り方を導くものとなっていない
大学の多様化は進んだが、学士課程を通じた最良の共通性が重視されていない

・大学は、卒業に当たっての学位授与の方針を具体化・明確化し積極的に公開
・国は学士力に関し、参考指針を提示

【学士力に関する主な内容】

1. 知識・理解 (文化・社会・自然 等)
2. 汎用的技能 (コミュニケーションスキル、数量的スキル、問題解決能力 等)
3. 態度・志向性 (自己管理能力、チームワーク、倫理観、社会的責任 等)
4. 総合的な学習経験と創造的思考力

◆教育課程の方針に関して

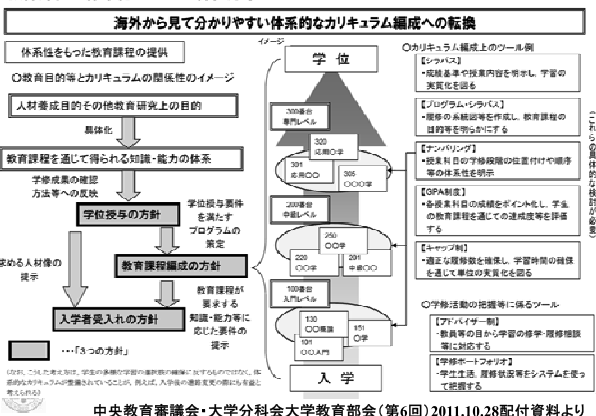
▶ 単位制度の実質化 → 15回授業・キャップ制・etc.
▶ 成績評価の厳格化 → GPA
▶ カリキュラムの順次化・体系化
→ ナンバリング コア・カリキュラム

(2) 教育課程編成・実施の方針について

・学修の系統性・順次性が配慮されていないとの指摘
・学生の学習時間が短く、授業時間外の学修を含めて45時間で1単位とする考え方が徹底されていない
・成績評価が教員の裁量に依存しており、組織的な取組が弱いとの指摘

・順次性のある体系的な教育課程を編成
・国は分野別のコア・カリキュラム作成を支援
・学生の学習時間の実態を把握した上で、単位制度を改善
・成績評価基準を策定し、GPA等の客観的な評価基準を適用

教育課程の体系化のための各種方策について

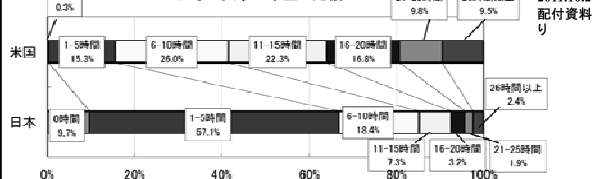


◆日本の大学生の学習時間の問題

▶ 日本の大学生の学習時間は4.6時間/日であり、大学設置基準の要請や国際的な水準である8時間程度/日の約半分の学修量。

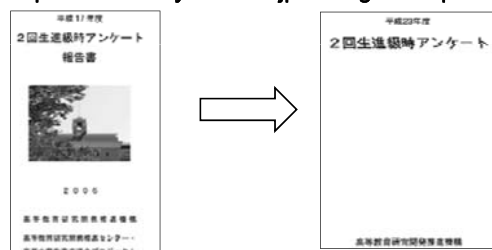


授業に関連する学習の時間(1週間あたり)
日本の大学一年生の比較



2回生進級時アンケートから (工学部のみ抽出) 2005～2011年度

<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/link.cgi?t=inspection>



6

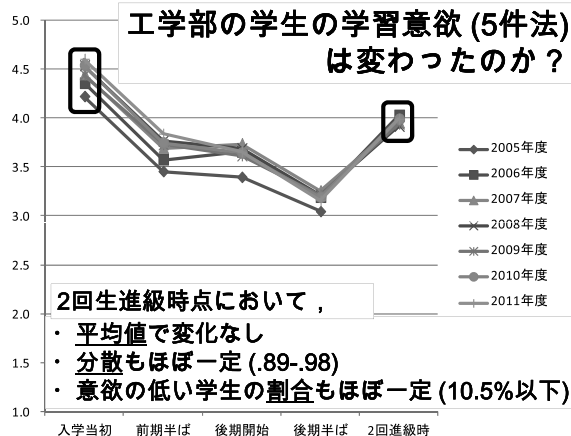
2回生進級時アンケート (工学部のみ抽出): 2005年度から2011年度までの7か年分の経年集計

	回答総数	男性	女性
2005年度	722	670	52
2006年度	327	296	31
2007年度	343	318	25
2008年度	445	409	36
2009年度	463	425	38
2010年度	438	399	39
2011年度	496	449	47

※ 2007年以降の調査ではweb調査を導入 (紙媒体も併用)

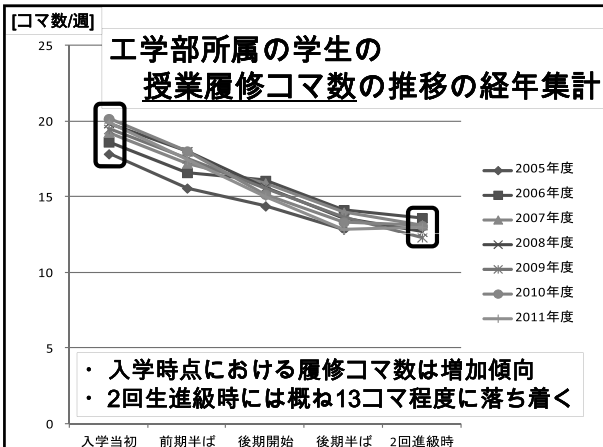
7

工学部の学生の学習意欲 (5件法) は変わったのか？



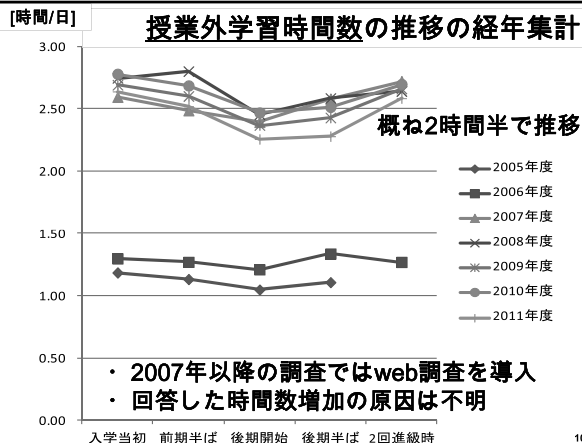
8

工学部所属の学生の 授業履修コマ数の推移の経年集計



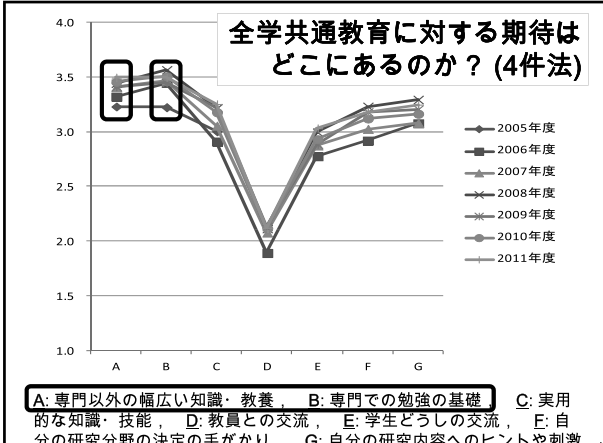
9

授業外学習時間数の推移の経年集計

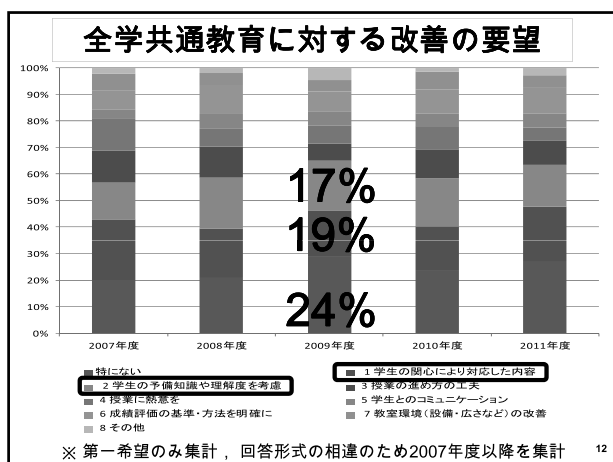


10

全学共通教育に対する期待は どこにあるのか？ (4件法)

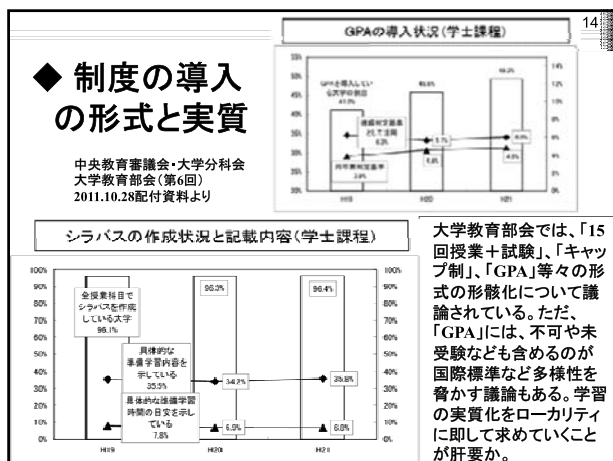


11



2回生進級時アンケート（工学部のみ抽出）： 2005年度から2011年度までの7か年分の経年集計

- ・ 学習意欲・授業履修コマ数は、入学時点において上昇・増加傾向
- ・ 2回生進級時においては、平均値・分散・割合のどの側面においても顕著な変化なし
- ・ 授業外学習時間数は1日あたり2時間半で平行推移
- ・ 全学共通教育科目に対する主な期待は「専門以外の幅広い知識・教養」と「専門での勉強の基礎」で経年的に一貫
- ・ 全学共通教育科目に対する改善の要望は「学生の関心により内容」と「学生の予備知識や理解度を考慮」で経年的に一貫し、それらで改善の要望の3分の1を占める



◆ その他の課題

- ・ 入試改革・初年次教育・FD実質化・教員評価・大学評価（質保証）の改革・情報公開・キャリア教育・グローバル化対応・・・

- (3) 入学者受入れの方針について
- ・ 大学全入時代を迎え、入試によって高校の質保証や大学の入口管理を行うことが困難
 - ・ 特定の大学をめぐる過度の競争
 - ・ 総じて、学生の学習意欲の低下や目的意識が希薄化
- (4) その他
- ・ ファカルティ・ディベロップメント（FD）は普及したが、教育力向上に十分つなげていない
 - ・ 設置認可は弾力化されたが、質保証の観点から懸念すべき状況も見られる
 - ・ これらの活動に係る財政支援が不可欠

◆ その他の中教審答申

『グローバル化社会の大学院教育——世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために』（2011.1.31答申）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301929.htm

- 学位プログラムとしての体系的教育の確立
- グローバル化対応
- 多様なキャリアパスの確立 etc.

『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』（2011.1.31答申）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm

→ 大学設置基準の改正

『大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生指導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする。』



II-6. サイエンスコミュニケーター・プロジェクト

1. はじめに

「平成 23 年度スーパー・サイエンス・スクール事業—サイエンス・コミュニケーター・プロジェクト—」は、京都大学で博士号を取得した若手研究者を対象としたプロジェクトである。若手研究者は、自身の研究テーマに関連させながら提供できる授業テーマを考え、それを基に全国各地の学校に募集を行い、各学校での出前授業や京都大学を訪れた生徒に対するオープン授業を行う。

若手研究者にとって、自分自身の研究内容について専門家以外の聴き手を対象に話す機会は限られている。出前授業では、聴き手の知識を考慮し、研究の意義や面白さを伝えるために様々な工夫を行うことが必要となる。本事業は教育推進部と高等教育研究開発推進センターの連携で進められたが、センターの事業の中では将来大学教員を目指す大学院生や若手研究者に対するプレ FD (Preparing Future Faculty) として位置づけられる。本事業では、研究の意義や重要性を他者に伝える作業、自分自身の授業のあり方についてふり返る作業を通して、若手研究者が伝える力や企画力、共感力を磨くことを目指している。このような経験は、今後研究を続けていく上で様々な場面で役立ち、大学教員を希望する者にとっても非常に有意義な経験となると思われる。出前授業を受ける生徒にとっては、若手研究者と交流し、高度な専門的知識をわかりやすく伝えてもらうことにより、知的好奇心を刺激され、学ぶことの面白さや研究への興味関心を深める貴重な機会となるだろう。

本年度は、16 名の若手研究者が参加し、49 校に対して出前授業またはオープン授業を実施した。今回の募集に対する応募学校数はのべ 98 校であり、学校側の関心も高いことがうかがえる。若手研究者には、本事業の趣旨を理解するためのオリエンテーションや授業前の事前研修、授業後の実施報告会の参加、各担当授業後の実施報告書の提出が求められ、全てのプログラムに参加することにより修了証が授与された。事前研修、実施報告会では、模擬授業や授業実施報告、ディスカッションなどを通して、様々な分野の若手研究者と意見を交わし、自身の研究内容や授業について理解を深める機会となったと思われる。

以下では、オリエンテーションと事前研修、実施報告会のプログラム、そして若手研究者の本事業に対する意識について尋ねたアンケートの結果を掲載する。また、資料として担当授業・講師一覧と実施状況一覧、応募学校・出前授業等実施学校数についてまとめた資料を掲載する。また、本事業に関する詳細は、「平成 23 年度スーパー・サイエンス・スクール事業—サイエンス・コミュニケーター・プロジェクト事業報告書」としてまとめられる予定である。

2. 研修プログラム

2-1. オリエンテーション

日時：2011 年 5 月 30 日（水）15:00～16:00

場所：京都大学吉田南 1 号館 1 階会議室

【オリエンテーションプログラム】

1. オリエンテーション開会の挨拶 高等教育研究開発推進センター センター長 田中毎実
2. 本プロジェクトの概要、目的について 教務企画課 清水克哉

3. スケジュールと事務手続きについて 教務企画課 田平亜美子
4. 自己紹介
5. 参加に当たっての心構え、留意点 高等教育研究開発推進センター 特定助教 半澤礼之
6. 質疑応答

2-2. 事前研修会

日時：2011 年 7 月 8 日（木）13:30～18:30

場所：京都大学吉田南 1 号館 1 階会議室

【事前研修プログラム】

13:30～ 研修会開会の挨拶

高等教育研究開発推進センター センター長 田中每実

13:40～ 参加者の自己紹介

13:50～ サイエンス・コミュニケーター・プロジェクト事前アンケート

14:00～ ミニ講義①学校での立ち振る舞い：ビジネスマナーについて
学務部教務企画課 清水克哉

14:25～ ミニ講義②授業方法の工夫：昨年度の出前授業の経験から

司会：高等教育研究開発推進センター 特定助教 半澤礼之

霊長類研究所 生体保全分野 教務補佐員 郷もえ

理学研究科 研究員(グローバル COE) 岸田拓士

14:50～ 模擬授業のグループ分けと説明、移動・授業準備

15:10～ 前半グループ模擬授業（10 分×4 名 ディスカッション約 40 分）

16:40～ 後半グループ模擬授業（10 分×4 名 ディスカッション約 40 分）

18:05～ 各グループの報告

18:15～ 全体のまとめと研究会閉会の挨拶

高等教育研究開発推進センター 教授 大塚雄作

高等教育研究開発推進センター 特定准教授 及川恵

2-3. 実施報告会

日時：2011 年 11 月 30 日（木）15:00～17:00

場所：京都大学吉田南 1 号館 1 階会議室

参加者：教育推進部 2 名、高等教育研究開発推進センター教員 4 名、プロジェクト参加者 16 名

【実施報告会プログラム】

15:00～ プロジェクト実施概要報告

学務部教務企画課 清水克哉

15:05～ 若手研究者によるプロジェクト参加報告

16:20～ 全体討論：サイエンスコミュニケータープロジェクトをより良いものにするには

司会：高等教育研究開発推進センター 特定助教 半澤礼之

16:25～ 高等教育研究開発推進センター教員からのコメント

高等教育研究開発推進センター 教授 大塚雄作

高等教育研究開発推進センター 教授・センター長 田中每実

16:40～ 修了証明書授与

高等教育研究開発推進センター 教授・センター長 田中每実

3. 参加者の感想

事前研修と実施報告会のそれぞれで、出前授業に対する意識を問うアンケートを行った。その結果を図1、表1、2に示す。図1は出前授業参加の目的について7件法で尋ねたものである。この結果からわかるように、出前授業参加の目的について前後で若干変化が見られた。

表1、2は参加者に対する自由記述調査の結果を内容別にカテゴリーにまとめたものである。表1からわかるように、本事業に参加した若手研究者は、出前授業を行う前に、自分の授業について「子どもたちの理解・関心」「授業内容の絞り込み」「授業時間」「授業の進め方」「授業準備」といった事柄について不安を感じていることが示された。また、表2からわかるように、本事業に参加した若手研究者は、出前授業を行った後に、自分の授業について「子どもたちの学びの深化」「授業内容」「授業の進め方」「学校との関係」「生徒の特徴の把握」「本事業への意見・感想」といった事柄に問題や課題を感じていることが明らかになった。

■質問1. 出前授業参加の目的 (1.全くあてはまらない～7.非常に当てはまるの7段階)

質問1-1 出前授業を通じて子ども達の成長に寄与すること

質問1-2 出前授業を通じて社会に貢献すること

質問1-3 出前授業を通じて自分の研究能力を向上させること

質問1-4 出前授業を通じて自分の研究を社会に発信する力を向上させること

質問1-5 出前授業を行ったという経歴を自分の就職等に役立てること

質問1-6 出前授業を通じて自分の教育能力を向上させること

質問1-7 出前授業を通じて自分の教育者としての自己課題を明確にすること

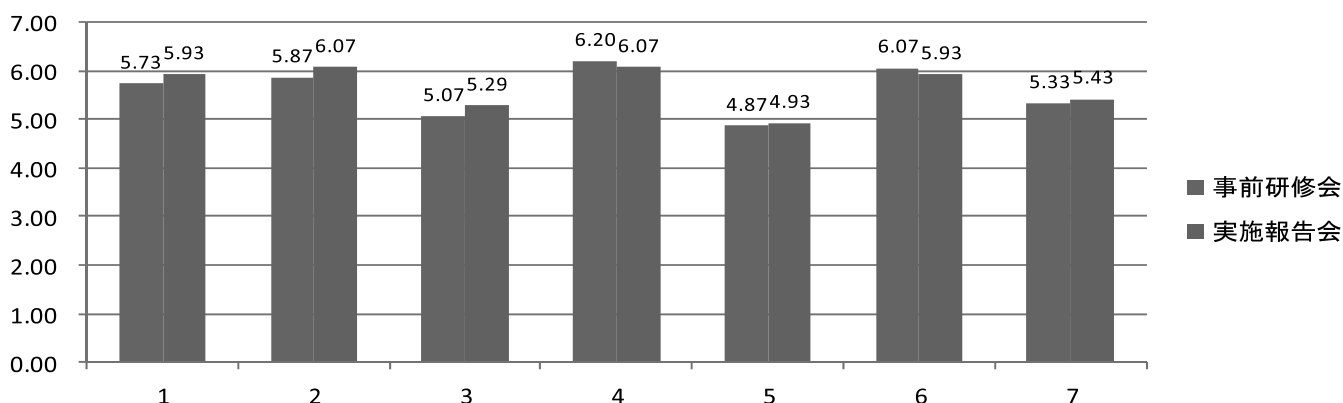


図1. 出前授業参加の目的 (事前研修会と実施報告会の差)

■質問2. 「出前授業を行う上で、授業のやり方や内容に対する不安 (事前研修会)」 「出前授業を行った上で、授業のやり方や内容について問題・課題と感じたこと (実施報告会)」 (いずれも自由記述)

表1. 出前授業を行う上で、授業のやり方や内容に対する不安 (事前研修会)

カテゴリー	自由記述
子どもたちの理解・関心	実験が順調に進み、生徒が面白いと感じてもらえるか。 特に時間が限られた中で今後につながる興味を引き出せたら、と思います。

	中高生を対象とした授業は初めてですので、どこまで内容を分かりやすく伝えることができるかが不安（でかつ楽しみ）です
	授業内容を小学生に理解してもらえるかどうか
	どのくらい子供達が私の講義内容を理解し、おもしろいと思ってくれるかどうか非常に不安である。
授業内容の絞り込み	授業を受ける生徒が、どの程度の知識をもっているかについて（授業を進める上で、設定した難易度、内容が生徒の興味、知識の度合いと合うか、という点
	各テーマの話題・情報をどの程度深く扱うか、説明するか、判断しかねている
	どこまで内容を綴ったうえで、分かりやすく伝えることができるのか、という点に不安を感じています
	中学と高校での授業内容をどう変えるか等が懸念事項です
授業時間	用意した内容が、授業時間内に終わるのかということについて
	授業時間が各学校で違うこと
	時間内に授業を終われるか
授業の進め方	生徒さん同志のディスカッションを盛りあげることができるかどうか
	70名ぐらいの大人数で、標本の観察がきちんと行えるか
	大学での講義のように生徒の意見を取り入れ、回答する形式で授業をしたいが、1回だけなのでどうするか思案している
	聞き手の反応に対応できるか、自分1人で話しつづけていないか
授業準備	生徒に分かりやすい順序でまとめられているか、といった内容の精査に時間がとれるかどうか
	学会での発表とは少し違った環境での授業となりますので、発表、授業の部分よりも、それ以外の面（応対や準備）について、苦労しそうです

表2. 出前授業を行った上で、授業のやり方や内容について問題・課題と感じたこと（実施報告会）

カテゴリー	自由記述
子どもたちの学びの深化	「こちらの考えや意見をできるだけ押し付けないように」ということを思って、授業をしたのですが、あまりにまとめを言葉で伝えなすぎた回があった。「伝えること」「気づいてもらうこと」のバランスが大切であると思った。
	生徒の相互の意見交換をもっととりこめればよかった（パワー・ポイントを用いると、教師－生徒の間の単線的な関係になりがちなので）。答えが容易に出ない問いをどのように答えへ導いていくのかの適切な手引きを与えるのも課題。
	授業テーマについて生徒に興味をもってもらう導入については、ある程度自信をもって行うことができたと思う。一方で、科学について深く考えてもらうこと、実験結果についての考察を深められる工夫が課題だと感じています。一定のやりがいを感じることができた一方、特に生徒の思考にふみ込む授業をしていくためにはまだまだ工夫が必要だと感じています。
授業内容	自分の研究内容をわかりやすく説明することはできていなかった。ケニアの紹介のみだった（気がする）。
	1回きりの出前授業で生徒達に何かを教えるにはある程度基礎知識を基にして体系的である必要があり、自分が本当に教えた事とはずれると思った。やはり大学の授業内容を詰めこんでの短時間1回きりの授業は難しい。

	<p>小学生に対しては授業内容が難しすぎた。</p> <p>話す内容のレベルを下げずにわかりやすく研究を紹介できるようになりたいと思った。生徒さんに媚びたような・・・</p>
授業の進め方	<p>授業内容だけでなく、配布する資料のわかりやすさ、など、副教材を上手に使うことが授業を成功させる鍵であると感じた。</p> <p>授業において、これまで受講者の多くが触れたことのないであろう物事について、受講者の多くが見聞きしたことのないであろう論理について、いかに分かりやすく、受講者がついていけるように説明していくか、これは非常に難しい課題であり、なかなか答えを見出せない。</p> <p>学会での発表、プレゼンと違い、「授業」という形態で行うことの難しさを実際に感じる事ができました。生徒の反応を見ながら臨機応変に話す内容を変えていくのは、場数をふんでいかなければ難しいと感じました。また同じような機会があったときには参加してみたいと思います。</p> <p>人数の多い学校での実習では、補助してくれる学生を連れて行くべきだった。</p>
学校との関係	<p>報告会でも申し上げましたが、会場が大きすぎてスクリーンが見づらかったり、それまでメールで対応頂いた先生が御不在で事前に説明していたことが伝わっていなかったりと、驚くことが多かった。相手のご負担にならない程度で事前の確認をすべきでした。</p> <p>茨木での講義の際に、先方は理科への関心を高めるという要望があったようで、「生徒さんは、でんじろう先生のような授業をしてくれるのでは？と期待しています」と言われ、ちょっと焦りました。今日の話にもありましたが、先方の具体的な要望が事前にもう少し詳しくあるとよりマッチングがよくなるかもしれないと感じました。</p>
生徒の特徴の把握	<p>各学校の授業進度（学習済の内容）を把握しておくべきだった。</p> <p>授業を行う相手（私の担当する講義では高校生）の科目履修状況、興味をもっていることがらをよく調べてから、授業の臨む必要を感じた。</p>
本事業への感想	<p>授業は、事務の方々や先方の学校の皆様のご尽力で非常にスムーズに行うことができました。ありがとうございました。</p> <p>参加した学校の本音が少しでも拾い上げられるようなシステムがあると良いと思う。</p> <p>アンケートには良い事ばかりが書かれていて逆に不安になります。</p> <p>プロジェクトの件ですが、予算の都合上難しいかもしれませんが、ご応募いただいた学校にお断りを入れることになってしまったのがなかなか忍びなく、もういくつか行うことができれば、と思った部分もございました。</p>

(半澤 礼之)

提供授業、担当講師一覧

No.	提 供 授 業	対象	講師（氏名・所属・取得学位）
1	江戸川乱歩は「名探偵」だったの？：乱歩の小説が成立するまで 最初に、乱歩の作品を読んだことがあるか、どのような印象かなどを問いかける。現代では「名探偵コナン」の名前に使われていることで有名かもしれない江戸川乱歩。探偵小説というと難解な印象があるかもしれないが、昭和初期までは、「邪道」な文学であった。そうした時代に、乱歩がどこから小説の「ネタ」を見つけ、トリックを考え出したのか。配布資料を元に講義をしながら、随時問いかけを行って授業を進める。	小5・6 中高	宮本 和歌子 文学研究科 行動文化学専攻 博士（人間・環境学）
2	平安貴族の考えた「京都」 平安貴族が書き記した日記や、貴族の社会で伝承された説話を手がかりにして、平安貴族が自分たちの住む京都を、どのようなところであると考えていたのか、特に京都の内側と外側をめぐる考え方を中心に示したい。平安京の外に新しい街区が出来ていく過程と合わせながら、地図や写真を使ったり、手がかりとなる史料(原文と訳)を示したりしながら授業を行いたい。	小5・6 中高	安藤 哲郎 人間・環境学研究科 地域空間論研究室 博士（人間・環境学）
3	近世日本の海外知識 江戸時代に流入した本・動物・その他の様々な物を画像で紹介しながら、江戸時代の日本と世界とのつながりを具体的に伝える。高校生対象とし、少し欲張って、先行研究の成果と自分の研究内容を詰めて伝えてみたい。また、様々な知識が人のネットワークを介して広く楽しまれたこと、その根底に、人々の好奇心と、身近な物もよく観察する探求心があったことを感じてほしい。	高	益満 まを 人間・環境学研究科 共生文明学専攻 博士（人間・環境学）
4	幸せを心理学する 幸せとは何だろう？ 幸せな人の特徴は？ 幸せになる法則はある？ このような問いに正面から取り組み、生きる意味や目的を探究しようとする心理学が、最近注目されています。心理学の様々な領域にまたがって発展しつつあるこの領域は、ポジティブ心理学と呼ばれています。この授業では、幸福感や生きる意味について、ポジティブ心理学を中心におこなわれてきた最新の知見を、私の研究も交えつつ紹介します。また、それら深く知り、考えるための心理テストも実施する予定です。	中高	浦田 悠 教育学研究科 教育方法学講座 博士（教育学）
5	人生の意味を考える 私は何のために生きているのだろうか——この問題をいろいろな角度から考えたい。この授業を通して、人生へ意味を与えるさまざまな価値をきちんとした理解したり、人生を無意味なものに貶めてしまう「危険な」視点が存在することを学んだりすることができる。最終目標は、自分の納得のいく「人生の意味」を見いだすことである。	高	山口 尚 高等教育研究開発推進機構 博士（人間・環境学）
6	「お茶」からみえる社会・文化・環境問題 一気になるモノから世界を捉える方法－ 私たちの生活に身近な「お茶」は、アジア各地でそれぞれの風土・文化・くらしに合わせ、多様な方法で利用されています。授業では、「お茶」に注目することで見えてくる、共通する文化基層や農業等のくらし、またそれぞれの地域が直面する社会・環境問題について紹介します。また、社会の様々な問題を考える際、関心のある「モノ」・好きな「モノ」が独自の見方・取り組み方を生み出すきっかけになることを示したいと考えています。	小5・6 中高	佐々木 綾子 アジア・アフリカ 地域研究研究科 生態環境論講座 博士（農学）
7	異文化を学び、自分の文化を知る ：ケニアの子供たちの日常生活を学ぼう ケニアに暮らす子供たちの住環境や食生活などを写真資料をつかって紹介していく。その際に日本で暮らす子供たちとの違いがわかるよう説明を加えていく。その後、グループに分かれて、住環境・食生活・学びの機会などのテーマを設定し、グループごとにひとつのテーマを選んでもらって、ケニアの子供たちと自分たちとどう違うのかを指摘してもらい、それぞれの文化の良い点を考えてもらう。	小5・6 中高	坂井 紀公子 アジア・アフリカ 地域研究研究科 アフリカ地域専攻 博士（地域研究）
8	サルも結婚するの？ 結婚は、男女が夫婦になり法的社会的経済的に結びつくことで、人間の世界では普遍的に見られます。では、人と祖先を同じくするサルの社会ではどうでしょう？ サルの社会には、法律でいう結婚はありませんが、特定のオスとメスが社会的に結びつき、特殊な関係を作ることがあります。そしてその結びつき方はサルの種によって様々に異なるのです。授業では様々なサルのオスメスの結びつき方を紹介し、結婚の進化について考えます。	中高	早川 祥子 霊長類研究所 認知学習分野 博士（理学）

No.	提 供 授 業	対象	講師（氏名・所属・取得学位）
9	サルはなぜ群れるのか？ サルの「混群」を通して他種との共存を考える 現在、サルは全世界に約 200 種いるといわれています。多くのサルは群れを作って暮らしていますが、サルの中には、同一種の個体からなる群れを作るだけでなく、異なる種どうしの群れ（混群）を作るサルもいます。アフリカに生息しているサルがどのように異なる種と群れを作り生活しているのかを紹介し、他種との共存について考えたいと思います。	小 5・6 中 高	郷 もえ 霊長類研究所 生態保全分野 博士（理学）
10	古人骨が語る進化と歴史 ヒトの骨から分かる人類の進化や歴史について説明します。ヒトの祖先がどのような骨の形態を持っていたのか学びます。日本人の祖先である縄文時代の人々の生活についてもお話します。また、人骨の標本を観察することで、骨から分かる様々なことについて学習します。	小 5・6 中 高	日下 宗一郎 理学研究科 自然人類学研究室 博士（理学）
11	『生物多様性』って何だろう？ －海を泳ぐ羊膜動物たちの研究を通して－ クジラやウミヘビなど、生息する場所を陸から海へと移した動物の体のつくりや遺伝子などは、私たち陸上動物とはいろんな面で大きく違ってしています。それには、どのような進化的な理由が存在するのでしょうか？私が研究に使っている標本などを見ながら、現代の進化生物学研究の一端を紹介して、進化がもたらした生物多様性という概念について一緒に考えたいと思います。	中 高	岸田 拓士 理学研究科 動物系統学研究室 博士（理学）
12	宇宙へ向かう箱舟を考えてみる もし今、地球外惑星に、移住しなければならないとしたら、何を持って行きませんか？ コメとかムギとか必要そう。 樹木が無い世界では、酸素が無くなる？？ ゾウとかパンダとか捨てがたい。 ゴキブリは？蚊は？ もしもこの世になかったら、どうなる？ 人間だって、みんなは連れて行けないのかも・・・ この“宇宙箱舟問題”は、ある種極端な“舞台”を設定しています。 普段の生活の中では見えにくい現代の問題をみんなで考えてみましょう。	高	水町 衣里 物質－細胞統合システム 拠点／総合博物館 科学コミュニケーション グループ 博士（農学）
13	きのこに学ぶ木の食べ方～バイオマス変換について【90 分授業】	高	西村 裕志 エネルギー理工学研究所 生体エネルギー研究分野 博士（農学）
14	きのこに学ぶ木の食べ方～バイオマス変換について【180 分授業】 身近な食べ物として知られている「きのこ」であるが、微生物として違った視点から見ることによる発見と広がりを感じてもらう。きのこの“化学”を通して、きのこがどのようにして木を分解しているのか？という疑問を最先端の分析手法を紹介しながら解説して一緒に考えていく。また木質バイオマス変換や役に立つ物質生産に向けた試みを紹介する。プロジェクターを使用、その他、簡単な観察と実験を行う予定。		
15	ナノの世界から生命現象を見てみよう 生物の細胞は、目には見えないタンパク質、脂質のような分子によって複雑に構成されたものである。本講義では、見えない分子をどのようにしたら可視化できるかについて、生徒にはグループ単位で議論・意見交換を行ってもらおう。各々の考えを検証しながら、実際に細胞を構成する分子を可視化する手法が開発されてきた歴史を紹介し、肉眼では見えない分子が起こす生命現象を可視化し、その意義を解き明かす最先端の研究成果を紹介する。	高	高橋 寛英 生命科学研究科 分子情報解析学分野 博士（生命科学）
16	植物の細胞を「見る」研究って、どんなことをするの？ 植物の細胞が見せる面白い動態について紹介します。細胞が実際にはどのようにして観察されているのかについて、最新の顕微鏡から得られる生のデータを紹介します。また、『見る』ということから、どのようにして研究が進めるのか、自身の研究を元にお話しします。単に話を聞くだけでなく、「どのようにして研究を進めるのか？」「観察結果からどんなことがわかるのか？」について、積極的に議論してもらえようようにしていきます。	高	島田 貴士 農学研究科 植物病理学研究室 博士（理学）
17	素数と約数の話 素数や約数といった、整数に関する基本的な概念に触れ、数学の世界には単純だがいまだに解決されていない問題が多数存在することを紹介したい。また、できれば、素数や約数などの実用的な応用にも触れたい。	高	山田 智宏 理学研究科 数学教室 博士（理学）

Ⅱ－6. 資料 2

実施状況一覧

No	提供授業	講師	実施校名	実施場所	対象	人数	実施日	位置づけ
1	江戸川乱歩は「名探偵」だったの？ ：乱歩の小説が成立するまで	宮本 和歌子	大阪府東大阪市立柏田中学校	大阪府	中2	60名	8月30日(火)	正規授業
			島根県江津市江津中学校	京都大学	中2	81名	9月15日(木)	正規授業
			京都市立境谷小学校	京都府	小6	53名	10月11日(火)	正規授業
			京都府南丹市立富本小学校	京都大学	小5・6	39名	10月27日(木)	正規授業
2	平安貴族の考えた「京都」	安藤 哲郎	熊本信愛女学院中学校	熊本県	中2	53名	8月22日(月)	課外授業
			大阪府立四條畷高等学校	京都大学	高1	22名	8月24日(水)	課外授業
			愛知県豊川市立赤坂小学校	愛知県	小6	56名	10月11日(火)	正規授業
			岐阜市立木之本小学校	京都大学	小6	42名	10月13日(木)	課外授業
3	近世日本の海外知識	益満 まを	佐賀県立唐津東高等学校	佐賀県	高1・2	45名	9月16日(金)	課外授業
			愛知県立横須賀高等学校	愛知県	高2	25名	10月24日(月)	課外授業
4	幸せを心理学する	浦田 悠	青森県立弘前高等学校	青森県	高1・2	80名	9月5日(月)	課外授業
			山梨県北杜市立白州中学校	山梨県	中3	26名	9月22日(木)	正規授業
			熊本県立第一高等学校	熊本県	高1～3	75名	9月30日(金)	課外授業
			茨城県猿島郡境町立境第二中学校	茨城県	中1～3	248名	10月28日(金)	正規授業
5	人生の意味を考える	山口 尚	富山県立氷見高等学校	京都大学	高2	44名	8月25日(木)	課外授業
			長崎県立長崎東高等学校	長崎県	高2	136名	9月14日(水)	正規授業
6	「お茶」からみえる社会・文化・環境問題 －気になるモノから世界を捉える方法－	佐々木 綾子	鈴鹿中学校・高等学校	京都大学	中3	70名	8月1日(月)	課外授業
			熊本県阿蘇郡産山村立産山小学校・中学校	熊本県	小5～中3	65名	8月29日(月)	課外授業
			富山県立南砺福野高等学校	富山県	高1～3	28名	9月3日(土)	正規授業
			徳島市立内町小学校	徳島県	小5・6	54名	10月12日(水)	正規授業
7	異文化を学び、自分の文化を知る ：ケニアの子供たちの日常生活を学ぼう	坂井 紀公子	山梨県立日川高等学校	山梨県	中3～高2	63名	11月12日(土)	課外授業
			高知県安芸郡奈半利町立奈半利中学校	高知県	中1～3	63名	10月17日(月)	正規授業
			大阪府池田市立池田中学校	大阪府	中3	16名	10月27日(木)	課外授業
			山形県立庄内総合高等学校	山形県	高3	36名	11月14日(月)	正規授業
8	サルも結婚するの？	早川 祥子	三重県津市立栗真小学校	三重県	小5・6	37名	11月24日(木)	正規授業
			佐賀県立武雄高等学校	佐賀県	高2	83名	7月14日(木)	正規授業
9	サルはなぜ群れるのか？ サルの「混群」を通して他種との共存を考える	郷 もえ	横浜市立桜丘高等学校	神奈川県	高1・2	34名	8月8日(月)	課外授業
			奈良学園登美ヶ丘中学校	奈良県	中1	77名	7月26日(火)	課外授業
10	古人骨が語る進化と歴史	日下 宗一郎	大阪府堺市立原山台東小学校	大阪府	小6	67名	9月27日(火)	正規授業
			山口県長門市立俵山中学校	山口県	中1～3	28名	9月30日(金)	正規授業
			大阪府東大阪市立孔舎衛小学校	大阪府	小6	162名	10月21日(金)	正規授業
11	『生物多様性』って何だろう？ －海を泳ぐ羊膜動物たちの研究を通して－	岸田 拓士	鈴鹿中学校・高等学校	京都大学	中3	62名	8月1日(月)	課外授業
			和歌山県立田辺中学校	和歌山県	中3	78名	10月18日(火)	正規授業
			徳島県立富岡西高等学校	徳島県	高1・2	76名	10月25日(火)	正規授業
			山口県山口市立白石中学校	山口県	中3	70名	11月10日(木)	正規授業
12	宇宙へ向かう箱舟を考えてみる	水町 衣里	広島県立広島高等学校	広島県	高2	228名	11月15日(火)	正規授業
			愛媛県立今治西高等学校	愛媛県	高2	47名	9月28日(水)	正規授業
			京都府立亀岡高等学校	京都府	高1	38名	10月15日(土)	課外授業
13	きのこに学ぶ木の食べ方 ～バイオマス変換について【90分授業】	西村 裕志	清風南海中学校・高等学校	大阪府	中3～高3	61名	10月29日(土)	課外授業
			愛媛県立新居浜東高等学校	愛媛県	高2	40名	11月1日(火)	正規授業
14	きのこに学ぶ木の食べ方 ～バイオマス変換について【180分授業】	西村 裕志	山梨県立甲府南高等学校	山梨県	高1	38名	9月24日(土)	課外授業
			福島県立福島高等学校	福島県	高1・2	61名	10月24日(月)	正規授業
15	ナノの世界から生命現象を見てみよう	高橋 寛英	島根県立松江南高等学校	島根県	高1・2	56名	10月27日(木)	正規授業
			広島市立基町高等学校	広島県	中3～高3	33名	10月31日(月)	課外授業
			島根県立出雲高等学校	島根県	高1～3	51名	7月28日(木)	正規授業
16	植物の細胞を「見る」研究って、どんなことを するの？	島田 貴士	京都府立乙訓高等学校	京都府	高2	24名	9月17日(土)	課外授業
			茨城県立日立第一高等学校	茨城県	高2	36名	7月24日(日)	正規授業
17	素数と約数の話	山田 智宏	大阪府立天王寺高等学校	大阪府	高1～2	61名	9月8日(木)	課外授業
			静岡県立高等学校	静岡県	高1	42名	9月16日(金)	正規授業
			愛媛県立野村高等学校	愛媛県	高1～3	27名	10月1日(土)	課外授業

※ 人数は授業実施後の生徒・生徒用アンケート回収数にて集計

合計 3097名

応募学校・出前授業等実施学校数表

【応募学校数】

都道府県名	小学校	中学校	中高一貫校	高等学校	計
北海道					
(小計)					0
東北地方				2	2
青森県					
岩手県					
宮城県	1				1
秋田県				1	1
山形県				2	2
福島県				2	2
(小計)	1			7	8
関東地方	1	1		2	4
茨城県					
栃木県					
群馬県				1	1
埼玉県					
千葉県					
東京都	1				1
神奈川県				1	1
(小計)	2	1		4	7
中部地方					
新潟県					
富山県				4	4
石川県					
福井県					
山梨県		1		2	3
長野県	1				1
岐阜県	2			1	3
静岡県				2	2
愛知県	2			4	6
(小計)	5	1		13	19
近畿地方	2		1	2	5
三重県					
滋賀県		1			1
京都府	4	1	2	5	12
大阪府	5	2	1	4	12
兵庫県					
奈良県			2		2
和歌山県		2		1	3
(小計)	11	6	6	12	35
中国地方				1	1
鳥取県					
島根県		1		2	3
岡山県					
広島県	2		1	1	4
山口県		2			2
(小計)	2	3	1	4	10
四国地方	1			2	3
徳島県					
香川県					
愛媛県				3	3
高知県		1			1
(小計)	1	1		5	7
九州・沖縄地方				1	1
福岡県					
佐賀県			1	1	2
長崎県		1			1
熊本県	2	3		1	6
大分県					
宮崎県					
鹿児島県				1	1
沖縄県					
(小計)	2	4	2	4	12
総 計	24	16	9	49	98
	24%	16%	9%	50%	

【実施学校数】

都道府県名	小学校	中学校	中高一貫校	高等学校	計
北海道					
(小計)					0
東北地方				1	1
青森県					
岩手県					
宮城県					
秋田県					
山形県				1	1
福島県				1	1
(小計)				3	3
関東地方		1		1	2
茨城県					
栃木県					
群馬県					
埼玉県					
千葉県					
東京都					
神奈川県				1	1
(小計)		1		2	3
中部地方					
新潟県					
富山県				2	2
石川県					
福井県					
山梨県		1		2	3
長野県					
岐阜県	1				1
静岡県				1	1
愛知県	1			1	2
(小計)	2	1		6	9
近畿地方	1		1		2
三重県					
滋賀県					
京都府	2			2	4
大阪府	2	2	1	2	7
兵庫県					
奈良県			1		1
和歌山県		1			1
(小計)	5	3	3	4	15
中国地方					
鳥取県					
島根県		1		2	3
岡山県					
広島県			1	1	2
山口県		2			2
(小計)		3	1	3	7
四国地方	1			1	2
徳島県					
香川県					
愛媛県				3	3
高知県		1			1
(小計)	1	1		4	6
九州・沖縄地方					
福岡県					
佐賀県			1	1	2
長崎県			1		1
熊本県	1	1		1	3
大分県					
宮崎県					
鹿児島県					
沖縄県					
(小計)	1	1	2	2	6
総 計	9	10	6	24	49
	18%	20%	12%	49%	

【正規授業・課外別応募学校数】

正規授業	53	54%
課外	44	45%
(不明)	1	1%
計	98	

【正規授業・課外別実施学校数】

正規授業	28	57%
課外	21	43%
計	49	

【実施希望場所別応募学校数】

受講校等	82	84%
京大	16	16%
計	98	

【実施希望場所別実施学校数】

受講校等	43	88%
京大	6	12%
計	49	

